
ガリア

克太タツミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガリア

【Zコード】

Z7577E

【作者名】

克太タツミ

【あらすじ】

謎の石「トウワンボ」の発見により、18世紀から分岐した20世紀のヨーロッパ。その石の力によって動く鋼鉄人形「ガリア」は、偶然から、ある魂が宿る事で甦り、意志を持つ。そして自分の中の魂に従い、ある男を殺す運命を担う。その相手とは、遠い昔自分自身を創った産みの親、そして魂の肉体を奪った男、科学者のゾッドだった。

「お前、よそ者かい？」

藍色の空が茜に変わる頃、通りを歩いてきた男に老婆が声をかけた。町はまだ暗闇に包まれひつそりとしていたので、男は自分以外の人間がいるとは考えてもみなかつた。だがそれでも男は驚きを微塵も見せず、ただその存在に敬意を表して立ち止まり、老婆の質問に黙つて頷いた。

「ん？ そんなことより私が何をしているのか聞きたいって具合かね？」

男がうなずくそぶりに老婆は気づかなかつた。それは暗闇だけのせいではない。

「私はね、死がやつて来るのを待つているんだよ。毎晩ね。でもどうやら今晚も来ないらしい……」

「死にたいのか？」

男は言つた。老婆には男の声が妙にくべもつて聞こえたが、気にはしなかつた。

「ああ、そうさな。だがお前は死神じゃあないね」「殺して欲しければ」

老婆はすぐにその言葉を断ち切つた。

「お前が？私を殺す？嘘を言い。お前にはできまいよ。フン！確かにお前には殺氣がある。だけどその相手は私じゃない。分かるよ私にはね」

老婆は懐から、こぶし大ほどの水晶球を取り出して見せた。とうより、それは懐から勝手に飛び出し、得体の知れない力で宙にフフフと浮いた。

「水晶がね、妙に騒いだんだ。お前が通りかかった途端にさ。未だに力を失わないでいる貴重品でね。お前の心の中を少しばかりは感じ取ることができるんだよ」

「それは…」

「トウワンの水晶だよ。フフッ…それにしてもこの時代に人殺しとはね」

老婆はクックッと笑った。

「俺が人殺しを？」

「そうさね。水晶はそう告げているね」

老婆は見えることのない瞳を男に向ける。だが男は首を左右に振つた。

「それは間違いだな。殺したいと思っているのは俺じゃない。俺の中に宿る者だ」

それを聞いた老婆は突然、大声で笑いだした。その言葉の一体どこに可笑しさを感じたのか…

「ハー笑わせてくれる…。同じことさね。だけどね、人などいくら

殺した所で変わらないよ。放つて置いても人の世は間もなく終わるんだ。私はそう思うね。だから私も死を待つんだよ」

「人の世がどうなるうと俺には関係ない」

男は老婆に背を向け、再び歩きだした。

「だがね、最後に一つだけ言わせてもらうよ。お前には懐かしい何かがある。とつぐの昔に忘れかけたはずの幼女の頃の夢をね…思い出したんだ。『失われた時代』よりも昔。活気に満ちた時代の匂いがお前にはある。 なんだい、行くのかい?」

「ああ…」

最後に老婆は行つた。

「さよなら」

「サヨウナラ…」

男はつられるように言つと、止めていた足を再び陽の昇る方へと向けた。

山にかかる雲間から最初に飛び出した幾筋もの陽光が、煉瓦造りの町並みを 四角い白い壁を照らした。やがて光は壁をつたい降りて、男の顔を正面から照らす。その顔は無表情で…瞳だけが悲しみと、それでも冷めることのない情熱を宿していた。

目の暗い老婆は、最後まで気づくことはなかつた。男が鋼鉄の仮面を被つていたことを。そしてそれが実は仮面などではなく、素顔であり

人間でもないことを…

強烈な夏の日差しを受けて町並みは白く輝き、ひと氣のない日抜き通りに、セミはせめてもの奉仕とばかりにがなり立てる。そのどこか寂れた光景は、この町の規模からすればなんとも不釣り合いつた。それは暑さのせいだけではない。なぜならこの町がコバルトの海と白い砂浜という、最高のロケーションを持ちながらも人を呼ばないからだ。だがそれはこの町に限つたことではない。活気という言葉が前世代の産物となつてから久しく経つ。今はそんな時代だ。歴史の分岐点となつた日から、百五十年の歳月が流れていた。

大きな荷物を背負つた茶褐色の肌を持つ少女が、町の中央で立ち止まつた。その荷物にも拘わらず、背筋はピンと伸びている。

「さてと、この辺りでいいかな」

町全体に漂う空氣というものがある。それに反するものは、町の人間ならいはずれ出て行くし、外部の人間ならばすぐにそれと知れる。そういうものだ。少女がよそ者であることはすぐに知れた。町の人々は近寄るでもなく、ただ黙つて、個々に觀察を続けていた。それが自分たちにとつて害とならないかを、見極めるために…

少女の肌の色は別に珍しくもなかつたが、ほつそりとした俊敏そうな四肢を恥じらいもなくニヨキリと出し、首、二の腕、手首、足首を、色とりどりの硝子ビーズで巻いて飾り立てたその姿は、この町の人間にしてみればかなり異質だった。それに毛先の揃つていな大雑把なショートボブの黒髪は、お世辞にも女性らしいとは言え

ない。

かつては教皇領と呼ばれ、今も保守的な思想の抜けないこの町の空気とはあまりにも違すぎる。とはいえたまでも少女のすること。害はないと判断した町の住人の一人が、声をかけた。

「ずいぶんと若い行商人だな。一体この町に何を売りに来たんだ?」

少女は、赤い敷物の上に次々に商品を陳列していく。敷物の四隅には、綺麗な深い青の刺繡が施されていた。

「あー、田玉商品並べてから聞いて欲しかったなあ。売り物は見ての通りよ」

少女は全く手は止めずに言った。かなり手慣れている。

「ン…装飾品だな。女モノか。だが言つとくが」この町じやそういうのはあまり　ああ、他にもあんのか

男が見てるうちに、少女は生活雑貨品を並べ始めた。フオーケやナイフといった小物が多く、派手ではないが綺麗な彫金が施されている。それは確かに目を引いたが、男にとつて特に興味を引くものではなかつた。

しかし、男はあるものに目を止める。

「」いやあ、何に使うもんだ?見たことないぜ」

男は、六個の金属球がそれぞれ紐で吊された謎のものを、手に取つて言つた。

「ああ、これはね

」

少女は男の手からそれを奪い返し、地面に置くと、プラプラと揺れる金属球を手で制して止めた。

「見てて」

少女は横一列に並んだ金属球の、一番端の一個を真横に持ち上げ、手を離した。引力に従いブランコのように弧を描いたそれは、横一列に並ぶ他の金属球に当たった。力は次々に金属球を伝達して、逆側の金属球一つだけが弾かれる。そして弾かれた金属球が元に戻つて、横一列に並ぶ金属球に再び当たり というように、両端の金属球が交互に弾け飛ぶ度に、カチツ、カチツ、と心地よい音のリズムを刻んだ。

「へえ！」いやあ面白いな」

「面白いですよ」

少女が感嘆する男に顔を向けて、ニンマリと笑つた。

「で？」

男の質問。少女はその意図が理解できずに表情を固めた。

「ああ、だから。で？これは何に使うもんだい？」

「え？ って それだけだけど」

「エッ、これだけって カチカチ音立てて、時計とかじやねえのかい？」

「違うけど、不満？」

「いや、不満つてーか。その…」

仕事に戻る少女。何やら小さな声でブツブツと囁く。男が耳をそばだると…

「面白いって言つたくせに 大体遊び『ロロリ』てモンがないのよ。最近の大人は…」

眉間はコイル巻きになつて、完全にへソを曲げている。

「あ…えーっと、参つたな。 おつーそれは何だ?なんか凄そうじゃないか。うん、面白そうだ。ハハツ」

わざとらしく声を高める男に対し、少女は何やら、鞄の中から次々と金属のパーツを取り出し、手慣れた手つきで組み立てていく。少女は男の質問に少し間を置いて、不機嫌そうに答えた。

「面白いのはわざの商品…言つとくけどこれは違つの。スゴイってのは当たつてるけどね。びっくりするわよ」

「そりやあ、楽しみだな!」

少女は一瞬だけ目線を合わせ、やがて嬉しそうに笑つた。男はホツとすると同時に、自分が何で機嫌を伺いながら話し掛けているのか、分からなくなってきた。

「これだけ小さくてパワーを得るのには苦労したわ。見てて」

その謎の機械は火を使うようだ。炉のようなものが下にあり、煙突もある。男は最初、持ち運びのできる携帯型のストーブだろうかと考えたが、なぜこの夏のさなかに?と考えると首をひねつた。そんな疑問をよそに、次第に機械の中でキコキコと何かが動き出す。更にシユウシユウ、シユウシユウと不穏な音を立て、白い蒸気を吐き出

し始めた。

「お客様には特別にカバーを外して見せてあげましょうね。本当に特別ですよ、トクベツ！」

少女はニーツコリと営業口調。そして冷房の吹き出し口を思わせる鉄のカバーを外した。すると…

「おお！送風扇か。まだあつたんだな。こりや確かに凄い！」
「でしょうー！」

送風扇　それは古の人々が暑い夏に涼を求めるのに使つた機械で、つまり扇風機のことだ。

「まだ生きた水晶があつたなんてなあ…高いんだろ？」
「トウワソ水晶！？違うわよ。だいたいあたしが持つてるように見える？そんな貴重なもの　大体持つても勿体なくて送風扇の動力源にはしないわ。これは蒸気送風扇。百五十年前に滅びた文明が持つていた『蒸気機関』っていう動力で動いてるの。一説にはその文明はトウワソ王国よりも優れた技術があつたとされているわ。焚書とか言つたかしら？文献がほとんど残つていないからハッキリとしたことは言えないんだけど。その力を復活させたの！」

少女は少し興奮氣味に語り、その余波を受けて男も興奮した。

「あつ！聞いたことはあるぜ。王国に占領される前は、俺の祖先は世界の中心を為す民族だつたんだ。婆ちゃんだつたかな？優れた技術があつたつて聞かされたつけ…。で、お前が復活させたっていうのか？そのナントカ機関つてヤツを」

「お父さんなんだけどね…それは。でもこれを作つたのはあたしよ。

「か、風が…熱い…」

言われるままにプロペラの近くに顔を寄せ、男はいにしえの涼を存分に味わおうとした。がしかし、欠点もあった。

「いや、でもそんな問題じゃなくて、ロマンつていつか その…冬なり暖房として使えるし…。買いません?ウチの田玉商品」

「一ヶ「ココ」と営業スマイル。だが男は顔面を両手で覆い、ゆっくりと汗を拭い取る。もはや少女を見もしない。そして大きく一つ深呼吸 とこうよりため息。顔をゆっくりと左右に振つて拒絶し、無言で去つて行つてしまつた。

「あ、ちよつとオー…」

少女は茫然と立ち去く。

「あらあら。もう…」

その背中に容赦なく熱風が突き刺す。慌ててバルブを緩め、圧力を落とした。

「あーん、もう…ビリビリ。今夜の食事代も稼げなかつたらあー…」

「どうやら少女は一文無しらじご。そしてイジケるよつに小さな声でブツブツとつぶやいた。

「なんでかなあ？トウワンボの力がなくなつたなら、それに代わる新しい力を生み出せばいいのに…。蒸氣機関！カッコイイと思つんだけどどなあ」

少女はベッタリと地面に座り、ただジッと空を仰ぎ見ていた。気が萎えてしまつたのだろう。露店の前に立つ男の存在には、全く気づかない。少女よりもわずかに遅くこの町に入つた『彼』の存在には…

その男は送風扇を長い間見つめ、やがて少女に話し掛けた。

「おー、お前。Hンドリックに行くにはこの道でいいのか？」

その男の声はどこか異質に、少女の脳に届いた。少女は慌てて振り返つて男の存在を知ると、その声の、不思議な音色のわけを悟つた。

男はこの暑さの中、首の回りに布を幾重にも巻き、顔の下半分を隠していた。しかも体も薄茶のマントで、膝の辺りまでスッポリと覆い隠している。

「暑くないの？」

男の質問を完璧に無視し、少女は思わず訊ねる。この夏のさなか、誰もが思う疑問だ。だがその風貌から、誰もが臆して聞けない疑問でもあつた。

不意の質問に男は素直に答える。

「暑いから着てるんだ」

「わ…なの？」

少女は首をひねったが、とりあえず納得することにした。売り込みのチャンスだと気づいたからだ。

「あ、エンドラね。うん、この道で正解。ね、それより何か買つていきません？安くしますから…。それにウチには田玉商品とこうのがありますね」

懲りない。

少女は再びバルブを締め、炉に石炭をくべようとする。男は少女に金貨を差し出した。その手には革の指ぬき手袋。だが驚くのはその下。本来露出するはずの指先と手首が、白い布でグルグル巻きにされている。皮膚という皮膚が完全に隠されているのだ。そしてもう一度、男の顔をよく見なおす。

首に巻かれた布と、赤茶けた髪のせいで見づらいが、間違いない。顔もやはりそう。素顔ではなくて鉄の仮面。それは耳まで覆い、男は一切の露出を拒んでいた。

「100のお金…何？買つてくれるんですか？」

少女は抑揚なく言った。瞳は男の顔を捉えて離さない。心も。

「せつしき食事代がないって言つてたな。だからこれをやる

少女は首を振る。

「理由もなくもらえません。あたしは物、いじやないから…。だったら何か買って下さい。その分の代金なり受け取ります」

男は陳列してある品物に、一瞬だけ顔を向けた。

「欲しいものはない。でもその蒸氣機関はさつき見た。俺が今まで知らなかつた感情が沸き上がつた。その代償だ。できれば受け取つてほしい」

少女の顔色が変わる。

「蒸氣機関を知つてゐるの？」

「まあな」

「良かつたの？」

「ヨカツタ？」

「そう。これを見て、『キツていふか、その…ロマンを感じたとか未来を感じたとかそういう…』

「ああ…。良かつたよ」

男は金貨をピーンーと跳ね、少女の手元に落とした。男は背を向け、歩き出す。

「待つて！」

少女は素早く立ち上がり、男の肩をガツシリとつかんだ。やけに固く感じたが気にしない。

「ねえ、あたしもエンドラに行くといひなの。一緒に行こい！」

少女の突然の行動に、男の動きは止まつた。が

「一緒に行く理由はない」

無愛想に拒絶。

少女は商品を搔き込むように集め、鞄の中に一気に詰め込んだ。送風扇は再びバルブを緩め、そのまま取つ手を握る。男の言葉はまるで無視だ。

「あたしの名前はルカ。ルカ・パンターー。あなたは？」
「パンターー？」

かまわざ行こうとした男の足が、ピタリと止まった。

「そう。あなたは？」

男は振り返り、しばらく少女の方を見たまま動かなかつた。日差しの陰影が強くて顔は…いや、仮面は見えない。

「ガリア…」

男は答えた。

「下は？」
「下？」
「そう、下の名前」
「…」

男は口籠もつた。

「どうしたの？」
「シャ…ゾット…。シャゾットだ」
「ガリア・シャゾットね。分かつた。よろしくね、ガリア！」

少女は男の間近まで寄り、顔を見上げてニッコリ笑った。もちろん観察も兼ねていたのは言うまでもない。

男は避けるように、背を向ける。

「分かつた。エンドラまでだ」

こうして一人は町を出た。それは変化を嫌う町の人間たちを、すこぶる安心させたに違いない。よそ者に偏見を抱く町の人々。だが去つていく一人の姿を見れば、それを責めることもできないだろう。町の空気には合わない一人　いや、何よりも全く季節感の噛み合はない二人は、この時代で唯一といつていい大都市、エンドラへ向かつた。

蒸気列車砲

「来たぞー！蒸気列車砲だー！フイリップ陛下万歳！」

窓の外、そんな興奮した声を聞いて、ゾシード・シャゾシトはイラ立ちを隠さなかつた。普段ならどんな喧騒も、持ち前の集中力で打ち消してしまった粘着力のある彼だが、今は違う。心は窓の外に奪われている。思うに仕事が進まない時によくある逃避 というだけの理由ではない。もちろん、それもあるにはあつたのだが：

「蒸気列車砲だと？ ハン！ 野次馬どもが。フイリップ王も墮ちたもんだ。一体ヴィクトリアにいくらふつかれられたんだ？」

それはもうかなり だが、それでもすがるしかなかつた自國の立場も彼にはよく分かつてゐる。この憎まれ口は単に嫉妬。彼の立場で、最新の技術を見たいと思わないはずがないし、また、それが嫉妬の理由でもあつた。なぜなら彼は優秀な発明家 いや、完成品というものが存在しない彼には、『自称』を付けるのが正しい形容だろう。

いつも目指すハードルが高すぎるのが、理由の全てだ。懲りないとも言つ。そして、どこから出でてくるのか分からぬ全く根拠のない自信を、白髪が混じり始めたこの歳になつても、未だ維持している恐さもあつた。その本人しか預かり知らぬプライドが、蒸気列車砲といつ、まだ見ぬ最新の好奇心の元を押さえ付けていた。しかし

「待て待て……と言つことは来るのか、アレが！」

次の瞬間、彼は外へ駆け出していた。プライドを捨てたのかと言えば、そうではない。列車砲のことなど、もつ彼の頭にはない。もつと見たいものが来る。

「空中都市！」

ゾッドは、皺くちゃの外套を着込みながら叫んだ。それはトウワントン人が生んだ信じがたい奇跡。

蒸気列車砲の構造ならば、彼にも大体は想像がつく。個人で作れる規模のものでないだけだ。しかし空中都市など　もちろんこれも個人で作れるわけはないだろうが、何よりトゥワン人が生み出したその驚異の技術は、構造が全く想像できないし、信じがたい。自分の目で見ない手はないのだ。

「よくぞ我が町に来てくれたってトコだ。都市が浮かぶなどな。奴ら一体どんなマジックを使つたんだ」

彼は恐れない。例えそれが敵のものであつたとしても。そう。ここは間もなく、敵の戦火に曝されようとしているのだ。

「蒸気機関ではあるまい。その次に来るべき発明だ。クソッ！私が見つけたかも知れんものを。ヤツらは手にいれたんだ。なんどしても秘密を暴いてやるぞ！」

そう言つて、ゾッドは部屋を飛び出した。と、思うと突然立ち止まり、振り返つて自分の未完成の発明品を見た。彼は下唇を噛む。そこにはいくつもの等身大の人形のパーツが、手が、足が、無造作に転がっていた。無機質なはずの顔が、恨めしそうにこちらを見る。そんな気がゾッドにはした。

一瞬の静寂。そして彼は大きく一つため息をつく。それは珍しく見せる、彼の弱気だった。

「やはり無理なのか。スチーム・ドール（蒸氣機関人形）を歩ませるなど…」

広場は興奮で沸き立っていた。まるで一昔前にあつた革命を思わせる。兵士はおろか、一部の民衆までもが長身銃を手にしているが、彼らは戦うことなど考へてもいない。なぜなら皆が見つめるそれが！彼らにとつて最強の兵器の存在が！敵を粉碎することを信じて疑わないからだ。

ブシューッ！

勢い良く蒸氣を吹き出すその音には確かに、何びとをも魅了する何かがあった。音だけではない。重厚な鉄の塊が、蒸氣と共にゅっくりとレールの上を力強く進む姿。それは市民たちを勇気づけるには充分だったし、この際それが、他国から買い取ったものだという事実はどうでもよかつた。人々は口々に叫び、繰り返す。

「フィリップ陛下万歳！」

しかし、発明家のゾッドは見抜いていた。その勇ましく、威厳さえ感じさせるゆっくりとした動きが、列車砲の最高速度なのだと云うこと。あまりに長大な砲身と、それに見合つだけの火薬を必要とするこの列車砲では、それほどの耐久性は期待できないということなど。つまりそれは、とても完成された兵器とは言えない代物だった。

だがしおせん、それがこの時代の蒸氣機関であり、製鍊技術なの

だ。『トウワンの奇跡』には遠く及ばない。

「来たぞー、空中都市だ！」

群衆が一斉に見つめる遙か先 霞を押し退けるようにして空中都市は現れた。バベルの塔を思わせるそれは、無数の石を積み上げて作られたと思われる巨大建築物だった。そしてどうこう理屈なんか、確かに宙を浮いていた。

ゾッドはその予想以上の大きさに驚愕した。だが同時に、ある疑問を感じて首をひねつてもいた。

それはトウワンの奇跡に対してもうではない。もちろん空中都市から蒸気を噴き出していくないだらうことは予期していたし、まだ見ぬ技術が謎に満ちているのは当たり前のことだ。彼が気にしたのは、敵の行動に対するだった。

「なぜ空船が飛び出せん？」

空船 それは小さなふたり乗りの船で、空中都市を浮かせていいのと同じ（と思われる）謎の動力によつて、文字通り自在に空を飛ぶことができるトウワン王国の攻撃の要 いわば戦闘機だった。熱気球がやつとのこの時代に圧倒的な力で空を征し、数々の戦いに勝利してきたといつ。

「教皇軍を二日で壊滅させたという自信かよ？ だがもしもそなればチャンスはある。空船が見られないのは残念だが…」

普段なら確かに見たもの全てがひれ伏すに足る、充分なカリスマが空中都市にはあつた。単に威圧だけで無血占領も可能だつたかも知れない。だが、今回に関しては蒸気列車砲という味方側のカリスマが、それを打ち消していた。とはいえ、もしもいつものように空

船の編隊が先陣を切つてきたなら、列車砲は空中都市を射程に捕らえる前に沈黙していただろう。巨大で鈍重な列車砲では、機敏に飛ぶ小型の空船は狙えないからだ。チャンス ゾッドがそう感じたのは正しい。

空中都市は、地上の都市を押し潰すかのごとく低空で飛行し、その巨体を嫌というほど見せつけている。明らかに威圧だ。実際、群衆のさつきまでの意気はどこへ行つたのか、大きく消沈しかけている。列車砲の存在がなかつたら、とうに逃げ出していただろう。だが、逆にゾッドの期待は高まつた。

蒸氣列車砲はその砲身をゆっくりと上げ、狙いを定める。そして、ブシユーッ！ という蒸氣の吐き出す音と共に止まつた。

額から流れ出る汗が目元をつたうのも気にせず、ゾッドはその先にあるものを見た。その瞬間！

ドゴオオオオオオオオオン！

大気が大きく割れ、固体と化したかのような衝撃波が襲つた。

列車砲の轟音と地鳴りは誰の予想をも上回り、人の内に眠る本能が、死さえも覚悟した。列車砲の近くに陣取つていた民衆の一人は、心臓が動かなくなつて果てた。果てることなく生き残つた他の人間も、神経が麻痺するに充分なショックだつた。

弾の巨大さにも拘わらず、弾道を追える者は誰一人としていなかつたが、結果は音で判断できた。爆烈弾の破碎音が響いたのだ。だが誰も沸き立たない。静まり返つたままだ。音のショックから立ち直れないでいる。装弾には長い時を要した。ショックから立ち直つた者達も、ただその静寂を、列車砲の力をジッと見守つていた。

一発目、そして三発目までそれは続き、止まつた。止めたのではなく、實際には大砲の尾栓部の不具合により、弾を打ち出せなくなつたのだが、ゾッドでさえそれには気づかなかつた。三発で充分だったからだ。弾は全て命中し、空中都市からは次々と破片がこぼれ

落ちるのが見える。

「見ろお！暗黒大陸が落ちるぞおつ！」

暗黒大陸 空中都市のことを、多くの者はそう呼ぶ。

誰かが叫んだその言葉通り、空中都市は斜めに大きくバランスを崩した。だがそれでも沈むには至らず、態勢を立て直して高度を上げる。しかし、それが精一杯だった。

「引き返して行くぞ！我々の勝利だ！」

その声に続く。

「勝利だ！勝利だ！勝利だ！」

連鎖的に町中の人間が叫ぶ。空船が反撃してくる様子もない。空中都市からは今もなお、破片がボロボロと落ちている。ゾッドも思わず叫んだ。

「フィリップ万歳！蒸気機関万歳！」

町全体が叫んだ。泣いた。笑った。抱き合った。そして皆がこの時、一つになった。

ゾッドにしてみれば、自分の中にこれ程の愛国心が潜んでいようとは思いもしない驚きだったが、実際それは、勝利への快樂という方が近かつたかも知れない。人は誰も勝利の中に身を置きたいものだし、何より彼は、町の誰よりも蒸気機関の側の人間だった。今のところは…

ともかくこの日、蒸気機関がトゥワンの奇跡に勝った記念すべき最初の日となり、また 最後の日となるのだった。

「一つだけ聞きたい…」

突然、焚火に薪をくべていたガリアがぶつきらぼうに言つた。それは二人が行動を共にしてから半日、初めてガリアから発した言葉だった。

「なに?」

少し離れたところで、膝を抱えて夜の海を一人見つめていたルカが、顔だけをガリアの方へ向けた。夜の砂浜は二人の会話を邪魔することなく静かで、時折、さざ波を寄せる程度だった。

「エンドラへは何をしに行くんだ?」

それを聞いたルカは、立ち上がりつて焚火のすぐ近くに座り直した。悪戯めいた笑みを浮かべている。

「それに答えてほしいならあたしの質問にも答えるべきじゃない?あたし、この半日つまんなかったな。ガリアってば、なーんにも喋つてくれないんだもん」

「答えたいことを聞かなかつたからだ」「別にフツーのことしか聞いてないよ。生まれとかトシとか…」

ルカは何かを思いついで、瞳をクルンと上に向けた。そして一マットと笑う。

「じゃあ交換条件とこりつよ。ガリアの質問に答えてあげる代わりに、あたしの質問にも答えるの。びひー。」

「答えたいことならな」

ガリアは「クリと頷いた。

「じゃあ歳は？声の感じだとあたしと同じくらいかしうね」

沈黙 答えは返つて来ない。

「もおー！それぐらい良くなーい？それとも何、オジサンだとか？あつーまさかお爺ちゃん？」

「お前は何歳だ？」

「あたし？あたしは15歳」

「それじゃあ俺も同じだ」

「それじゃあって…ホントに？ウソつぽによ、今の言い方」「同じだ」

文字通り鉄面皮のガリア。ルカも表情は読み取れない。

「じゃあさ、ガリアはエンドラへ何しに行くの？」

「俺はお前の質問に答えた。お前も俺の質問に答える」

しかしルカはほくそ笑む。悪だくみをする子供の顔だ。

「あつれー？キミ、あたしに何歳だつて聞いたでしょ？あたしそれに答えたから、さつきのはそれでチャラ。あたしはもう一つだけ聞く権利あると思つよ？」

一瞬の沈黙の後、ガリアは頷いた。

「分かった…」

「ヨシヨシ。で、何しに行くの？」

ルカは嬉しそうだ。

「エンドラへは目的を果たしに行く」

「目的って？」

「それ以上は言いたくない」

「エッ、もう少し！」

食い下がるルカ。そして鉄面皮ガリア。

「だつてさあ、ガリアの答えつてあたしにも当てはまつちゃうもん納得できない！」

四つんばいになつてにじり寄るルカ。それでもガリアは気圧されることなく、微動だにしない。そしてこう言った。

「悪いが目的は教えられない。でもそれをしないと俺の心に宿る者が一生苦しみ続ける。俺はそれを解放したい。だからエンドラへ行く

ルカは眉間に力を入れて考える。

「全然答えになつてない氣もするけど…まあ、いいわ。ガリアの質問に答えてあげる」

ルカは身を引き、ガリアから離れた。

「あたしは父親に会いに行くの。父は蒸気機関を普及させるために、エンドラで会社を経営しててね…」

「パンター＝自動機械会社？」

「そう！よく知ってるね」

「噂だけだ」

「ふーん…」

少し怪訝そうな顔を浮かべるが、ルカは続けた。

「最初の頃はね、蒸気機関の可能性に誰も見向きもしないって、よく手紙でグチってたの。でも最近エンドラは変わったって 变えたのはパンター＝自動機械会社だって、噂で聞くようになつて決心したの。あたしもお父さんの元で働くこうつてね。でも最近は忙しいみたい。手紙も来なくて…だからその不安を取るのも兼ねてね。行くの。それがあたしの理由」

元気に話しかけたはずのルカの表情が、今はわずかばかりの不安を宿していた。

「ねえ、一つだけ…いい？」

ガリアの相づちを待つことなく、ルカは続けた。

「ガリアはエンドラへ行ったこと、ある？」

「ない」

「なんだ。ないのか…」

ルカがため息をつくと、ガリアは何かを悟ったように話し始めた。

「確かに… エンドラのいい噂はあまり聞かないな。いや、エンドラじゃない。パンター＝自動機械の…」
「でも！」

ルカは即座に反応した。しかしその語調は徐々に弱まつていった。

「…みんな勘違いしてるんだと思う。トウワントボの力が突然なくなつてから、人間は新しいことを考えるのをやめてしまった。生きる気力をなくしてしまつたつ…それがお父さんの口癖だつた。みんな変化が恐いだけなんだよ。だから蒸氣機関を認めようとしない…。でもあたしはお父さんを…」

そこでルカの言葉は途絶えた。飲み込んだ言葉　それを口に出すには、ルカはあまりにも父親との距離が離れすぎていた。父は思い出の存在でしかないのだ。静寂と、さざ波が二人の間を支配する。焚火の炎は弱まりつつあり、ガリアもそれ以上薪をくべようとしなかつた。

「明日になれば分かる」

「うん。そうだね！」

ルカは、今できる精一杯の笑顔でガリアに答えた。そして寝る準備をしに、自分の荷物があるところへと戻つた。その時、ふと気づいたことがある。

「ねえ、ガリア」

ガリアは無言で顔を向ける。

「夕食いつ食べたの？あたしはさつき一人で食べただけど…ガリアが

食べると」「あたし見てない」

一瞬の沈黙。だが、ガリアはやがて答えた。

「今日は胃の調子が悪いんだ」

それを夢と言つていいものかどうかは分からぬ。なぜならそこ
に理不尽さはなく、現実の思い出の再生でしかなかつたからだ。し
かし寝ていることは確かだつたし、やはり夢には違いなかつた。

それは、まだルカが家族三人で暮らしていた頃。父親と母親が笑
い合つていた時の、幸せな夢。それが最初の映像だつた。

しかしやがて、父親は利己的な夢の実現のために家を去り、幸せ
は崩壊した。

精神が病み、時に暴力をふるう母親。物を作ることに逃避した日
々。

母が父を許そつと決めた日。そうルカに告げた日。戻ってきた幸
せ。母親と二人だけでも笑い合えた日々。

そして突然の母親の死。

夢は様々な記憶の断片の果てに、ルカが見た最後の母親の姿
デスマスクが映し出された。

思つたことはたつた一つ。今も当時も、それは変わらない。

「見たくない！」

その瞬間、弾け飛ぶように映像は流れ、脳は夢と現実の狭間に揺
らいだ。そしてようやく我に返ると、ルカは体を起こし、現実の月
を正面に捉えていた。

太鼓のように、胸を内側からドンドンと叩く心臓の音。脈動と呼
吸。その激しさ。しかし波は…とても静かだつた。そして虫の声。

現実感のある、世界。

大きく一つ深呼吸。

月明かりがルカには救いだつた。もし星の光だけだつたら、この
さざ波さえ恐怖となつたかも知れない。

そして一つ、思い出したことがある。昨日までと違うこと。今は
すぐそばにガリアがいる。会つた時からなぜか安心できる存在。ガ
リアがいる。それを思い出した。

再びルカは浜辺に横たわり、一人で旅をすることの喜びを感じて
いた。喜びとはつまり、安心。

いつしか瞳に映る下弦の月は、彼女の長いまつ毛を通してボンヤ
リとその輪郭をにじませ、やがてゆっくりと消えた。

今度は深い深い眠りの中く…

「えっ！？あのが…エンドラ？」

ルカは歩きを止め、口をポカンと開けたまま立ち尽くす。それは
白い砂浜の向こうに茫然と姿を現した。

「何を驚いてるんだ？名前の通りじゃないか」

一人は砂浜の向こう 高台となつた緑の台地からさらこそびえ
る、高い高い都市を見上げる。

「名前って？」

「噂は聞いているんじゃなかつたのか？」

「聞いてるけど…でもエンドラの名前の由来とか意味なんて知らな
いよ」

「そうじやない。最近エンドラは、いつも呼ばれてるんだ。 城

塞都市」

「じゅつせこ……都市……」

ルカは再びエンドラを見上げる。それは正にそびえ立つという表現がぴったりだった。もちろん、この都市が高台にあるからというだけの理由ではもちろんない。都市の全周を城壁がぐるりと囲み、まるで一かたまりの巨大な建築物と化して、訪れる者を見下す。そんな圧倒的な威圧感がエンドラにはあった。それは都市といつよりもむしろ城のようだったが、規模は城のレベルを越えている。まさに城塞都市なのだ。

「スゴイ……あの壁　　一体どうやって積んだのかしら……」

近づくほどにそれは驚異的だった。壁の石組みは、まるでパズルピースのように複雑な形を描きながら、それぞれが見事にピッタリと、紙一枚入らないほどに隙間なく組み合っている。しかし何よりも驚くのは、その一つ一つのピースの大きさだ。一邊は人の背をゆうに越え、重さでいえば百トン以上はあるだろうか? ギザのピラミッドと同じの騒ぎではない。

「空中都市もこんな感じだつたろうか……」

誰に問うでもなく、ガリアがボソリと言った。その言葉の抑揚がルカには新鮮で、思わず彼を見た。そしてそこに、ガリアにはあるはずのない表情を、見いだしたような気がしたのだった。それは昔を懐かしむような、深い思い出と共にあるよつな……そんな表情。

「思い出す?」

自然と出た言葉だった。

「いや。その時はまだ　心はなかつた」

ガリアも自然に答えた。

「　つて、そりやそうよね！そんな昔にガリアが生きてるワケないもん。あたしなに言つてんのかしら」

ルカは笑いながら、ガシャガシャと自分の髪の毛を手で搔いて、そして続けた。

「空中都市つて、初期トウワン王朝が戦争に使つたとか云われてるヤツよね？でもそつかも。トウワンボがあつた時代なら、これだけ大きな石組みも楽だつたらうし。でも今はそんな力　ないのになあ…。どうやって積んだのかしら？」

元の疑問に戻つた。でもそれは漠然とした疑問であつて、ルカにとつてはそれほど深刻な問題ではなかつた。ガリアの、次の言葉を聞くまでは…

「エンドラを変えたのはパンター＝自動機械会社。噂ではそつなつてゐる」

「えつ？」

ルカが振り向くと、ガリアは彼女をジッと見つめていた。

「やつぱり　何か知つてゐるんだね。噂つてだけじゃなく…」

ガリアは何も答えない。ただ、ルカの想像の向くままに任せた。

「まさか…この城壁をお父さんが？蒸氣機関で作つたつて？そう言

いたいの？」

ガリアはゆつくりと首を横に振る。

「違う。別の力だ」

「べ、別の力って…」

ルカは動搖した。ガリアは確実に何かを知っている。少なくとも自分より、父親のことを知っているに違いない。そう感じた。そしてもう一度ガリアをよく見ると、その瞳は何かを語っているようだ。

「失われた時代 次々にトウワンボの力が消えていった頃、トウワンボによって生み出されたトウワン水晶の力も、同じように失われた。同調していたからだ。しかしトウワンボは全て失われたはずなのに、今も力のある水晶はわずかに残っている。いや、それどころか最近では再び増えつつあるとさえ聞く。なぜだと思う？」

すぐにピンときた。が、ルカは答えない。どうしても納得できないうことがある。ガリアは続けた。

「力の失われていらないトウワンボが、今も残ってるってことだ。確実に一つは…」

ガリアの言いたいことは分かつている。それでもルカの持つ父親のイメージ それは今、目の前にある城壁とは繋がらない。そこが納得いかないのだ。ガリアは言葉の続きを ルカの予測した結論へと導いた。

「エンドラを城塞都市に変えた力。それはトウワンボだ。そして今、

それを持つてているのはお前の

「

その先の言葉をガリアは言わなかつた。

「信じられない…」

とだけルカは言った。

トウワンボ

彼らがその石を発見し、神秘の力に気づいた時から、やがてそれが世界を席巻する力になることは明白だつた。それだけの力、可能性を持つた石を、彼らはトウワン族の石　　トウワンボと名付けた。発見したのは全くの偶然だつたし、それにより力を得た彼らトウワン族も、回りの諸部族を制圧する以上の野心を持つてはいなかつた。というより、それより外の世界の存在すらまだ認識していないという、文明の初期段階にあつた。

外の世界を教えてくれたのは、五千年以上に渡つて文明を継承してきた国々　先進国という名の、侵略者達だつた。
そして今、その立場は逆転しようとしている。

陽も沈む前から、街路の全てがブドウ酒に浸されていた。それは人間の体を介し、芳醇とは言いがたい香りを漂わせていたが、氣にする者はいない。女はもちろん、中には子供にまで飲ませる大人や、哺乳ビンに酒を加えようとする者までいて、やがて死者が出るものも確実な勢いだつた。

ゾッドも当然このお祭り騒ぎに便乗し、酒をあおっていた。これは彼にしてみれば珍しいことだつたが、町の他の人間とは大分理由が異なつていた。しかし、それでも泥酔することはなく、持ち前の慎重さから早めに帰宅するに至つたのは、ある一つの疑問からだつた。

時を経て冷静になるほどに、その疑問は高まる。一体どれだけの人間がその事に気づいているのか？それを考えると、彼の足取りは自然と重たくなつた。なぜなら、敵はまだ切り札を出していない。

つまり、空船の存在だ。トウワン王国得意とする空中からの立体機動戦術　それに対抗する力を持たない限り、次の勝利はないのだ。蒸気機関では勝てない。

「認めたくないが…クソッ！せめて理屈が分かれば　なぜだ？なぜ物質が浮くんだよつ！」

裏口の木戸を開け、家の敷地に足を踏み入れたと同時に、思わずイラ立ちが叫び声となつて出た。その声に反応したのだろうか？庭の隅で草葉が不自然に擦れ合う音がした。ゾッドは視線を向ける。山の稜線に沈み行く太陽の強烈な西日が彼の瞳に突き刺し、さらには、熾烈な生存競争のあげく、裏庭に伸び放題になつた雑草たちが視界を遮つた。ゾッドは目を細める。そして手をかざすとそこにはかが

「なんだ？」

茂みは更に大きく揺れた。そしてシルエットとなつて眼前に浮かび上がつたのだ。

体内のアルコールは、沸騰した血流によつて一気に吹き飛ぶ。

「そ、空船！？」

間違いない。それは音もなく、やや見上げる程度の高さにまで浮かび上がると、止まつた。全長5メートル程の小さな船だったが、前後共に舳先が垂直に高く伸び上がつていて、威圧感は充分にある。ただ、船そのものはかなり破損していた。

乗つっているのは一人。法衣にも似た、トウワン人特有の真っ赤な布を褐色の肌にまとつてゐる。船体の一部から突き出した突起に掌を当て　それは操縦桿だろうか？　しかし体はだらしなく船か

らハミ出している。やつとの思いで乗り込んだのは明らかだ。

程なく空船は安定感なくフラフラと揺れると、やがて重力に逆らえずに落ちた。そのショックに船の一部がさらに壊れ、トウワン人は前方に投げ出されて「ゴロゴロと転がる。そのただならぬ騒ぎに、庭の虫たちはピタリと鳴くことをやめ、辺りは静寂に包まれた。ゾッドが実際にトウワン人を見るのは、これが初めてだった。

「け、怪我をしているんだな？さあ…」

そう言つて近寄ろうとしたが、これは好意ではない。どちらかと言えば空船への好奇心からであつて、少しでも近くで見たいという欲望だ。トウワン人はそれを見抜いたのか、単に敵だからなのか、接近を拒んだ。彼はやつとの思いで体を起こすと、今度は胸の前で仏教徒のように合掌　　その手には何かが握られているようにも見える。

夕暮れの中、再び騒ぎ出した虫たちの大合唱を押し退けてまで聞こえる音　喘息患者のような、気道が何かに阻害されるトウワン人の、ただ事ではない息づかい。がしかし、病人と対峙する時のような生易しい状況ではないことを、ゾッドは次の瞬間に思い知られるのだ。

「　なんだ？」

四散する船体の破片がいきなりガタガタと音を立てたかと思うと、釘のよくな30センチ程もある鋭利な金属の棒が、周りの残骸を押し退けるようにして突然、トウワン人の前に浮かび上がったのだ。今度は空船の時とは違う。空中にガツチリと浮いている。それは物体の軽さ故か？

ゾッドの背に冷たいものが走った。追い詰められた者が、逃げるのをあきらめた時の行動など限られている。ゾッドは、トウワン人の

が何のためにそれを浮かせたのかを確信した。

案の定、次の瞬間。その鋭く尖った金属棒が、ゾッドの額めがけて一直線に飛ぶ。ゾッドは反射的に目を閉じた。が、そのあまりのスピードに、実際には彼が目を閉じるよりも早く、金属の棒は彼の元まで到達していた。左耳の鼓膜が引き抜かれたと感じるほどの距離感。微妙な照準のズレ。そのほんの僅かの差で、彼は命拾いをした。

飲み込んだ息を、命の証に吐き出そうとしたその時。

おかしい……？

目を硬くつぶつたまま、ゾッドは思った。背後には家の壁があったはずだ。にも拘わらず、ぶつかつた音がしない。しかも背すじに異様な感じがある。何かの気配を感じている。

彼にしては素早い反応で背後を振り返り見た時、そこに待っていたのは、恐怖だった。

金属棒が壁の手前寸前で、ピタリと空間に静止している。しかもそれはゆっくりと旋回を始め、その鋭利な切つ先を再び、振り返ったゾッドの額に向けつつあった。

「ハッ……はああっ！」

限界を越えた肺が一拳に空気を絞り出し、震える恐怖と共に声となつて出た。と同時に、瞳は冷静にその金属が青銅であることを、加工技術の稚拙さを見抜いていた。

切つ先が額を捕らえた瞬間の映像。それは彼の中で静止し、脳の深い部分に恐怖としてすり込まれた。ゾッドは自分と金属棒との距離が、次の瞬間にゼロになることを覚悟した。

「し、し、死……ぬ……」

動き出す金属の棒。だがそれはゾッドに対してではない。下だ。地面に落ちた。カラーン！といつ金属音が、張りつめていた緊張の糸を切る。

彼の中で消えていた虫たちの声が、一斉に脳内に入り込んできた。たつぱり30秒間は茫然と立ち尽くしだらうか？それでもまだ治まらない激しい胸の鼓動と共に、トウワン人の方を振り返る。が、何も見えなかつた。あつという間に訪れた闇のどばりが、視界を妨げている。

ゾッドは恐る恐る近づくと、トウワン人はまだそこにいた。軽く足で小突いてみるが、そこからは既に生命感は感じられない。

ホッと安堵の息を洩らすゾッド。

しかしそこからの彼の行動は素早かつた。無慈悲に死体を跨ぎ、沸き上がる喜びを押さえきれずに空船へと向かつ。

やがて彼は気づくことだらう。空船の中に科学などといつものが存在しないことを。そしてトウワン人の手の中に握られている、真っ赤な石の存在。未開の小さな一部族にしか過ぎなかつたトウワン族が、やがて世界を征することになる力の源を…

それはこの時代、ようやく目覚めようとしていた科学文明を、蹂躪する力でもあるのだ。

夜半を過ぎて風が強くなってきたのか、あまり立て付けが良いとは言えない北面の窓枠が、ガタガタと音を立てていた。ゾッドがその才能のほんの一端を注ぐだけで、簡単に直せるはずのものだつたが、ここ数年、この窓枠はずつとこんな調子で苦情を言い続ける。だが窓枠の思惑とは別に、時折聞こえる酔っ払いの喧騒をかき消してくれるその音は、むしろゾッドに横たわるゾッドには心地よかつた。

シーツに包まりながら、ゾッドは幼い頃、宝物を手にした日のこ

とを思い出していた。

優秀なオートマタ（自動機械）職人だった、彼の父親が作ってくれたプレゼント。それは、ヘビ使いが笛を吹くと壺からヘビが出てくるという精巧なからくり人形で、10歳の時に送られた。片時も手放したくない宝物だった。

「あの時はそのまま寝て、一晩で壊してしまったんだつたな」

ゾッドはベッドの中でクツクツと笑う。あの時壊れた宝物は今、彼の手の中で小さな赤い石へと変わった。

「これがトウワンの奇跡とは……まるで魔法だ。科学など馬鹿らしくなつてくるわい」

彼はその赤い石が、物質を浮かす理由の全てであり、そこに理屈は見いだせないことを既に悟っていた。赤い石　トウワンボを手に持ち、念を送るだけで物を浮かせ、自在に操ることができるので、どう考へてもただの赤くて綺麗な石以上のものには見えないのだが、手に入れたのはこれ一つ。割つて調べることもできない。

「しかし分からんことだらけだ。全く…」

謎はトウワンボだけではない。空船にもあった。

トウワン人が空船を操縦する時に、掌を当てていた突起。そこにはただ、透明な石が埋め込まれているだけだった。可動部もなく、とても操縦桿には見えない。更にゾッドは空船の解体作業中、舳先部分の構造的疑問を田ざとく見つけ、そこも解体してみた。そして発見したのだ。内部にはやはり透明な石が入っているということを…

「一体あれにどういう秘密があるのか。或いは単に宗教的なものか

何も分からん

ゾッドは同じような独り言を、既に何度も何度も繰り返していた。ベッドの中に入つてから数時間。ずっと、トウワンボを見つめ続けている。見たからといって謎が解けるわけではないのだが、見ないでもいられなかつた。

ゾッドはこのまま、朝を迎える覚悟すらしていた。だが、同じような疑問の繰り返しはやがて睡魔を呼び、窓枠の苦情は子守歌へと変わつた。彼の呼吸が、ゆっくりと深い寝息へと変わっていく。新しく手に入れた宝物を握り締めたまま…

窓枠の負けだ。そしてこの先も勝つことはないだろう。ゾッドは才能を、自分の発明以外のものに割くことをしない。それは彼の執着心の証明でもあるのだ。

やがて夜半に降り出した雨も夜明けと共に止み、今、太陽の光は雲や水溜まりに反射して、キラキラとあちらこちらで輝いていた。とても穏やかな　しかし北側の窓枠は今でも時折、昨夜の余韻を残している。だが風も間もなく止むだろう。残るのは町全体を覆う二日酔いぐらいか…

明け方に寝入つたゾッドも、今はまだ眠つていた。

だが何が起こったのか？ベッドの傍らには人がいる。一人ではない。二人？三人？いや、取り囲むほどのたくさんの人たちがそこにいた。夢であり、現実であるような不思議な感覚。ゾッドは半覚醒状態の中で、確かに部屋に人がいると感じていた。

そう感じさせていたのは、ゾッドの周りを忙しく行き交う、多くの何者かの声だった。

空中都市を治すにはだいぶかかります。戦士たちもだいぶやられました。かなりの被害です

フン、そのような半端な報告はいらん！余は正確な状況を知りたいのだ。修理にかかる時間と、移民への影響を即刻知らせよ
国王へ、お知らせします。空中都市の破壊箇所から、火薬と鉄を採取しました。やはり大砲です。それも未知の巨大な大砲を撃たれたものと思われます

敵の神の力も侮れぬということだな。ウム、分かつた。大砲のことならばこの教皇国に詳しい者たちがいるはずだ。集めて協力させよ。従わぬ者は殺せ

国王、緊急です。トゥワンボが一つ、紛失した可能性があります

何！間違いではないのか？

ただ今調べています

急がせよ

はっ！

国王へ、お知らせします。空中都市を治すのに必要な期間は9ヶ月。移民計画を先延ばしにし、全ての空船を修理に参加させた場合でも6カ月はかかるとのことです

分かった

国王、やはりトゥワンボが一つ足りません。いなくなつた者の中に、トゥワンボを持つ上級戦士がいました。恐らく一緒に落ちたものと…

情報は全て、一人を中心として行き交つていいようだった。そして国王と呼ばれる人間の声が言った。

トゥワンボを持つ上級戦士たちよ、余の声を聞け。そして王の全ての戦士たちに伝えよ。侵攻作戦は延期とする。我らは休むことなく進み続けて来たため、今は後ろ盾が何もない状況にある。ここは一旦歩みを止め、後方地を安定させることが良いと余は考えた。今はその好機である。空中都市の修理に全力を挙げつつも移民

計画は継続し、後方地を活性化させる。そして空中都市完成の曉に再び侵攻を再開することとする。以上だ

国王、先住民への配慮は？

彼らの権利は尊重せよ。不満が貯まらぬ程度にな。今は刺激すべき時ではない

トウワーンボの搜索はいいのですか？

敵地でもある。今は不可能だ

しかもしも敵に拾われ、秘めたる力に気づかれでもしたら

懸念するでない。せいぜい物を浮かす程度だろう。ヤシラは気づけまいよ。トウワーンボの本当の力になどな…

ゾッドは驚くとか、疑問とか、そういうた感情を持たなかつた。彼が寝ていることに変わりはなく、夢の理不尽さになかなか疑問を抱けないと同じように、単に情報だけを受け止めていた。

ゾッドが聞いていたのは、トウワーン人たちの間を行き交う交信だつた。といっても、ゾッドがトウワーン語を話せるわけではない。それは言語に変換される前の、トウワーン人たちの心の交信だったのだ。その中でトウワーン人たちが一番神経を尖らせていたのは空中都市でも、蒸気列車砲のことでもない。たつた一つのトウワーンボが紛失したという、ただそれだけのことだった。

田覚めている時のゾッドであれば、すぐさまじつ思つたことだろう。

「トウワーン人がやつてきた時、数千もの空船が空を覆つたと聞く。話半分としてもかなりの数だ。それほど大量にあるトウワーンボの内の一つがなくなつたからと云つて、なぜこいつも神経質になる必要がある？」

しかし、疑問を抱く間もなく次々と入り込んでくる心の声。すなわち思念は、全ての謎を彼の睡眠中に解いてくれたのだった。幸運はもちろん、ゾッドがトウワンボを握ったまま寝入ってしまったことにある。そして知るのだ。

トウワンボが心の交信を可能にする石であり、物を自在に浮かす石であり、そして何より、トウワンボたつた一つの力が、数百、数千を自在に動かす力ともなり得るということ。

「宝物はやはり、寝起きを共にするべきだな」

昼すぎによつやへ目覚め、高らかに笑うゾッドは、まだそのことには気づいていない。

夢がスチームではなく、トウワンボによって叶うということ。そして彼の夢は、人形を自在に歩ませることだった。

「Jの都市はパンター二様の許可なくして入ることは許されんのだ。残念だつたなあ！お嬢ちゃん」

岩山のような巨漢の衛兵が門前で立ちふさがり、言った。衛兵はまさにルカを見下ろし、ニタニタと馬鹿にしたように笑う。それを見たルカは左右に首を振り、あきらめて帰ろうとした。だがそれは見せかけだ。ルカは俊敏な身のこなしでクリリと振り返ると、体を横に沈み込ませ、褐色人種の血を引く者ならではの強靭なダッシュ力で、一気に衛兵の脇を擦り抜けた。しかし、相手の方が一枚上手だった。衛兵はその動きを見事に捉えると、ルカの襟首をつかんで高々と宙吊りにする。その大柄に似合わぬ動き。相手はただの巨漢ではないようだ。

「だからあたしは、そのパンター二の娘だつて言つてんでしょうが！離しなさいよね。このバカ！」

ルカはヘソ丸出しのまま、体全体でバタバタと暴れて抵抗した。しかし巨漢は全く揉るがない。

「残念だがパンター二様からの返事はこうだ。『私に娘はない』つてな！」
「だからそれはウソだ！」
「お前こそウソもたいがいに… しろつー」

巨漢は軽々とルカを放り投げた。2メートルほど飛ばされてお尻

から落下。あとは後ろ向きに「ロロロロ」と地面を転がり、更に2メートルほど行った所でようやく止まった。

「いててて…いつたいなあ…あたしお尻薄いのにいつ…」

入り口の門は、バタン！と、無情にも閉ざされた。ルカは尾てい骨を擦りながら体を起こすと、怒りの矛先をガリアに向ける。

「もう…手伝ってくれると思ったのにさ。ゲンメツした！ガリアだつてエンドラに用があるて来たんじょ。いいの？入れなくて！」

「目立つことはしたくない」

「…あのねえ、ガリアくん。真夏にそのマントは十分目立つてるとは思わない？」

その言葉に、ガリアが一瞬笑つたような気が ルカにはした。声が聞こえたわけではない。ただ、そんな気がしたのだ。

「思つたより元気なんだな」

「なんであたしが元氣ないと思つの？ガリアが話してくれたことがショックだつたから？それとも父親に無視されたから？」

「両方だ」

「だつて本当のことはまだ何も見てないもん。言つておくけどあたしは科学の子なの。人に言わしたことなんて全然…いや、ちょっとは気にするけどさ。でも基本的にはね。自分の目しか信じない。それが大切だ！つて これ、お父さんの受け売りだつたっけ…」

一瞬だけ、ルカの目が遠くを見た。

「なるほどな…」

ガリアは一人うなづく。

「なによ、それ？」

「いや…。ならその本当のことは俺が見せてやる。お前はそれを自分で確かめればいい」

「どういうこと？」

「夜まで待とう。それからだ」

ガリアはそれだけ言つと、背を向けてスタスターと去つて行つた。

そして昨夜とほぼ変わらない下弦の月が、東の空から昇る頃、ガリアとルカの二人は門の前にいた。衛兵はいない。だが門には門が掛けられ、人の出入りを拒絶していた。

「ねえ…門、閉まってるよ？まさか壁を登る、なんて言わないよね。ゼッタイにムリよ」

ガリアは小さくうなづいて、言つた。

「手はある」

「…って。これを一体どうやって…」

見上げる壁の先は暗やみに消えている。いつしか月には厚い雲がかかり、辺り一帯の光を奪つていた。

「好都合だ」

と、ガリアは小さな声で言つた後、ルカに対しても神妙な面持ちで言つた。それは声色から判断できた。

「一つだけ言つておくことがある
な、何? 改まって」

そう言つたきり、ガリアの言葉はそこで途切れた。珍しく何かに迷つてゐるようだつた。

「言葉で言つよう」

小さな声でそう言つて、ガリアは言葉を続ける。

「お前は空船を知つてるか?」

「うん。失われた時代以前の代表的な乗り物よね。今でもどこかに残つてゐるって聞いたけど…」

「そうだ。その力と同じものが俺の中にも宿つてゐる。悪いが抱かせてもらひます」

突然だつた。

「キャア!」

ガリアはルカの背中と足に腕を回し、軽々と持ち上げた。その素早い動作にルカは抵抗する間もなく、ガリアの腕に抱きかかえられる。

「い、いきなり何? びっくりするじゃな…」

しかしルカは今、別の驚きを感じている。ガリアを感じているルカの、体のあらゆる部分が訴えているのだ。それは体の硬さ。それもそう。だがそれ以外にも、生きたものに触れた時に感じる生命臭

さ 匀いであつたり、吐息であつたり、体温、血管の脈動 そ
ういつたものがガリアからは一切、感じられない。単に仮面を被つ
ているだけとはとても思えないのだ。

心臓は早鐘を打つ。

「この人は一体、誰…いや、そうじやない。敢えて言うなら

(この人は一体、何?)

それは言葉となつて出た。

「あなたは一体…なんなの?」

「ガリア」

そうだ、この人はガリアなのだ。それは知つている。しかし
ガリアとは一体、何なのだろう?

「しつかりつかまつてろ。これから、飛ぶ」

「えつ?」

直後、ガリアはル力を腕に抱きかかえたまま、垂直に上昇した。
地上に立つたままの姿勢でグングン昇る。

「う、うわわわっ!」

面白い!

即座に思った。しかしそう思うのは不謹慎だと、ル力は一生懸命
自分を言い聞かせた。今の状況は普通じゃない。だつて空飛んでる。
ガリアに対して恐怖を、疑問を抱くべきなんだ!

しかしちょどその時、月が雲間から顔を出した。闇の中からふ

いに城壁が浮かび上がると、壁面は流れる景色となつてあつという間に過ぎ去る。そのスピード感。そしてついに、頂上を越えた。そして今、壁の向こう側に隠された輝き　エンドラの灯りが眼前に広がっているのだ。そこは幾千もの宝石がちりばめられた巨大なジユエリーケースのようで、ルカにとつては本当に夢のような美しさだった。

「スゴイ！スゴイ！スゴイ！」

涙が溢れんばかりに感激した。この状況で、どうしてガリアに恐怖を抱けよう。ガリアが何者かなど追求できよう。それは無理だ。初めて見る光の輝き。その美しさ。今、この現実に感激する以外ない。

「もう下調べは済んでいる。あの中央の塔にパンターニがいるはずだ。屋上に降りる」

「下調べなんていつの間に？」

「昨晚。お前が寝てる間だ」

「ふーん…まあいいや。それよりすごくキレイ。あたし、こんなに綺麗な町を見るの初めてだよ。これをお父さんが？信じられない。不安なんて吹き飛ぶ。まぶしくて。でもなんであんなに明るいんだろう…？」

「……」

ガリアは答えなかつた。

都市の明るさは電気　百五十年前、トゥワン王国の台頭によつて失われた力の一つだ。侵略した国の文化を否定すること。それは歴史上珍しいことではない。それにトゥワン王国にはトゥワンボがあつた。まだ歩き始めて間もない電気の力など、トゥワン人にはさほど魅力的にも思えなかつたのだろう。しかし、失われたはずのそ

の電気が、エンドラでは復活を遂げていた。ランプの灯りしか知らないルカには、とてもまぶしく思えたのは確かだつた。

灯りは放射状に広がつていて、その中央にエンドラで最高層を誇る塔がある。それは確かに塔らしく末広がりの様を見せていたが、表面はコンクリで塗り固められてドッシリとしている。塔と言つよりも、鉄筋のビルのようだ。そこに宗教を思わせるような華美な装飾はなく、実用的なものとして存在する的是明らかだつた。

塔の屋上にはヘリポートのような巨大な杯状の台があり、実際、数十艘の船がその上に整然と並んでいる。そのため、塔自体は先細りになつていても拘わらず、屋上はむしろ十台部分よりも広かつた。

ガリアは慎重に屋上に近づき、人の気配がないことを確認すると、後は素早い移動で屋上に着地した。ルカを優しく降ろすと、その途端、彼女はバネのように勢い良く飛び出した。

「すごい数！ねえ、これ空船？」

興奮して叫ぶ。

「そうだ」

「へえ…これが。ねえ、あたしでも飛ばせるのかな？」

「念じ方さえ覚えればな。それより静かにしてくれ。衛兵に見つかるとヤバイ」

「あ…ゴメン。声抑えるよ」

そのままガリアは、ルカをジッと見つめ続けた。

「お前、俺が恐くないのか？」

「え？あ、そか。うーん…よく分かんない。あたし、興奮してるみたいね。聞きたいことはいっぱいあるんだけど、ありすぎて」

「ニッコリ笑う。

「あー見て見て、ガリア！」

声は全然静まらない。ガリアも言われるままに、ルカの指示示す先を見た。

「！」の塔、城壁よりも高いんだね。海が見える。月の光に反射してから暗くても水平線が分かるの」

「そうだな…」

「うわっ！下見て、下。スッゴク高いよ。あれ！？あの、グルグル回つてんの。何だらうね？水車かな？あ、よく見るといっぱいある」「あれはトウワンボ機関。半永久機関だ。あの回転がこの都市の光を生む」

ガリアはいつの間にか、素直にルカの質問に答えていた。

「回転が？じゃあ蒸氣機関でもあの光は作れるってことよね？でも半永久があ…。やっぱり凄いなあ…」

ルカは少し悔しそうに、頭をボリボリと搔いた。

「誰だ！」

突然、背後から威圧的な声がかかった。同時に、スポットライトのような光がルカを照らす。振り返り、まぶしさに手をかざすルカ。

「あ、スママセン。ど、どうしよ。あ、あたし…お父さんで会いに
つて 言つてもムダだよなあ…」

声の相手はライトの向こうにあり、まぶしくて姿は見えない。ルカは逃げ道を探そうと、抜け目なく辺りをうかがう。

「父親に会いにだと？名前は？」

彼女は素直に答えた。

「ルカ・パンターー」

「……なるほど。お前は昼間も来たな？」

ルカはその声を思い出した。今となつては懐かしい声…

「その声…もしかしてお父さん？あの…あたし、ルカです…会いに来たの！」

「……」

男はしばらくの間、何も喋らなかつた。そして長い沈黙の後、ようやく光の中へと歩み出る。

それは、ルカの思い出の中にある顔と同じ。ボサボサの長髪と銀色の眼鏡。背はルカが思っていたほどには大きくななかつたが、それでも高く、がつしりとしていた。昔より白髪が目立つのは、ライトの明かりのせいだけではないようだ。

「いつかは来ると思っていた。だが私は無視するつもりでいたのだ。しかしこうもたやすく侵入を許すとはな。どうやって入った？お前は空船操るのか？」

「あ、え？え？と…」

ルカはガリアを探した。しかし見回すがどこにもいない。いや、

何よりも動搖したことは、田の前の父親が、父親に見えないのだ。
顔は一緒だが 何かが違う。

「…まあいい。だが私を知りつければするほど、お前は私にとって邪魔な存在となる。たかが小さな石ころ しかし今度ばかりは完璧を期さねばならん。今度こそ、今度こそは…失敗するわけにはいかんのだ」

男は胸の前で掌を合わせた。

「お父…さん…？」

すると突然、男の顔の前に短剣が宙に浮かび、その切っ先がクルリとルカに向けられた。

「悪いが死んでもらひ

口元の端を微妙に歪めて笑う、いやらしい笑い。そんな表情の作り方をする父の顔など、ルカは知らない。

「お父さん聞いて！お母さん死んじゃったんだよ！だからあたし…訪ねて来たのに。まさかあたしのこと忘れちゃったの？」

「覚えているとも。いや、正しくは記憶の中にある。そう言つべきかな。しかし…そつか。母親は死んだのか。だが安心するがいい。お前もいざなつてやる」

「お父さん…」

男の『氣』がトウワンボに集約していく。そして一気に解き放たれたその瞬間。田の前にあつた短剣が、ルカの額へ向けて一直線に飛び出した。しかし彼女は尚も父親に叫び続ける。

それが最後だった。

ルカの叫びを止めたもの。それは全く濁りのない綺麗な、それでいて鋭く、凶悪な金属音だつた。辺りを震するほどの音。その絶対的な存在感。それが一本の緊張となって空間は静寂した。

ルカはようやくにして気がついた。目の前にドーナツ状の何か（それは板のように薄い金属板だつた）が浮いている。父親によつて操られ、襲つてきた短剣とは違つ。

「だ、誰だ！？」

男を後ろから羽がい縛めにしていたのは、ガリアだつた。

ルカの目に前にあつたドーナツ板は、全くの無音で彼女から離れ、ゆつくりとガリアに向かつて飛ぶ。そして突き出した彼の指にかかり、クルッと回転した。ガリアはそれを慣れた手つきで驚づかみになると、輪の外周部分の刃が、ライトに反射してギラリと妖しく光つた。

「そ、そのチャクラムは！」

男は叫ぶ。

そしてガリアが言った。

「ある男の魂に従い、お前を殺しに来た。悪いが死んでもらうぞ。

ゾッド」

ガリアは右手につかんだチャクラムを、男の喉元に突き付けた。

未開の一種族に過ぎなかつたトゥワン族が発見した、十数個の赤い石。それは最初から何か靈的な不気味さを宿していたが、彼らはそれを不吉とは捉えなかつた。むしろ太陽（神）の子、という意味合いの名を付け、靈的な祭毎に使われるようになつた。

変革はすぐに來た。

赤い石の秘められた力に気づいた時から、彼らの歴史は大きく動き出した。石もトゥワン族の石　トゥワンボと名を変え、それが自分たちのものであることを明確に主張したのだ。

だが、この時に彼らが気づいていた力は、まだトゥワンボの力の全てではなかつた。物質を自在に浮かす力（重量に限界はあつたが）と、トゥワンボを持つ者同志の、思念による遠隔地との交信。その二つだ。しかしそれでさえ、力は圧倒的だつた。近隣の部族をまとめあげ、族長は王となり、局所的な神となつた。しかしその先へ進むには、石の数が少なすぎたのもまた事実だつた。

第二の変革は、トゥワンボによるもう一つの力の発見により來た。ある時、戦士のうちの一人がトゥワンボを使い、身に付けていた水晶の飾りを浮かせていた。手元にある玩具をもてあそぶ子供と同じように、目的意識も何もなかつたに違ひない。ただヒマだったのだろう。やがてそれにも飽きたのか、或いは他に用ができたのか、その遊びを終えた時にそれは起こつた。

念じることをやめたにも拘わらず、水晶は空中に浮いたまま落ちてこないので。最初は戦士も、同じようにトゥワンボを持つ誰かの悪戯と思つたことだろうが、しかしそれは悪戯などではなかつた。

歴史上の多くの発見がそうであつたように、偶然が新たな歴史の転換点となる　ここでもそれが起こつたのだ。

もはや後は自在だ。その水晶石はトウワンボを使うことなく、空中を自在に操ることができるようにはなった。自らが浮かぶためのプログラムが水晶石に複写された。そう考えればいいのかも知れない。但しトウワンボとは違い、水晶石は念により別の物質を浮かすことはできず、トウワンボが特別なものであることには変わりなかつたのだが：

水晶石だけがなぜ特別なのかは分からぬ。分かつてゐることは石が大きければ大きいほど、不純物が少ない透明な水晶石であればあるほど、強い浮揚力が得られるということだつた。これにより紫水晶や黄水晶などの、より高価であつた石の靈的価値は大きく失われた。

トウワンボと水晶の新しい力は、やがて大量の空船を、火薬に頼らない弾丸などを生むことになる。それが第三の変革だ。

だがトウワンボによる戦争への応用は、彼らだけで為し得たわけではない。外からの力が必要だつた。

戦いに明け暮れてきたが故に先進国となつた蛮族が、外の世界にはいた。強欲で野心に満ち溢れ、侵略思想の強かつた先進国が、やがてトウワンボ族とぶつかることは避けられなかつただろう。もちろん、より侵略思想の強かつた先進国が先に仕掛けることも…。彼らが全てをトウワンボ族に教えた。外の世界を、野心を、そして侵略に正義を組すること…

トウワンボ族は単に、侵略に対して侵略で答えたに過ぎない。

ゾッドは今の時代に感謝した。一昔前ならただの鑄鉄や鍛鉄で満足しただろうが、今は鋼鉄がある。それは人形をより強くしてくれるはずだ。

「鋼鉄の歩く人形。魅力的な響きだ！いや、それだけじゃない。完成すればそれは空船を打ち落とすぞ。次々とな！」

彼はまだ仕上がりっていないその姿を想像して、うち震えた。だがそれも致し方ない。想像力を刺激する理由が、彼の眼前を不器用に歩いているのだから…

「止まれ」

壁の直前で、ゾッドはその人形の歩みを止めた。それは頭、胴体、両手、両足という、最低限のパートで構成された粗雑な木製人形だ。しかしその粗雑な人形が、どう見ても魔法としか思えない力で立っている。

なぜなら人形のパートの一つ一つが、他のどのパートとも接していない。つまり浮いているのだ。

「一八〇度旋回して私の元へ戻れ」

ゾッドの言葉（念）に反応した人形は、足踏みをしながらクルリと回り、歩き出した。いや、歩いているという形容は正しくない。実際には宙を浮いている。歩く速度と足の運びも合っていない。つまり、歩くマネをしているに過ぎない。

やがて人形はゾッドの前まで来て止まった。その直立動作は微動だにせず、相変わらず見えない力によって宙を浮いていた。

ゾッドは人形に微笑む。瞳からも興奮の様が見て取れた。

「ひとまず成功だ。だがこんなもんじゃないぞ！人間の指先の一つ一つに至るまで細かいパートを作る。しかも全て鋼鉄でだ！更にその全てに水晶を入れ、トウワンボの意プロクラムを混入する。そして人間の動きを完璧に再現するんだ。神がしたように歩くこと！走ること！飛ぶこと！そして…戦うこともな！」

ゾッドは誰に対するでもなく叫んだ。彼は興奮の余り、自分を神と同格にさえ感じていた。例えそれが身勝手な勘違いだつたとはいえ、少なくとも彼は、トウワン人さえ思いつかなかつたトウワンボと水晶石の利用法を、現に実践していたのだ。

トウワン人は命令により水晶を浮かすこと、動かすことしかしなかつた。ゾッドはそれを更に進めた。

その理屈はこうだ。

トウワン人が生み出した空船のように、リアルタイムで水晶石に命令を与え続けるのではなく、一つの命令を与えることで、水晶に固有の動きを永久に反復させるというもの。それを彼は人間の動きの再現に応用した。例えば「歩け」というたつた一つの命令によつて、人形の体のパーツ一つ一つに埋め込まれた水晶が固有の動きをし、あたかも本当に歩いているように見せる。それが木製の試作人形がを見せた動きだ。

だがそれはあくまで第一歩に過ぎなかつた。

それからの後の半年間、彼は何かが取り付いたかのような確かに神の仕業とも思える仕事を成し遂げた。トウワンボ機関とでもいうべき新しい動力源が、ようやく彼の夢想を現実のものとし、彼に生きるために場所を与えた。一つの発明も成さなかつた彼に、幾つもの発明が舞い降りて来たのだ。もちろん、その全てがトウワンボあつてこそというものではあつたのだが……

発明の全では、まるでコンピュータのプログラム技術に近いものがあつた。最終的に彼は、様々な動きを制御するための人工知能までもを、水晶石の中に封じ込めた。もちろん水晶石が意志を持つわけではなく、あくまでただの制御機能でしかなかつたのだが、それでも当時の科学水準からすれば偉大な発明には違ひなかつただろう。実際、もしこの時代にコンピューターがあつたなら、ゾッドの考え方たは充分プログラム技術に応用できたはずだ。

こうして完成した「トウワンボ・ドール」は、命令によつて歩き、走り、飛び、攻撃する殺人マシーンへと昇華した。それに比べれば、

トウワン人の発明した空船など幼稚な玩具でしかなく、引き継いできた文明の重みと、何よりも個人の才能の差が出た。その意味において先進国は　　というよりゾッドは、トウワン王国に勝つたのだ。だがゾッドは、もはやそれだけでは満足していない。更に大きな勝利　　トウワン王国との戦いでの勝利、発明家としての勝利。そして独裁者としての勝利までも夢に見、託そうとしていた。

やがてその時は来た。

空中都市は復活し、トウワン人たちは長い眠りから醒めたのだった。

もちろんこの間、守る側も何もしなかったわけではない。本来他国からの輸入品であつた蒸気列車砲の仕組みを解析し、オリジナルの兵器として自国生産にまでこぎつけ、空中都市の再来に備えた。国境沿いや沿岸部では砲身をそのまま流用し、列車砲より安価な巨大固定砲台として大量に設置した。とはいえ技術革命の遅れという、この国が以前から抱えていた問題もあり、コピー兵器の性能がオリジナルを越えることはなかつたのだが。それでも、耐久性だけは改良され、向上した。

防衛態勢は整つた。いつトウワン王国が攻め入ろうとも、彼らにしてみれば返り討ちにできるだけの自信があつた。いささか旧式ではあつたが、世界最強の地上軍を保有しているこの国が負けるはずがないという大国の自負。唯一の恐怖であつた敵の空中部隊も、もはや恐くはない。無数の大砲が撃退してくれる。そう信じて疑わなかつたのだ。問題はいつ来るかだ。

その侵攻時期を唯一、知つてゐる男がいた。

ゾッドだ。

思念通信を受信できるトウワンボの力により、侵攻の日時、場所、その全てを把握することができたからだ。

だが彼は焦つていた。未だにガリアが完成しない。というより、ガリアの制御機能に問題が生じ、その原因が全くつかめないでいた。

ガリアの華々しいデビューの時が、一刻と近づいてくるところに…

空中都市が姿を現した。

以前と全く同じ方位から、まるでかつての失態を打ち消すかのごとく、ゆっくりとそれはやってきた。霞のない、遠方まで見渡せるよく晴れた日の朝だった。

国境近くの高台にある全ての固定砲台が一斉に門を開く。蒸気列車砲もじき砲撃ポイントに到着するだろう。地上部隊はやや前方で陣形を整え、来たるべき戦いに備えた。万全だ。あとは敵が射程に入るのをただ待てばいい。以前との違いは町の人間にも表れていた。興奮はあつたものの表に出すことはなく、終始冷静に、事の成り行きを見守っている。皆がよく分かつっていた。この戦いの勝利が、再びこの国の栄光を取り戻してくれるということを…

空中都市は依然、前回と全く同じように空船を発進させずに、単体で進んできた。敵のその行動は兵士たちにとつて予想外だったもの、期待はますます高まつた。空中都市を再び撃退できる と。

しかし、今回は空中都市を沈めることだけが目的ではない。沈めた上で、なおかつトウワン王国 旧教皇領に進撃するのだ。

しかしその時、空中都市の動きに変化が起こつた。

思えば、最初からそうだったのかも知れない。空中都市の高度が今回は少しだけ高い。地を這うような前回とは異なり、威圧の意味はないようと思われた。

いや、それどころか空中都市は見る見る内に高度を上げていく：町の外には幾つもの観測ポイントが設置されていた。手旗信号により空中都市の接近を段階的に知らせることができるというもので、それは距離を示す意味もあった。これにより必中の砲撃を可能にするのだ。

だが、実際にはその距離をアテにするには、空中都市の高度はあ

まりにも高すぎた。まつたくもって単純なミス。がしかし、地上戦しか経験がなく、前回の地を這うような空中都市の飛行を見ていた彼らには、それも致し方ない。

一斉に丘の上から煙が上がる。

田視はできなかつたが、打ち出された爆裂弾の弾道は大きな弧を描き、空中都市の遙か手前で失速した。この時代最大の射程を誇る大砲であるにも拘わらず、届かない。

ここに至り、兵士たちは初めて前回と同じようにはいかないことを悟つた。爆音は空中都市からではなく、地上への着弾という形で響いたからだ。

「なんだとつ！」

爆音を聞き、ゾッドは慌てて窓の外を見た。その時になりようやく、戦いが既に始まつていることを知つたのだ。持ち前の集中力が邪魔をしたようだ。

「クソツ、まだ原因がハッキリせんといつのにー！」

東側の窓の外には広大な田園風景が広がり、その遠景に次々と大砲の弾が着弾して、土煙を上げているのが見える。

「フンー！おおかた空船相手に自慢の大砲がまるで役に立たんもんで慌てとるんだらう。馬鹿が！分かつてたことだ」

ゾッドは吐き捨てるよつて言つと、窓に背を向けて、すぐさま作業台へ戻つた。

「完全ではないが……仕方ない」

大きく一つため息をついた後、すぐ気を取り直してまっすぐに一点を見つめる。その見つめる先。作業台の上に横たわっていたガリアに対し、ゾッドは一際大きく声を張り上げた。

「起動！」

その鉄の人形はまず片膝を立て、次に両手を使ってゆっくりと起き上がった。まるで人間の如く自然な動きだ。そして次の瞬間には、右手を軸にして一気に作業台から飛び降りた。それは誰が見ても地球の重力が作用して落ちたと思える、完璧な動作だった。

「よしつ、完璧だ！しかし…」

ゾッドは首を傾げてから続けた。

「…なぜか動きが止まることがある。『ぐく稀なのだが まいい。それでも空船相手に負けることはあるまいからな。恐いのは味方の弾だけだ。まあそうそう当たることもあるまいが…』

ゾッドは、まだ不完全な状態ながらもガリアの出来に喜びを隠せない。そのむき出しの鋼鉄 正確に言えば、当時最新のニッケルクロム鋼のボディに魅入り、たっぷり五分間は悦に入つたまま帰つて来なかつた。彼に息子ができたとしても、これ程の嬉しさは抱かなかつただろう。なぜなら制作工程のほとんどを、女に奪われるからだ。

「よしガリア、そこのチャクラムを持つて私に付いてこい。お前に戦うべき相手を教えてやろ！」

ガリアは台の上に置いてあつたチャクラム（戦輪）を手に取ると、慣れた動作でクルリと指で回し、腰のホルダーに力チリと止めた。

「うむ」

ゾッドは満足そうにつなづく。

しかし彼は気づいていない。危険は窓の外で急速に近づいているのだ。もう少し早く家を出ていれば　それを言つのは不毛だろうか？

そう。不慮の事故とは、所詮そんなものだ。

空中都市はゆっくりと高度を上げながら、着実に向かつて来る。固定砲台は仰角を上げて対するが、的には弾道が描く放物線の更に上有る。当たるわけがない。トウワン人は完璧に大砲の射程を見極め、空中都市をその外に置いていた。かつては隣国であり、今はトウワン王国に従属した教皇領の技師たちの、完璧なる計算。

固定砲台の幾つかは既に射撃を止め、冷静に対処していたが、一部はパニックに陥ったままひたすら撃ち続けた。砲台の仰角は空中都市の接近に伴い、更に上がる。当然射程は短くなり、着弾点は近づく。つまり町外れの田園地帯を抜け、同胞の住む居住地へ…やがて大砲の弾は敵ではなく、自国の建築物に最初の被害を出した。

それが運命というものなのか？ともかく、それが全てだった。たつた一発の砲弾がこの戦いの勝敗を分け、大きな歴史の分岐点となつたなど誰が想像できるだろう。しかし実際、それは歴史を曲げた。進むべきルートを大きく変えたのだ。

「恐いのは味方の弾だけ」

そう言つたゾッドの言葉は、ある意味正しかつた。トウワンボ・ドール、ガリアの鮮烈なるデビューは、自国の砲撃によりこの時、

断たれたのだから…

ゾッドとガリアは共に、土と瓦礫に埋もれた。命令を続行できなくなつたガリアは活動を停止し、ゾッドはその命を急速に終えようとしている。即死ではないが絶望的だ。圧死の時まで、ゾッドの苦しみは続くのだろう。彼の並々ならぬ生への執着が、来たるべき時を少しばっくするかも知れない。 がしかし、そんなものだ。

長い眠りが待つている。

百五十年前、ガリアが瓦礫と共に埋まった時は、確かに彼に意識などなかった。外界から命令を受け、それを制御するためのプログラムが、彼の体のあらゆる部分にある水晶に封じ込められていたに過ぎない。しかし意識が芽生えるために必要な『種』があつたことも否めないだろう。どんなことにも原因は必ずあるものだ。

歴史の分岐点となつたあの日、ガリアの動きが時折止まるという一種のバグが、ゾッドには最後まで分からなかつた。そして実を言えばそれこそが、意識を生み出すための種だつた。だとすれば、それを生み出した原因是なんだつたのか？

一つ言えるとすれば、ゾッドは睡眠の際にもトウワンボを手放さない。そしてトウワンボとは人の念を受け取り、放出する。

ゾッドの、人間のように動く人形を作りたいという執念が、その種を作つた　とまでは言わない。しかし睡眠とは脳を休めることだけが、その目的ではない。それならば人間は夢を見る必要などないからだ。夢が行う役割とは記憶の整理。だがそれと共に、脳が持つ複雑な制御機構の点検をも兼ねているとしたら…。そして人間の脳の制御機構とは、言わば心の仕組みである。トウワンボを通して、ガリアがいつもその影響を受け続けていたとしたら…

いざれにせよ種は確かにまかれ、百五十年という歳月がそれを熟成させた。そしてある時、ガリアに心が宿るための決定的な出来事が起こつたのだった。

そうして今、魂を持つトウワンボ・ドール　ガリアはここにいる。

ではゾッドはなぜここにいるのか？死んだはずの人間の意識がなぜゼルカの父親に宿っているのか？そこには彼の、異状なまでの生へ

の執着が関係していた。

そうして今、ゾッドもここにいる。五十年の歳月を経て…

「ムウ…私の短剣を弾き飛ばしたのか！？いや、そんなことより私をゾッドと呼ぶお前は 大体私を殺すだと？馬鹿な…私は死ぬわけにはいかん。それはいかんぞ！今度こそ。今度こそは！」

ルカの父親の中に宿る男 ゾッドは、ガリアの腕の中で暴れだした。がしかし、彼の腕力と鋼鉄のボディがそれを許さない。

「俺の中の魂に言つんだな」

ガリアは喉笛を切り裂こうと、手に持つたチャクラムにグッと力を入れた。

「ガリア、ダメえつ！」

ルカの叫び。ガリアの手が止まる。

「ガリア？ガリアだと！」

ゾッドも叫んだ。

「お前がガリアだと言うのか！？どうか、そのチャクラムはやはり私が昔作つたものだ。お前も蘇つたのか？いや、それになぜだ？なぜお前に心がある。それになぜ喋つている？私はそのようには作っていない。作っていないぞ。なのになぜだ！」

ゾッドの興奮とは対照的に、ガリアは冷静だった。

「心があるのは俺に魂が宿つたから。それからお前が聞いているのは声じゃない。心の念だ」

「心の念？ そうか、思念か。だが魂だと？」

「そう。そして俺はその魂に従つ

「誰のだ！」

「それはお前自身だ」

「な、なに！？」

「お前が追い出したその男の魂だ」

ゾッドはハッと息を飲む。

「まつ…まさか！？ パ…パンターーのか！ クソッ。あの男…お前はそいつに操られていいというのか？ お前を作ったのはこの私なんだぞ！ 私に従え！」

「これは俺の意志もある。俺にはこの魂の持つ悲しみが…憎しみが痛いんだ。俺が俺であるため 済みするには、お前を殺すしかない。悪いな」

「クソがっ！ お前などこの世から消し去ってくれる！」

ゾッドはトウワーンボを持ち、合掌した。ガリアの中にあるトウワーン水晶に念を込めようとしたのだ。それはゾッドだけが知っている、プログラムテリートのキー思念。だが

「俺のトウワーン水晶を消去するのか？ 残念だな。俺にはガードできる。心のある水晶を消すことほかないのさ」

「クッ！」

ゾッドはギリギリと奥歯を噛んだ。

その時、ルカがガリアに飛び付いて来た。

「やめて、ガリア！お父さん殺さないで！ガリアはそんな人じゃない！お願い！」

ガリアはルカをジッと見て、言つた。

「ここの男はお前の父親じゃない。肉体はそうかもしれないが、心は違う。お前は現実を見たはずだ」

「そんなこと言われたって分かんないよ！だってお父さんだもん。ね！お父さん、お願い、答えて！」

ルカは必死で、かつて父親であった男に向かつて叫ぶ。が、それはもはや父親ではない。ゾッドは全く動搖を見せずに、合掌したまま何かを念じている。

「一体何を……？」

ガリアが疑念を抱いた瞬間、彼の右腕に、背後からの衝撃が加わった。ガイーン、という金属の鈍い音が響き、ガリアは思わずチャクラムを落とした。

「ぐわっ！」

ガリアは戦闘マシーンとしての性能と、心を持つ者としての機転から、ルカを抱えながら素早く脇へ飛んだ。その一瞬の判断。そして間一髪、二発目と三発目の攻撃をかわした。二発目はゾッドの顔のすぐ脇 ガリアの頭部があつた位置を、三発目はルカがいた辺りを抜けていった。

ガリアはゾッドから10メートルほど離れた位置。空船の陰に逃げ込んだ所で振り返る。しかし甘かった。振り返つたと同時に、今

度はガリアの左足に衝撃が走った。それは木製の空船を突き破り、ガリアの足に直撃したのだ。

「グッ！」
「キヤアッ！－！」

ようやくにして顔を見上げるとそこには、ゾッド以外にもう一人、誰かが立っていた。長身のシルエットが浮かぶ。

「やつた！でかしたぞ、アレシアー！」

ゾッドが叫んだ。そしてもう一人の影が、彼の脇にゆっくりと歩み寄る。波打つ黒い長髪と、後ろに長く伸びた腰布がマントのようになびいている。

アレシアと呼ばれるそれは人間ではない。衣服は着ているものの、むき出しになつた腕と足、それに腹部が、ガリアと同じ金属人形であることを証明していた。しかしそのボディにメタリックの輝きはなく、色は艶のないグレー。しかも男性ではあるが中性的でスマートなフォルムを持っている。同じ人形とはいえ、ガリアの体とはだいぶ違うようだ。そして彼の背後には、ボーリングの球ほどもある金属球が三つ、正三角形を描いて浮いている。ガリアやルカを襲つた、アレシアの持つ武器だ。

「馬鹿が！私がこの時代にお前と同じものを作らなかつたと思つか？いや、お前以上のトウワンボ・ドールだ。逃げようとしても無駄だぞ。このアレシアはお前よりも早い。お前を作つた時には抽出方法の確立されていなかつた金属。チタンが使われているんだよ。もつとも私たちの時代にはメナカナイトとも呼ばれていたがな。鋼鉄並みの硬度を持ち、遙かに軽い金属だ。これは素晴らしいことだよ」

ガリアは言われるまでもなく、逃げる術を失っていた。なぜなら…

「ガリアー、どうしたの？」

ルカが叫ぶ。

ガリアはその場に倒れ、うずくまつた。

「あ…足と、腕が…」

「ガリアー！ ガリアー！」

「動か…ない…」

それを見て勝利を確信したゾッドは、薄ら笑いを浮かべ、ゆったりとした口調で言つてのける。

「フハハ…どうだ、マヒして動けんだろう？ 私はお前の中にある水晶が衝撃によつて割れることのないよう」と、でき得るかぎりのこととした。だがしかし、衝撃の全てを吸収することはできない。大きな衝撃を受けた時にのみ起こる小刻みな波動。それは水晶が本来持つ規則的な振動をも相殺し、その間トゥワン水晶の機能を奪うんだ。 ああそれからな。飛ぶことは考へん方がいいぞ。バランスを制御できないのだからな」

ゾッドは顎に手をあて、ニヤニヤと笑つた。

「さあて、どうしたものか…」

「クソッ…」

ガリアが珍しく、声を荒げた。その彼の足元で、ルカはただひたすら金属の腕と足をさすった。どうなるわけでもなかつたが…

(…ルカ！)

ガリアが小声で ルカだけに聞こえる思念で呼んだ。彼女は一直線に彼の目を見据え、ガリアが告げる言葉の一語一句に聞き耳を立てる。そして最後に小さく、だがしつかりと頷いた。

「よし！決めたぞ。お前はやはり壊してしまつには惜しい。私の記念碑的な作品でもあるしな。同じようにお前の頭をマヒさせよう。そして私の研究室へ運び、制御機能を書き換える。お前は生まれ変わるので。そして…ルカと言つたな。お前は今すぐに楽にしてやるからな。母親に会いに行くがいい」

アレシアは直立のまま微動だにせず、ただ背後の鋼鉄球に気を集めさせた。そして一気に解き放とうとしたその時！

(今だ！)

ガリアが小声で叫んだ。

ルカはまだ壊れていない空船に飛び乗り、ガリアは地面に放置されていたチャクラムに気を集め、ゾッドに向かつて飛ばした。

ガリアとルカに対して飛ばそうとしていたアレシアの鋼鉄球は、急遽ターゲットを変え、チャクラムに向かつた。なぜならアレシアの持つ最重要プログラムが発動したからだ。それは主人を守ること。かつてはガリアにもあり、今はなもの。それに賭けた。

ガリアはマヒしていない右足で地面を蹴り、ルカの待つ空船に飛び乗った。そして操縦板に埋め込まれた水晶に念を送る。

一帯を震する金属音。チャクラムと鋼鉄球がぶつかる激しい音。まるでその音がスタートの合図であるかのごとく、二人の乗る空船は飛び立つた。

「しまつた！」

ゾッドが叫ぶ。

アレシアは最重要プログラムを果たし終え、次の指示をただジック待つ。それまでの指示はキャンセルされてしまったのだ。

「アレシア、追え！今すぐガリアを追つんだ！」

はたと気がついたゾッドは、再びアレシアに対して命令を下げる。がしかし、なぜかアレシアは動かない。微動だにしない。

「どうした、アレシア！ガリアを追え！追つてヤツらを捕らえろ！」

やはり動かない。

「クソッ、こんな時に！ガリアといい、じいといい、一体なぜ私の思ひょうにならんのだ！」

ゾッドは口惜しそうに叫んだ。

それはアレシアの中にあるバグ。いや、意識が芽生えるための種。ゾッドはそのことを知らない。彼の寝るときの癖は生まれ変わつても尚、変わらないのだった。

ルカは後ろを見て、アレシアが追つてこないことを確認すると、ガリアに告げた。

「もう大丈夫みたい」

するとガリアはいきなり左手を横に突き出した。びっくりしてル

力の鼓動が一瞬早まる。だがよく見ると、指の先にはチャクラムが引っ掛けられて回り、ガリアはそれをすかさず掌に持ちかえた。右手がまだ動かないためいつもとは逆手だったが、それでも苦もなく、チャクラムを反対側の腰にあるホルダーに引っ掛けた。

「体は大丈夫？ 痛くない？」

「ああ、さつきよりはいい。すぐによくなるさ」

「よかつた！」

ルカは安堵に満ちた顔で、ニッコリ笑った。もちろん彼女の中にある不安や疑問は何も解消されていない。それでも今浮かべるその表情に嘘はなかつた。

「ルカ、頼みがある」

ガリアが言った。ルカはさつきよりももっと嬉しそうな顔で、ニッコリ笑つた。

「ようやく名前で呼んでくれたね。今と…それからさつきも
「そうか…そうだな」

ルカには、心中に浮かべる彼の表情が手に取るように分かつた。ガリアは笑っている。それは二人が通じ合つた瞬間でもあつたかも知れない。

「頼みつて何？」

「空船を操縦してほしいんだ。やり方は教える。水晶の制御機能があるから危険はないはずだ」

「え、ホント！？ うん、やる。教えて。あ、でもガリアは？」

「少し…休みたい」

そう言つてガリアはル力に空船の操縦を教えると、少し右足をズリながら船尾に向かい、その縁に体をあずけた。

ル力はさんざん空船の操縦に熱中してからよつやく、ふとあることに気づいた。

「そうだ！ねえ、ガリア。行き先は？」

ル力が後ろを振り返ると、うつむきがちに座り、ピクリとも動かないガリアがいた。一瞬、不安になるル力だったが、すぐにそれは消え、笑みが漏れた。

「ま、いいか。さらっしゃお」

ル力は嬉しそうに「コニコ」と笑うと、再び空船を進ませる。
何のことはない。ガリアは疲れて寝ているのだった。それは彼女にも伝わった。

いつしか空に横たわる厚い雲は完全に晴れて、海に映る月の輝きが進むべき道を指示した。そのキラキラと揺らめく光の輝きを見てル力は、今日見た輝きの中でいちばん美しいと、素直にそう思えるのだった。

まどろみの中、窓の彼方にあるブルーと、それを分割する十字のシルエットを見ていた。そのよく見慣れた窓枠のコントラストを見て、ルカはそこがどこであるかを知る。どんな悪夢を見た後でも安心できる景色。それにシーツの感触。しかしふと気づいた。その中に見慣れない影がある。ベッドの脇に座る人の影。それは父親だつた。きっと面白がって、あたしの寝顔をニヤニヤ笑つて見ているに違いない。そうルカは思つた。でも待て…

ルカはボヤけた視界を取り戻そつと、両手でグリグリと目を擦つた。この場所と父親の存在はもはや当てはまらない。ここはルカだけの聖域なのだ。

「起きたか」

ようやく焦点の合つた視界に映つたのはガリアだった。マントや首に巻いていた布は取り払われ、浅黄色の長袖のシャツを着ている。首が鉄だあ…と、ルカは思う。

ルカはしばらく状況把握ができずに、目をパチパチとしばたかせた後、キヨロキヨロと周りを見回した。

「気のせいかなあ…」

再び枕に顔を埋める。

「ルカはよく眠るな。見ると少し不安になる」

つぶやくよくな念で、ガリアは言った。

「あれー？あたし、床で寝なかつたっけ？」

自分のいる場所を確かめながら、ルカが言った。

「いや、俺はベッドに寝かせた」

「え？あたしがガリアのことベッドに寝かせたんでしょ？」

嗜み合わない。

「俺に家の鍵を渡したの、覚えてないのか？ルカ、そのまま船の中で寝ようとしただろ。仕方なく俺がここまで運んだんだ。寝ボケでんのか？」

「え？あ、あーそうなの？」

ルカは少し照れながら笑う。体を起こしてベッドの上にベッタリと座り、ボーッと上を見上げながら考える。寝癖でピンピンと跳ねている黒髪。

「夢だったのかなあ 考えてみたらガリア抱えながらハシゴを登つてこれるワケないもんね」

この部屋は屋根裏にあり、一階との昇降にはハシゴを使う必要があつた。

「そう、夢つていえばね…」

ルカはまどろみの中で見た父親のことを思い出した。寝ぼけていたとはい、やけにイメージがハッキリしていたと…ルカは今にし

て思う。そしてそれをきっかけに、昨夜のことがまざまざと思い出され、それはついさつき感じた喜びが、ありえない幻想であることを知らしめた。ルカの知る父親がもういないという現実を…

「どうした？」

「あ、ううん…やっぱり何でもない…」

ルカは言葉を飲み込んだ。ガリアは少しの間ルカを見つめた後、窓の外に意識を向けた。下から盛り上がってき入道雲を見ている。それとジージーと鳴くセミの声。昨晩の戦いが嘘のように、平和だつた。

「あ、あたし水浴びて来ようかな。体ベタベタするし…」

シャツの胸元を手で持つてバフバフと風を送りながら、ルカはハシゴへそそくさと向かった。昨夜のことを思い出すほどに生まれる疑問。そして困惑。ルカは一人の時間が欲しかった。

この家は元々倉庫で、湯浴みをするような個室は存在しない。一階は床一面コンクリで、その隅に設けられた井戸とその周りが、この家の浴室であり、調理場でもあった。窓も小さいものが高い位置にあるだけで、近隣に家もない。一人で暮らしている限りは、仕切りなど必要もなかつたのだ。しかし今はちょっと事情が違う。ルカはそれを思い出しても、去りぎわにガリアに一言告げた。

「ガリア。覗いたらダメだよ」

ガリアは振り返り、聞いた。

「窓をか？」

そこにルカの姿はなかつた。ガリアは仕方なく窓の外を見るのをあきらめ、室内を見回す。しかし昨夜から見飽きた景色だ。なかなか変化に富んで面白かったルカの寝顔もない。しばらくはジッとしていたが、やがて立ち上ると、何の気なしに下の階へと降りていった。

彼に罪はない。異性への認識という点で、少し欠けていただけだ。何よりも少し、ルカは説明するべきだった。

ちょっととしたひと騒動の後、しばらくして下の階から、蒸氣を吹き出す断続的な音が響いてきた。ガリアはたつた今起こつた「事件」の手前、下に降りるのをためらつたが、やがて好奇心に負けてハシゴの昇降口から声をかけた。

「ルカ！ 降りていいか？」
「あ、うん。もういいよ」

下に降りると、身の丈程もある巨大なドラム状の機械の前に一台の脚立を置き、その間に差し渡された板の上に四つんばいになつて、中を覗き込んでいるルカがいた。前の印象とはガラリと変わり、丈の長い茜色のローブを着ている。覗き込むドラムの中には水を溜めているようだ。

ガリアは脚立のすぐ下まで来て、見上げながらルカに言った。

「悪かつたな。さつきは…」

ルカの髪はまだ濡れていって、毛先には雲がついている。ブンブンと首を振ると、それは辺りに飛び散つた。

「気にしてないから」

明らかに氣にしている。一人の間に一瞬だけ、妙な間があった。

「それは何だ？」

「あ、見てみる？いいよ、登つてきて」

ガリアは一人がやつと乗れる程度の板の上に乗り、腰を降ろした。ドラムの中には大量の水が溜まつていて、その中にはルカがさつきまで着ていた衣服が沈んでいる。ガリアにはそれが何なのか解りかねて、再びルカを見た。

「解らない？これはですねー」

ルカが得意げに話し始めた。いつの間にか普段のルカに戻つている。いや、戻ろうとしているのかも知れない。

「蒸気洗濯機つて言うの。完成させたのは結構前なんだけど、色々あって試験運転もまだだったのよ。いい機会だと思って　あ、ホラ、見て！」

水槽の中の水が、「ゴウンゴウン」という音と共に、少しづつ渦を巻き始めた。機械の下からは蒸気が吹き出しているが、燃焼された煙は煙突から外へ放出されているようで、室内はそれほど煤臭くはない。

「で、ここに洗剤を入れましてですね」

ルカの口調はいつしか営業口調になっていた。ガリアも真剣にそれに見入る。なぜならルカの作り出すもの。それはガリアの心に不思議な情感を宿させるのだ。記憶にも、そして記録にもないはずの

郷愁とでも言つべきものがそこにある。

「ルカはこの家で生まれたのか？」

「え？ 違うよ。ここは昔お父さんが使ってた仕事場だつたんだけど、いなくなつてからはあたしが使つてたの。もともと住んでた家は売つちゃつた。お母さんも死んじやつたし、あたしには広すぎると思って。それで今はここがあたしの仕事場兼住居つてわけ。でもどうして？」

「いや、別に理由はない。ただ知りたくなつた」

「ふうん。ね、ガリア！ 他には何かない？ 知りたいこと」

「いや、今は特がない」

「そう…」

洗濯槽の中では時折、渦の回転方向が変わる度に、洗濯物が水中で激しく踊つた。それは衣類の巻き付きができる限り防ぐためのアイデアだ。よく考えられている。その渦の流れを、一人はただジッと見つめた。ガリアはあぐらをかいて、ルカはしゃがんで頬杖をつきながら…

「ねえ、ガリア…」

長い沈黙の後、グルグルと回る洗濯物を見ながら、ルカが聞いた。

「…不公平かも知れないけどさ。あたしはガリアに聞きたいこと、いっぱいあるんだ。答えてくれる？」

ガリアはルカに逆に聞き返す。

「信じるか？」

二人とも洗濯槽を見つめたまま、じばらくはその洗濯物の舞を眺めていた。やがてルカはうなずく。

「昨夜のことは夢じゃないよね。あたし、ハツキリ覚えてるもの。あたしに向けられた言葉だけじゃない。ガリアと…お父さんの会話もだから今は、ガリアの言葉が一番信じられると思うの」

ルカはガリアの顔を一直線に見て離さない。

「分かった…でも言葉より見たほうが早い」

ガリアはそう言つと、右手の指ぬき手袋を外し、更に腕から指に至るまでグルグルに巻かれた白い布を、左手で取り始めた。

「それも洗濯しようか？」
「いや、いい」

布を全て取り去り、最後に袖を左手でたくし上げ、むき出しになつた右腕をルカの目の前にさらした。半ば覚悟していたことではあったが、ルカは奥歯をギュッと噛んで、驚きを抑える。

それは少しだけ赤茶けた、鉄でできた腕。関節の部分は鉄の球体がジョイントの役目をしている。いや、それは本当に繋がっているんだろうか？ルカは思う。実際、繋がつてなどいない。全てが浮いているからだ。

「それは…義手？」

一応聞いた。

「違う。俺の体は全てこつだ。見せてやつてもいいぞ。それであい

「だ

「あ、えーと…アハハ…」

ルカはさつやの「事件」を思い出して動搖した。

「やめとく。その代わりもつと知りたい。ガリアのこと、Hンドラのこと、それに…お父さんのこと…って、あ、あれ？」

ルカが真面目に話しているにも拘わらず、ガリアは何かを気にして、洗濯槽をジーッと見てくる。

音はさつきからあり、少しづつ大きくなっていた。ルカは耳で聞いていながら、気づくのが遅れた。考えることが多かつたせいだろう。ガリアを見て、ようやく意識がそつちに向いたのだった。

洗濯槽の中は今や

「中の水が沸騰してる…！」

両手で頬を押されて叫ぶルカ。洗濯槽の中はボロボロにぬだつて、中にあつたルカの服は踊りまくっている。

「どうしよう…」

「やつぱりいけなかつたのか？」

ガリアが言つた。疑問には思つていたらしい。

「と、とつあえずお湯を抜いて…あ…その前にバルブ…あちちつ！」

「貸せ！俺がやる。ルカは離れて指示だけ俺にくれ」

室内はムンムンとした蒸氣でほとんど視界がきかなくなり、その

中をルカの叫び声ばかりが響き渡つた。ガリアは冷静に動き回つた
がしかし、もはやパニック。

後に残るのはいつまでも消えない異常な部屋の湿気と、少しだけ
くたびれて窓の外に干され、はためいているルカのシャツとパンツ。
しかし、彼女の中には心の不安は、少し薄らいでいた。
そしてその日は夜遅くまで、ベッドの上で二人は色々な話をした
のだった。

消えない心

ある日突然、暗闇だった「それ」に光が差し込んだ。そして「それ」は一部始終を記録していた。

その場所は放棄された場所だった。

かつては港町として栄えた時代もあったが、地形的な要因からこの百五十年の間、何度も戦争の激戦区となり、ほぼその数だけ国も変わった。町は戦争の度に廃墟となり、その数だけ復興を果たして栄えたが、「失われた時代」以降は徐々に町は寂れ、いつしか放棄されてしまった。わざわざ復興するまでもなく、既存の町で十分だったからだ。

世界全体を覆う霸氣のなさは人の数を減らし、徐々にではあるが文明は逆行していた。

パンターニ自動機械会社の経営状況が一向に良くならないのも、そういうた世相とのギャップが大きく関係していたのだろう。社長であるパンターニは少しでも安い土地に会社を移し、より開発に力を注げる環境を作ろうと一念発起した。経営に疎いはずの彼の、追い込まれ具合が分かるというものだ。

そういう意味でこのかつての港町は、とても魅力的な場所には違ひなかつた。

「それにしても暑い日だ…」

毎日を自社の研究室で過ごしていた彼にとって、日焼けは最も縁

遠いものの一つと言えよう。見た目は背も高く体格のいい彼だつたが、それは骨格が恵まれているからに過ぎず、実際には胸のあがらが見えるほどに痩せていて、最も似合つ場所はやはり研究室の中ということになるのだろうか。朝からの下見で、彼の白い肌は一部で赤く炎症を起こし始めている。

「しかしここは廃墟といつより、既に遺跡じやないか。まあしかし悪い場所ではない。ウム」

パンター二は地図を広げながら一帯を徘徊し、自身を納得させるかの如くブツブツとつぶやいていた。人気はない。しかし、彼の背後にはペットのように付き従う空船が浮いている。それはミニーチュアで、以前かなりの高額を出して買った、初期トゥワン王国製の骨董品だった。

深い理由などない。ただ単に子供がオモチャを買つとの同じような気持ちで買つただけだ。彼はそれを惜し気もなく荷物運搬用として使い、汚れや傷によつて、今や装飾的価値は大きく失われていた。しかしそれは彼の中にある強い好奇心を表す一例とも言えた。

「…付近には比較的大きな町もあるし、水は豊富にある。何よりも土地はタダ同然…と。ヨシッ！」

右手でパンツと地図を叩いたその時、パンター二の目の端に一瞬、瞬くような赤い光が飛び込んだ。

「なんだ？」

すぐに顔を向けたが、もうそこに光はなかつた。見る位置を何度か変えてみるもの、もはや見つからない。普段ならそれ以上の詮索はせず、首をひねる程度で通り過ぎる所だが、彼はその場所に興

味を持った。

「これは… また特別古い廃墟だな。ン？ あれは…」

一歩近づいた所で、パンターは幾つかの金属の断片を見つけ、半ば土砂に埋もれた廃墟へと、更に近づいていった。

そこにある金属の多くは、ある部分までは真っ赤にさびついているのに、途中からは線で引いたようにさびの質が違う。よく見ると廃墟の中にある木材や煉瓦にしても、同じ風雨にさらされたとは思えないほど、場所によって保存状態が違う。

「どうやらこの辺りは最近露出したようだな。地滑りか地震かにしてもいつの時代から埋もれてたんだらう。やけに金属片が目につく。見たところ元は普通の家のようだが…」

パンターは辺りを見回す。すると

「ん？ これは…。 うおつー。」

突然の奇声。最初は分からなかつたが、それは土と瓦礫の中から露出した人の骨。その手の部分だった。掌を上に向けて、持つているのは真っ赤な石。トウワソボだ。

「これが…さつきの光は。いやしかし、随分ときれいな石じゃないか」

パンターはトウワソボを拾つて汚れを拭き取ると、手のひらで口口口と軽く転がした。もちろんそれがトウワソボであることに、彼は気づいていない。

「今度ルカに送つてやるかな。そういうのが好きだつて手紙に書いてあつたっけ」

死人が握つてたことなど氣にもしない。なぜなら彼は普段から「科学の男」を自称してはばかりないからだ。とは言え今は科学の時代ではない。彼を変人扱いこそすれ、それを羨むものもいないのが現状だ。

死人から取り上げたことはルカに黙つておこう……と、パンターニは思った。家族を捨てる以前、まだルカが幼い頃。オバケの夢を見たと言つて、一晩中泣きやまないことがあつたのを思い出したからだ。

「あいつも今年でもう一一歳か。早いもんだな……」

自分の夢のために家族を捨てた彼であつても、娘ルカの存在だけは消せない。というより、消すつもりも毛頭ない。さすがに彼の命でもある会社と天秤にかけるつもりはないが、それでも母親に内緒で、偽名を使って送るルカへの秘密の手紙は、以前に比べて確実に増えていた。

彼は真夏の青い空を見上げて一時、物思いにふけつた。

「IJの暑い日差しも、ルカなら似合うのだろうな……」

自分とは違う、茶褐色の肌を持つた娘はいつも自慢だった。しかし同時にこうも思う。褐色の肌を持つた妻への愛は、いつしか消えてしまった……と。

「結婚する前は自慢の恋人だつた。私がトウワンの血を引く女性付き合えるなど……。だが思えば、それだけだつた……」

ふう…と、一つため息。

しかしその直後、彼は辺りをキョロキョロと見回した。

パンター二は何か皮膚が泡立つような、妙な気配を感じていた。別に寒気がしたわけではない。鳥肌も立たなかつた。純粹に細胞が感じたのかも知れない。

突然、背後に浮いていた空船のミーチュアが、ガタンッ！と、その役目を放棄して落ちた。上に乗せてあつた荷物が地面に投げ出され、パンター二の足元に「ロロロロ」と転がつて踵にぶつかる。

「な、なんだあ？」

後ろを振り返り辺りをしつこく見回し 結局、首をひねつた。

「なぜ落ちたんだ？ まさか、壊れたのか？ いや、『失われた』のか？ これも…」

再び空船に向かつて（浮かべ！）と、念じてみる。ダメだ。もう一度 と、念を送つたその時、逆に、空船からパンター二に流れこんでくる何者かの意志があつた。

…デ…ルカ…

「な、なんだ、一体！」

その声 いや、念に対しても、心を集中する。それにしてもなぜ？ とパンター二は疑問に思つ。その思念は空船から送られてくるようなのだ。

…シン…タマ…

聞き取れない。更に心を開く。集中する。

…シンデタマルカ…

思念はそれを繰り返している。何度も、何度も、何度もだ。

「し、死んでたまるか…だと? 船が壊れそうだから まさか!?

そんな…。空船は生きているのか!」

パンター二の背に冷たいものが走った。

最初、彼は勘違いをした。その思念は空船が発しているのではない。空船は単に仲介役に過ぎず、発信しているのはトウワンボだつた。だがいずれにせよ彼はその思念に対して好奇心を抱いただろうし、トウワンボとの同調は免れなかつた。それは彼の運命を決定づけたのだ。

百五十年前、瓦礫の重みに耐えながらゾッドが繰り返した心の叫び。それは死の深淵に望む最期の最期まで、諦めることなく続けられた。その執念。それがトウワンボの未知の力を引き出したのかも知れない。ゾッドはその肉体が冷たくなつても尚、叫び続けていた。彼の心は肉体を越えてトウワンボに乗り移り、百五十年もの間、繰り返し繰り返し叫び続けていたのだった。

その心は今、トウワンボと同調する空船のトウワン水晶を介し、心を開いたパンター二に語りかけてきた。

オマエハダレダ

その耳の奥。脳内部に響く何者かの声に、パンター二は動搖した。

「ほ、本当に空船が?いや、これは違つぞー。」れは…ウッ、うわあ

!」

強烈な頭痛が襲つた。疑問は許されない。ただ受け入れるのみ。感じるのだ。脳にある全ての情報が榨取されていく感覚。脳髄にナイフをサクサクと入れ、開いて中身を覗かれるような凍るような嫌悪感。

パンターニは今起きていることを、自分の科学知識でなんとか証明しようとした。科学の男ならばそれも当然のこと。だが何も浮かんでこない。頭が働かないわけではない。想像もつかないので。

…オマエディイ…クレルカ…オマエクレルカ

その開かれた脳髄の中に注がれるものがある。それはパンターニの全く知らない記憶の断片。がしかし、それを見る間もなく、自身の心が、その圧力に押し出されようとしているのをパンターニは感じた。

「な……なんだこれは？出でていけ！そこから出でていけえつ……」

パンターニは半狂乱になり、両腕をやみくもにブンブンと振る。次に頭を抱えて、叫ぶ。狂ったように叫ぶ。いや実際、狂っていたのかも知れない。脳から追い出されようとしている精神が、通常であり得るはずもないからだ。

彼は叫び続けながら辺りをのたうち回り、やがてうずくまつた。叫びは止まり、肺に残された最後の酸素が嗚咽となつて辺りに響くと、それ以上酸素が吸引されることはなく、そこで呼吸は止まつた。次の瞬間に突然、生命感なく崩れ去る。その掌からトウワソボがコロコロと地面に転がる。

そして動かなくなつた。

パンターニの中に、どんなに強い夢や、希望や愛。それに対する固執や執着があつたとしても、百五十年もの間トウワソボに封じ込

まれた　いや、封じ込めるだけの執念と、それによつて熟成された魂になど勝てるわけがない。

末期症状の病に打ち勝つほどの強い氣を持つ人間が、事故で他愛もなく死んでしまうように…

そう、それは事故だつた。全てが偶然の産物でしかない。この場所に来たことも、赤い光が彼の瞳を刺激したことも、そして空船という、トウワンボ機関の乗り物を持ち歩いていたこともみんな。

パンターニの心は今まさに、消えようとしていた。

心が消えゆく時に彼が思い抱いたこと。それは会社のことだつた。彼はこの期に及んでもなお、自分の会社を気にした。なぜならそれが彼にとっての命だつたから　だがしかし、本当は違う。彼自身気づいていない、本当に大切なものがある。

それが神の情けというものなのか　命の、その最期の深淵の時、奇跡的に繋がつた彼の神経が、一瞬だけ震わせた声帯。それこそが本当の、彼本来の魂の叫びだつた。

「…ル…カ…」

それが最期の言葉となつた。そして空白
突然、大きな肺の吸引と共に、パンターニの肉体は激しく咳き込んだ。

彼の体に生命の息吹が復活し、ゾッドがその肉体の新しい主人となつた瞬間だ。そして今度は、その主人の意志を伝えるために、声帯が震えた。

「腹が減った…」

ゾッドとなつたその肉体はつぶやいた。百五十年ぶりのその感触。その言いしえぬ心地よさ。

「なんと…素晴らしい…」

ゾッドは仰向けになり、肉体が感じるあらゆる感覚と共に、空を見た。

この世界を覆つ真つ青な空。その青さに彼の瞳は、なぜか濡れた。ただそれだけのことと、ゾッドはむせび泣いた。涙は止めどなく溢れてゆく。

生きていること… それは彼にとって最高の喜びだった。

自らの才能をふるうために唯一必要なことは、肉体を持つことであり、生きることなのだ。彼はそのための生存競争に今、勝った。

彼はゆっくりと立ち上がり、地面に落ちていたトウワーンボを拾うと、それを固く握り締めそして、笑うのだ。いつまでもいつまでも、笑うのだった。

瓦礫の中で「それ」はあがいていた。動きを阻害する様々なモノが「それ」を締め付けている。久しく動かしていなかつたその体を懸命に動かし、ただあがく。先に見える光に向かつて…

なぜ自分はここにいるのだろう?

「それ」は思う。最初に抱いた疑問だ。そして心の中にあるこの痛みは それにさつきまで見ていたあの男 そしてゾッド…

「ゾッド?」

聞き覚えのある名だ。

記録を探した。そしてその中から一つ、分かつたことがある。

「俺は…俺の名は…ガリア…」

彼は自覚した。

「それにこの痛み」

それも分かつた。あの、パンターーという男。その魂が宿つたからだ。この痛みはあの男の痛み。心が消えても残つた埋み火。ガリアに自我を与えたもの。

夕刻。瓦礫の中から這い出したガリアは、黄昏の光を浴びて立ち上がつた。

「この魂は、なぜこんなに痛いんだ…」

彼にはまだそれが分からぬ。心の痛みを感じながら、ガリアにはそれが実感できない。なぜなら彼は今、夕日に向かって歩き始めたばかりの赤ん坊だから。彼が正面に見据える、夕焼けの美しさすら実感できない。そして黄昏の意味さえも。

だがやがて知るのだ。自分を生み出した者を殺すこと。ただそれだけが、魂の痛みを浄化してやれるということを。

父親の犯した罪を償えるのが、自分だけだとこいつことを…

心の顔

もう随分前からずつと膝を抱え、その中に顔を埋めていたルカが、不意に顔を上げてガリアを見た。その勢いにベッドが揺れる。

「 それじゃあーガリアの中にはあたしのお父さんの心があるの？」

ガリアは首を振った。

「いや…心はない。ルカの父親が残したものは心の痛み 悲しみや、憎しみや、悔い。そういうたものだけが、俺の中にある」

ルカは再び、涙に濡れた膝に顔を埋める。

「やつぱり 死んだんだ…」

「ああ…」

ルカの脇に座っていたガリアはベッドから降り、なにげに窓に寄つた。窓は少し汚れていて、室内のランプがガラスに反射して、外はよく見えない。だがいざれにせよ夜。暗やみだ。見えるのは窓に映る、顔を伏せたままのルカ。でもさつきまでよいはいい。さつきまではガリアの話に何度も体をビクつかせていた。

「これは？」

ガリアは窓の桟にこつ然と置かれた、金色のリングを拾い上げて

言った。文字が彫られている。

「…愛する…リリタ…」

ルカは顔を上げた。

「あ、それはお母さんの形見。エンゲージリング。お父さんと別れてからもずっと持つてた…」「身に付けないのか？」

ルカは微かに笑った。

「だつてそれサイズがね。あたしには大きすぎるの。ペンダントにするつもりで置いておいたんだけど、忙しかったから　ちょっと貸して」

ルカはベッド脇の、小物入れの引き出しを開けて、中から細い金属のチェーンを取り出すと、そこにリングを通した。チェーンを首の後ろで止めて、リングは寝巻の胸元に入る。服の上から胸をポンポンと手のひらで叩いた。

「へへ、これでもう忘れない。ゴメンね…」

ルカの自然な笑い。そしてガリアが突然、言った。

「それがいい
「え？」

意味が分からずるルカは聞き返す。

「俺は……ルカのその顔がいいと思つ
「その顔つて？」

笑顔のこと言つてこむらじい。

「あ、えと……これ？」

ルカは一ヶ口笑つてみる。でもそれは作り笑い。

「違うけどそうだな。そんなのが好きだ」

「そうだね。あたしも笑つての方が好き。泣くのはやだな……」

ルカはうつすらと苦笑いをした。

「ルカの顔を見ると面白いんだ。たくさん顔があつて。それは俺にないものだから……」

あきらめたように、ガリアは言つ。

「そんなことないよ。ガリアにだつて表情はある

「俺の顔はただの鉄だ。ルカとは違う。ただの人形だからな」

それを聞いて、ブンブンと首を振るルカ。

「そんなことない。あたし、ガリアが色んな表情をするの、分かる。ううん、見える。言葉の調子とかそんなんじゃなくて、笑つたり、驚いたり……」

ガリアは無言でルカを見る。いや、睨んでいる。

「本当だよ！あたしにはガリアの表情が」

「なあ、ル力。俺は慰められるのはあまり好きじゃないんだ」

「見えるもん！最初の内は分からなかつたけど。今思い返してみるとガリアの顔、無表情のはずなんだけど、あたしの中ではちゃんと表情があるの。エンドラを出た時は笑つてくれたし、洗濯機を見る時は真剣だつた。本当だよ」

「じゃあ、今はどんな顔だ？」

「えつ！？えーっと…」

ル力はガリアの顔をジーッと見る。

「む、無表情」

ガリアは頭を抱えた。

「今は本当に無表情だつたの！」

ル力にとつてそれは決して慰めではなく、本音だつた。しかし見えるのではない。感じるというのが正しい。それがイメージとしてル力の中に残つていて、後からガリアの表情となつて記憶の中で再生成されていたのだ。単に見ようとしたところで、無表情なのも道理だ。

二人はそれからしばらくの間、沈黙した。

ル力はガリアを怒らせてしまつたと思つたし、ガリアは ル力に対するイラ立ちは既に消え、考えていた。相手のこと。自分のこと。ただ、それを言葉にするきつかけが見つけられないのでいた。いざにしろル力と出会つてから、ガリアは変わりつつあった。

「ねえ、本当にそのままでいいの？マットべらい敷くよ」

やがて深夜へとさしかかる頃。ガリアが床の上にじかに寝ようと
しているのを見て、ルカが言った。

「いのままでいい

ガリアは床に寝転んだまま、言葉を返す。背を向けていて顔は見
えない。

「ねえ…やっぱり怒つてる?」

「怒つてない」

「でもなんか恐い…」

ガリアは何も言わない。

「ねえ、ガリアつてば！」

その言葉によつやく、ガリアは反応した。

「さつき、機嫌が悪かったのは事実だし、俺にだつて意地もあるか
らな」

「意地つて?」

「急に優しくできるほど、俺は素直じゃないんだ」

一瞬の静寂の後、ルカはクスッと笑った。

「素直じやん」

ガリアは体を起こし、片ひざを立てた。ルカはその横顔をジッと
見ていた。

「…少し、ルカの表情に嫉妬したのかも知れない。悪かった」

ガリアは振り返った。その顔に笑みが浮かんでいるのを、ルカは感じた。

安堵するようにルカも笑う。

「それからマットな、俺の体は床より硬いからいいんだ。ルカ達より眠る時間も少ないしな」

「え、そうなの？」

身を乗り出すルカ。

「ああ、体は疲れないから。俺は頭を休めるために眠る。…さあ、灯り消すぞ」

下手をしたらまた長話になりかねないルカ的好奇心を、ガリアはそこでうまく断ち切った。

「あ、待って…」

ルカは急いでシーツの中に身をくるめる。

「いいよー！」

部屋の全ての景色が残像となる前に、ルカは固く目をつぶった。

そして…

「ねえ、最後にひとつ…いいかな？」

「なんだ？」

それは既に暗やみの中の会話だった。そして少しの間、沈黙がかった。

「やつぱりゾッドの」と…殺すの？」

不意打ちだった。今は考えたくないことだったが 仕方ない。
答えは決まっている。

「ああ…」

ガリアはうなずいた。

夢のない、深い眠りだった。

しかしどこからか、呼ぶものがある。それが誰の声なのか、ルカには分からぬ。

おーい！

と呼ぶ、父親の声だったかも知れない。

ねえ！

と叫ぶ、母親だったかも知れない。

いずれにしろそれはルカの心を引っ張り、その心地よい、精神の奥底から引き上げようとするのだ。ルカにはそれが苦痛だった。

あたしはまだここにいたい！

そう思つた。でもそれは有無を言わさず、邪魔をする。引っ張る。

それがつらい…

そしてルカを呼ぶ者は、不意に大きな叫び声となる。

(ルカッ！)

ガリアだ。それはガリアが繰り返し繰り返し叫ぶ、心の声だった。

ルカは目を覚ます。辺りは暗やみで、目をいくら開いても何も、見えない。

「ガ…ガリアあ…」

心細くなつてルカは呼んだ。

(ルカ、起きたか!)

安心した。ガリアの声だ。でもいつもと何か違う。声が遠いのだ。

「ガリア、どこにいるの?」

ルカは手探りで辺りを探す。

(そんなことより聞け! いいか、ルカ。その家を急いで出るんだ。
とにかく早く!)

ガリアの声は切迫していた。

「早くつていつたつて… 何も見えなくて…」

ルカは台の上に置いたはずの着替えを手で探つた。

(いいからそのまま出るー死にたくなかつたら早くしりー)

そう言われてルカは、首をかしげながらも急いでハシゴを降り、何度も体を機械にぶつけた後、なんとか外に出た。寝巻姿に裸足のまま。

(そのまま走れ！できるだけ早く家から離れろー）

わけが分からぬ。それでもルカはガリアの言葉に従つた。曇り空で月明かりもないものの、それでも道はなんとかつすらと青白く見える。

「これは夢？」

そもそも思ひ。こんな暗い道を全速力で、しかも寝巻で走らされるなんて…

そう思つた矢先、暗やみだつたはずの辺りの景色が一瞬、フラッシュを焚かれたように白く輝き、網膜に焼きついた。心臓が張り付く。

そして爆音。何よりも爆風は衝撃波となつてルカに迫つた。安全圏にはまだ距離が足りない。

だがどこからやつてきたのか？何者かがルカの背後にスタン！と降り立つと、彼女を抱え上げ、爆風に逆らうことなく飛んだ。吹き付ける熱風から守る壁ともなつた。

「ガ、ガリア！」

それがガリアだということはすぐに分かつた。見るまでもなく、

体が覚えている。

安全な位置まで離れた所で、ガリアは空中に浮いたまま旋回し、爆発のあつた方を向き直る。ルカもガリアに抱かれながら、首を曲げてそれを見た。

「ウソツ！あ、あたしの家が…」

燃えている。

ルカは腕の中で暴れだし、無理やりその中から出でこいつとした。

「バカ、暴れるな。落ちるぞ！」

「いいから離して！こんな高さなんでもない。早く行かないとあたしの作ったものが燃えちゃう…」

ガリアは再び空中で旋回し、背後で燃えている炎の光からルカを隠した。抱き抱えたままルカの顔にじり寄り、一言一言、言い含めるように言うのだ。

「もう間に合わない。あれは爆烈弾だ。爆発と同時に家は吹き飛んだ。中の物も全部だ。中の物はまた作ればいいが、今飛び出して行けば、お前は即、殺される。家の上空を見てみろ」

ルカはガリアの肩からソッと顔を出し、言われるままに上空を見る。赤い炎に照らされる船。

「あ、あれは…空船？」
「ゾッドの部下だらうな。追ってきたんだ」

空船は一艘。破壊された家の上空を何度も近く近づき、何かを探し回つていようだつた。

「で、でも何であたしたちのいる場所が分かつたの？」

ガリアは小さくうなづいた。

「もつと早く気づくべきだった。ゾッドにはルカの父親の記憶があるんだ。少し前、東の方でも火の手が上がったんだが、それを見て急いで戻って来た。そこはたぶん……」

「まさか、あたしが昔住んでた家？」

「やっぱりそうか。東の方なのか？」

「うん。でも今は他の人が住んでるはずなのに……」

「わずかでも可能性があれば……つてことだらうな」

「そんな……ひどい」

ルカは顔を覆う。

「送られてきた空船は一艘か。もし俺がいると確信してたら、アレシアとかいうヤツを送つてきただろうな。ゾッドには何より、俺が邪魔なはずだから つてことはマズイな……」

「何が？」

「ゾッドにしてみればここは他国なんだ。なのに無謀すぎる。だがそれは逆に自信の表れかも知れない。もしかしたらエンドラの都市そのものが、一国の力をも越えている可能性だってあるつてことさ」

ガリアはそのまま空中を移動し、現場から去りうつとしていた。

「待つて、ガリア。エンドラからあたしたちが乗ってきた空船は放つといついいの？ 何か調べてるみたいだよ」

「俺たちの遺体をだろ？ 勝手に調べればいいさ。ヤツを殺すのは簡単だけど、部下が行方不明になれば俺の仕業だと思われる。痕跡を

残すより、今は逃げた方がいい」「

ルカは止むなくうなずいた。蒸気洗濯機の復讐心をなんとか押さえ付ける。いや、それだけじゃない。蒸気掃除機に蒸気芝刈り機。蒸気リング皮むき機にそれから…

「そつだー！ 考えてみたらガリアは何で家の外にいたの？ 一緒に寝たはずなのにさ。散歩？」

答えない。

「あ、何か隠してる。分かるよ。ヤバイって思つたでしょ」

ルカは少し得意氣な顔。ガリアは やはり答えない。

「言つたくないこと？」

ルカの声が若干沈んだ。更に長い沈黙の後、ガリアはあきらめたようによつやく話しかけ始めた。

「…これ以上、一緒にいられないと思った。もう一度と、ルカとは会わないつもりで、出てきたんだ」「

「なんで！ せつかく仲良くなれたのに」

マントの襟首をつかんでじり寄るルカ。ガリアは抵抗することなく、話を続ける。

「だからさ。だから出でていこうとした」「え、どうして？ 分かんないよそれじゃ」

と、ルカ。それでも、仲良くなつたという言葉 자체をガリアが否定しなかつたのは、本音を言えば少し嬉しくもあつた。

「言つただろ？俺には生まれた時から心の痛みがある。でもなぜ痛いのか？俺には分からなかつた」

「それはやっぱ あたしのお父さんはガリアにとつて、他人だから…」

「いや、そうじゃなく、俺には人間が心を痛める理由さえ、昔は分からなかつたんだ。でも生きてるうち、だんだんと分かつてきた。同時に、それが自分の痛みでもあることにも ゾッドは俺にとつて、父親も同じだつたから…」

「ガリア…」

そのガリアの寂しげな口調に、ルカは彼を抱き締めてあげたい衝動にかられた。ガリアは続ける。

「俺は思つた。ゾッドが犯した罪を償わせることができるのは、俺だけだと それが役目だと思った。でもルカと出会つてからは、ゾッドを殺すことは同時に、ルカの父親を殺すことにもなつた。もちろん、最初はその現実を見せることも俺の役目だと思つたし、ゾッドはルカにとつては仇だからな。それでいいと思った」

ルカは一生懸命、自分を納得させるためにコクコクと頷いている。

「だけど違う！心はゾッドでも、肉体は今も父親だつてこと ルカはそのことを気にしてる。それが分かつた以上、ルカと親しくなるわけにはいかなくなつたんだ。だから離れようとした」

それは確かに図星だった。父親を殺されたくないと思っているのは事実だ。だけど…

「それは罪の意識？」

ルカは訊ねる。

「それもある。何しろゾッドは一筋縄じゃない相手だ。迷いは持ちたくない。ルカがどう思おつが、今ならまだ 殺せる」

いつしか東の空は白み始め、景色はボーッと青紫色に輝き出した。空を覆う厚い雲は変わらない。

「ねえガリア。あたしをよく見てよ」

ガリアは抱きかかえたまま、ルカを見下ろした。

「あたしには今、何もないの。家もなければ着るものだってない。これには罪の意識は感じない？」

そこには出会った時とは違う ビーズの飾りも一切ない、ただ薄く白い寝巻をまとうだけの少女がいた。裾から出る細い足首や、骨張った踵を守るものすらない。

「悪いとは思つてゐ……」

「違う！」

ルカは強く首を振つた。

「これはガリアが悪いんじゃないの。でもキミは今、あたしに残されてるたつた一つのものを…奪おうとしてるんだよ」「分かつてゐる。でも悪いが、ゾッドは殺す」

「そうじゃない！まあ、そりや目の前で父親の肉体が殺されるのは見たくないよ。だけどそうじゃないの。あたしに残されたたつた一つのものはね……」

「？」

「ガリア。キミだよ」

ガリアの移動は突然に止まり、その場で硬直した。

「…なぜ？」

「分かんないよ。でもあたし、ガリアに捨てられたら、きっと泣く。ガリアが好きだって言つてくれた顔に、戻れなくなると思う。それはもう、ゼッタイ！」

するとガリアはゆるゆると降下し、地面に着地した。

「どうしたの？」

「い、いや…分からない。でも今は 飛べそうにない」

「あ、じゃあ降ろして。歩くから」

「大丈夫だ。歩くぐらいならできる」

「そう？じゃ、甘えちゃおうかな」

まだ人気のない朝の道を、鳥の声に囲まれながら一人は進んだ。ガリアは考える。今心中を占める、この奇妙な感覚はなんだろう？それは分からぬもの。でも、分かることもある。守らなくてはいけない存在が、目の前にいる と。

「ね、ガリア」

ルカの問いかけに、ガリアは答える。

「分かつた。捨てないから安心しない」「そうじゃなくて！」

ルカは笑う。

「ガリア、お金ある？」
「ああ。でもなぜだ？」
「服買つて欲しいなーって。あと、靴も」
「分かつた。あとで渡す」

しかしルカは首を振る。

「……って、まさか俺が買うのか？」
「だってあたし、こんなカツコでお店入れないもの」

ガリアはしばらく歩みを止めた後、

「分かつた 買えбаいいんだな」

そう言つて、再び歩きだすガリア。

ガリアの顔が困つてゐる。ルカはそう感じた。でもあえてそれを口に出すのはやめた。今はガリアが困つていればいるほど、ルカにはそれが嬉しい。

「なに笑つてんだよ」
「ううん、なんでもない」

そう言つてまた、笑つた。

「いい、いくよー。」

「分かつたからさつせとしてくれ」

町を一望できる丘の上、ルカはマントをグルリと巻いて全身を覆い隠し、あぐらをかいて待っていたガリアをジラした。何回か体を横に屈ませて、二二二二二二二二、もつたいぶるルカ。その度にマントの裾が地面に擦れる。

「じゃーん！」

マントを勢いよく外し、彼女にしてみれば、ガリアからのプレゼントでもある衣服を披露した。それは膝丈の白い七分袖のワンピースで、袖口と襟首に青い刺繡が施されている。襟首の前には短いスリットが入り、刺繡もその型に合わせてV字型を描いていた。

「ねえ、似合つ？」

ルカから返してもらったマントを、慣れた手つきで肩口に巻き込みながら、その質問にガリアはうなずいた。とこりより、うなずくのが無難だと判断した。

「ねー、かわいいよコレ。ホントはもつととんでもないの買ってくれるかも、とか思ってたんだけど、良かった。靴のサイズもピッタリだし。指でサイズ計った甲斐あったね」

ちょうどガリアが手のひらを広げた時のサイズと、ルカの足は同じ大きさだった。

「本当はな…もつと動きやすい服を買つつもりだつたんだ。でも相手が女だと分かつたとたん、店主が色々聞いてきて、これはダメだとか、それは流行りじゃないとか 一体なぜなんだ?」

困惑するガリアの仕草を見て、ルカは笑つた。

「その店主つて、女人の人でしょ？」

「よく分かるな。年配の人だつた。小さな店だつたな」

「ふーん。大きなお店だつたら違つたかもね。でも何でこんな遠くまで飛んで来たの?途中にもつと大きな町もあつたのに」

「この町は モナンブーワは昔の馴染みなんだ」

「ガリアの…へえ。ここ、モナンブーワつて言つんだ?」

「ああ、住んでたことがある。まあ、あの店は初めてだつたけど。つと、それからな」

そう言つてガリアは、何やらマントの下でゴソゴソと不穏な動きを見せた後、その隙間から無造作に手を出して、ルカにある物を手渡した。

「え、何?」

手のひらに乗つていたのは、ビーズの首飾りだつた。色とりどりの硝子ビーズが、複雑で綺麗な、幾何学模様を描き出している。

「わー!ガリア…これ。わざわざ買つてくれたの?」

ルカは信じられないという顔で、ガリアを見る。

「前も体中に付けてたる。それぐらいしか見つからなかつたんだ。
同じにできなくて悪いな」

ガリアには、何の照れも躊躇もない。プレゼントといつ意識はないようだ。

「同じについて…」

ルカは少し苦笑い。それに、体中にじやないよーと、心の中でつぶやく。

「どうかしたのか？」

「ううん、何でも、ね、ガリア。付けてくれる？」

ルカはめげずに言った。

「一人でできるだろ。さ、行くぞ」

それつきり彼女を見ることもせず、ガリアはスタスターと丘から続く山に向かつて歩いていつてしまつた。

ルカは少しふくれつ面で、それでも小走りにガリアを追いかけた。自分で首の後ろに回す両手が悲しい。それにこの動作は慣れている。ガリアに追い付いた時には、ビーズは既に、首を美しく飾り立てていた。

「ま、嬉しいけどさ」

小さな声で、ルカはつぶやいた。

細い急勾配の道を、両脇から下草やら枝、その枝から枝へと網を張るクモの巣などが行く手を阻んだ。ガリアはそんなもの気にも止めずにガンガン進んで道を開けるが、時々、ガリアに弾かれた枝や、壊されたクモの巣がルカにも襲ってきた。

(さつきみたいに抱えて飛んでくれれば楽なのに…)

息をゼエゼエ切らしながらルカは思う。瞬発力のある彼女も、持久力には秀でていないうだ。それにだいぶ疲れもある。いつたん足を止めて、ふう…と、一息ついた時だった。ルカは何かの気配を感じて、釣られるよつに脇を見た。

「あー、リスだよ。リス。見て見て。ねえ、ガリア」

最初、短く叫んだ後、ひそめるような声でガリアを呼ぶルカ。

「ハラが減ったのか？ もう少しで着くからガマンしろ」

一瞬振り返ったものの、ガリアはそれ以上の優しさを見せずに、木の生い茂る山道を更にどんどん登つていった。

リスは木の枝の上で、両手をクルクルと回して忙しそうに顔を洗っている。すぐ可愛い。

(食つかつ！)

そうして一人はようやく森を抜け、斜面の勾配も緩やかになった。ハア…、と、大きく息をつくルカ。そして目の前に広がる景色を見る。それは、幾つもの切り株がかつての伐採を思わせる切り開かれた雑草の台地で、丘、崖、そして湧き出る清水といった、この山の

中腹の姿だった。しかし、何よりも目を引くものがここにはある。

「あれは…反射炉？」

ルカが言った。

「よく知ってるな。古いものだ。今は動いていない」

煉瓦造りの一本の高い煙突が、崖の下の台地にそびえている。それは鉄製銑のための旧式の炉だった。他にも崖の上には、やはり旧式の大気圧機関を利用した揚水ポンプが見える。ルカの知る蒸気機関よりもかなり遅れたものだ。それとこの地を象徴する巨大な立て坑と、幾つもの横坑がある。

「鉱山ね。でも誰もいないみたい」

「昔はどこかの会社の敷地だつたらしいけどな。随分前に潰れたつて話だ」

「あ、ガリア。あれ見て！」

思わずルカが声を上げた。今度はリストこうの騒ぎではない。彼女が指差す先には、つる植物に覆われ、自然と同化しつつある大型の空船があつたのだ。

一部露出した船体は朽ちかけ、長い年月の経過を偲ばせる。それによく見ると、台地のいたる所にそんな縁の起伏があり、恐らくはそのどれもが死んでしまった空船、もしくは何かしらの人工物であることは容易に想像がついた。

「昔は掘り出した鉱石や、製銑された金属を運んでたんだろうな。

『失われた時代』が来るまで、トゥワンボ機関が全ての動力の中心だった。ここも例外じゃない」

「廃坑…か。でもあれは？反射炉とか、大気圧機関のポンプとか。トウワソボとは関係ないよ」

「この鉱山の場合、炉や揚水ポンプに使つていた水晶の力が先に失われたんだ。だからあれは急遽あつられた代用施設さ。当然、鉄の質も格段に落ちた。その後、空船も飛べなくなつて、結局この場所は放棄された。空船の代わりにトロッコを町まで通す考えもあつたらしいけど、それまで会社がもたなかつた。それは鉄の需要が激減つたせいもある…って、確かそんなこと聞いたな」

「ふーん、詳しいんだね。なんで？」

「言つたる。昔住んでたつて」

「でもガリア、目覚めてから三、四年でしょ？よく古い話知つてるよね。そんなに下の　えーと町…」

「モナンブーワ？」

「そう！そこの人たちと親しい『近所づき合い』してたの？」

首を軽く左右に振りながら、ガリアは答えた。

「それはないけど　でも、一人で住んでたわけじゃないから…」

「え？」

ガリアは背を向けて、更に歩いた。最後に見えた表情は、悪戯そ
うに少し笑つているようにさえ感じられた。

反射炉の象徴とも言えるガツシリとした背の高い煙突は、対照的に粗雑な造りの木造建築物から伸びている。それは老朽化も進み、自然に侵食されつつあるが、それでも人の住んでいる気配は至る所にあつた。扉へと続く道が今でも草に覆われていないので何よりの証拠だ。ガリアはその扉の前までツカツカと足早に歩くと、躊躇することなくそこを開き、中に入つていった。

「じいさん。まだ生きてるか！」

珍しく勢いよくガリアの後を、ルカはそつと付き従つた。

雑多に物が積まれたその部屋の中は、まるで倉庫のようだつた。

それでも奥の方は生活感を感じさせる物品が置かれ、更に奥には確かに人がいた。白髪混じりのその長髪の人物は背を向け、姿勢よく小さな椅子に座り、何か棒のようなものを手に持つてゐる。空いた手でランプの灯を強めたのだろう。部屋が明るくなつた。

老人が持つていたのは棒じゃない。刀だ。それは白く輝く一本の光の線となつて、ルカの瞳を一瞬、キラリと刺激した。

「……そろそろ帰る頃だと思つていた。だが出でいく時は一言ぐらい告げるもんだ。なあ、ガリアよ」

振り返つたその人物は、妙に落ち着きのある喋りと、東洋の着物、それに東洋風の顔立ち。更にボサボサの口ヒゲをたくわえ、見るからに職人、いや、仙人という感じさえ漂う老人だつた。

ガリアは答える。

「悪いとは思つてる。ついでにまた少しの間、厄介になる。仕事も頼みたい」

「やれやれ、忙しいことだな。だが驚いた。その子はなんだ？人間に興味を持つてとは言つたが、まさか女とはな。ウム。よし！」

「おい、じいさん。この子は……」

ガリアが何か言いかけた時、老人は持つていた刀の刃先を、彼の目の前に突き付けた。老人の眼光が光る。

「何のマネだ？」

鋭くなつたガリアの声に対して、老人の目はニンマリと笑つた。

「昔は刀を払い除けて、チャクラムをワシの喉元に突き付けたもん

だがな。なるほど。尚よし…」

二人は笑つた。

「そんなこともあつたな。で、じいさん。そのチャクラムなんだが
…」

老人はその声を、シーツと口で静めた。

「そんなことよつづだ?」この刀は

老人は不意に刀を投げ、ガリアは苦もなく受け取つてそれを見た。

「どうつて…綺麗な刀だな。こんなので役に立つのか?」

「フフン。ところがそれは刀が持つ矛盾を解決している。切れる刀を作るのは硬くなくてはならず、硬い刀は折れやすい。柔らかくすれば曲がってしまう。だがその刀は折れず、曲がらず、よく切れるのだ。何より美しいしな」

「ふーん。じいさんが打つたのか?」

「いや、東洋の刀でな。譲り受けたものだ。これほどのものはまだ作れんが、まあ…近いものならば作れる。理屈は分かつているからな」

ガリアは刀を老人に返した。

「じゃあその理屈とかいうヤツで、俺のチャクラムも鍛えて直してほしい。いや、俺が言うように改造してほしいんだ」

老人はガリアをジッと見ていたが、不意に瞳がその後ろに向けられ、怪訝そうな表情を浮かべた。

「どうした？」

「いや、その子がよ、具合が悪いんじゃないかと思つてな」

「え？」

ガリアは振り返つてルカを見る。返つてきたのは虚ろな目。彼女の長いまつ毛が、その瞳を幾度となく覆う。

「あ、ゴメン。どうしたんだろ？…あたし。なんか急に…寒くなつてきて…」

そう言つてルカは、フツと抜けるように笑つた。

そのままガリアの体にもたれ掛かり、更にズルズルと落ちていく。支えようとするガリアの手をも無情に擦り抜け、そしてルカは床に倒れた。

こういう時ばかりは、刀や、チャクラムを取る時のようにはない。彼女に触れる度、その柔らかさにガリアはいつも戸惑うのだ。だがそれも致し方ない。彼は人間の硬さならば知つていて。しかし、女性の硬さを知つたのは、ルカが初めてだつたのだから…

朦朧とする意識の中で、ルカは声を聞いていた。それは老人の声だった。

痛いのか？

理屈は分からんが、鉄の熱膨張が水晶に悪影響を及ぼしているのかも知れんな
普段はなんとも？そつか…

老人は誰かと会話を交わしているようだ。誰かなど決まっている。しかし、ガリアであるはずの、相手の声が聞こえてこない。ルカは混濁する意識の中で、ただ、老人の声だけを聞いていた。

確かめようにもな…例え分解できたとしても、お前の鋼の体をここまで見事に溶接する技術がワシはない。いや、今の時代で知る者は、恐らくゾッド一人なのだろう

ムリにワ・シらの技術でやろうとすれば、体中ネジやリベットだらけになるぞ。それに強度も弱まるしな。まあ、その体と付き合つていいくんだな。人間だって歳を取れば、体はどこかしらおかしくなるもんだ。一步近づいたと思えばいい。そうだろう？

それからな

それ以上、鉄球を喰らうんじゃないぞ

その言葉を最後に会話は途切れ、ルカの僅かにつなぎ止めていた意識も、徐々に眠りの中に埋没していった。

老人の傍にガリアは確かにいた。にも拘わらず、ルカにはその声

が聞こえなかつた。なぜなら、ガリアのそれは声ではないから。老人だけに向けられた思念だつたからだ。

目が覚めたときに、うつすらとでも灯りが漏れて来るのは嬉しいものだ。隣の部屋から漏れるその灯りは、起きている人間が近くにいる、という安心感をルカに『えた。それは幼い頃、両親に抱かれている時の安心にも似ている。

時折、カツーン、カツーンという大きな音が響いてくる。ああ、あの音で目覚めたのかと、ルカは思う。そして徐々によみがえる記憶。騒動になつたことも、なんとなくは覚えていた。ルカはベッドの上で体を起こしてみる。首飾りがない。ガリアが外してくれたのかも知れない。

でもそんなことより、いつの間にか寝巻を着ている。周りを見回すと、ワンピースは部屋に渡されたロープに干されていた。

「汗をかいだから？」

小さくつぶやく。

しばらくは頭をポリポリと搔いたり、意味もなく寝巻の布を手でいじつたりして、何か考え」とをしていくようだつたが、突然の寒気を感じて肩をすくめた。夏とはいへこゝは高山地。夜はそこそこ冷えるのだ。

体を冷やさないように毛布で体をくるんだまま、ルカは試しにベッドを下りて床に立つてみた。少しフランフランするけど大丈夫。隣の部屋から聞こえてくる音の原因を、確かめに行つた。

戸を開けて暗やみから、煌々と炉やランプの炎が灯る部屋へと入る。熱さと湿氣で、部屋はムツとしている。そこには炉の前で鉄を打つ老人の後ろ姿があつた。ガリアの姿はない。

「おお、起こしてしまったか。すまんな。こんな時間でないと仕事ができないタチでな」

振り返らずに老人は言った。

「あの…ガリアは？」

「一眠りした後、外へ出でていったようだ。ひとところにジッとしているのが性に合わんらしい。とこりでお前さん、腹が減つるようなら、そこに粥がある。この台の上で温めるといい」

「ありがとう」

老人が指示する先には鉄の鍋があり、蓋を開けるとミルク粥独特の香りが漂つて、ルカの口と胃を強く刺激した。よほどお腹がすいていたのだろう。実際、ガリアが町で買物をしている時に、丘の上でパンを食べたのが最後だったことをルカは思い出した。

「あせらすにな。ゆっくり食うんだぞ」

東洋風の漆の椀を差し出しながら、老人が優しく言った。

老人が作業する炉熱の余りを貰う形で、ルカは台の上で粥を温めて椀によそる。ただでさえ熱い部屋に湯気が立ち上る。それからしばらくは何も話さず、考えず、ただ食べることに集中した。その間も老人は山吹色に光る金属の塊に向かつて、吹き出す汗と共に鉄槌を振り下ろし、その度にキーン、キーンと鋭い音が部屋に響いた。胃に染みわたる喜びがようやく適度な満腹感へと変わり、ミルク粥があまり好きではない自分を思い出した頃、ルカは老人に向かつて話しかけた。

「あの…おじいさん、お名前はなんて…」

「シーヴ…ちよつと待て！」

強い口調で老人は返した。

老人は浸炭処理をした山吹色の金属を少しの間見つめ、やがて一気に塩水の中に浸した。ジューーンという音と共に、そこから蒸気が上がる。

フーッと、大きな息をついて、老人はようやくルカに向き直った。顔は一転してニコニコしている。

「済まなかつた。この焼き入れの作業が一番神経を使うものでな。ああ、そうそうワシの名は　ウム、そうだな。できればマサムネと呼んでくれんか？ただのマサムネだよ　ルカさん」

「マサムネ…ね。うん、分かつた。じゃあね、マサムネ。あたしのこともただのルカって呼んでくれる？さん付けなんて慣れてなくて」

老人は口を開けて笑う。最初の印象とは違つ、屈託のない表情を浮かべた。

「ハハハ、いや、町には氣取つた女ばかりでな。お前さんみたいなのは好きだよ。どうやらワシはこの山で、二人目の友達に巡り合えそうだ。よろしくな、ルカ」

「うん、よろしく。マサムネ」

「具合はどうかね？」

「うん、まだ少し熱っぽいけど、食べてすぐ横になるのもね。この部屋なら温かいし、もう少しここにいてもいいかしら？」

「いいからでも」

「マサムネは身の回りの工具を片付け始めた。背はルカと大差ないが、下に屈む時でさえ、背筋はピンとして、姿勢はいい。

「マサムネはここ一人で住んでるの？」

「ああ、そうだよ。といつても、勝手に住んでいるんだがな。遺棄された鉄鉱石や製錬された鉄が、ここには未だに、口口口口しどる。ワシのような鍛冶にはたまらん場所だよ。こんな時世だし、誰も文句は言わんしな」

「今打つてたのは？ガリアに頼まれたもの？」

「この刀はワシが好きでやつとるだけでな、ガリアからの依頼はこっちだ。なんでもアレシアとかいう人形と戦つて、チャクラムの刃がこぼれたらしくてな。お前さんもいたんだって？」

「あ、あの時…」

ルカはエンドラでのことを思い出した。アレシアの鋼鉄球…

「だがこれはもうチャクラムじゃないわい。ホレ、見るかね？」

渡されたそれは、刃でもなんでもない、ただのドーナツ状の鎌としか見えなかつた。マサムネは続ける。

「この鎌をガリアのチャクラムにガッチリと固定すれば完成だ。一体何を考えているんだかな。物を切る道具ならば喜んで打つところだが、まったく。ワシをナメとるわ。しかし、できる限りのことはしたぞ。いいかね。これはただの鉄塊ではない。的確に熱処理された、まったく質の違う鉄、が多層構造に重なつていてだな…」

突然、マサムネは饒舌になり、やはり自慢の逸品らしいその解説を始めた。山での一人暮らしは淋しいのだろうか？　と、冷静に思うルカ。

「ガリアとはどうして？」

ひとしきり鉄の講釈につなづいて、時に真剣に感心した後、ルカ

はそれを訊ねた。

突然、空気が変わったを感じた。

マサムネは着物の袂から短い洋風パイプを取り出す。

「煙草、いいかね？」

「あ、ええ」

マサムネは脇の小物ケースから葉を取り出すと、指でギュッ、ギュッと、パイプの中に詰めていった。やがてマッチの火でプロパンガスとパイプをふかし始める。手で振り消したマッチの匂いと共に、甘く芳ばしい香りが辺りに漂う。

「ガリアはな……数年前に突然やつてきて共に暮らしそう、半年ほど前、突然出ていった。そういう仲だよ。奴に聞いたことはないが、ワシは友達だと思つとる」

「数年前？ガリアが目覚めたのが四年ぐらい前だつて聞いたけど……」「ああ、その頃だろうな。最初に会つた時、奴は裸でな。仰天したものだ。鉄の人形が人間のように動いてるんだからな。夢としか思えんかったよ」

「でしょうね」

二人は笑つた。どこか共通の笑い。

「最初、奴は殺氣立つていた。なぜここに来たのかは聞かれても分からん。或いは鉄の匂いに惹かれたのかも知れんな」

「殺氣立つて　つて、ガリアが？」

「ああ、獸とも違う。しかし人間でもない。不思議な瞳だったよ。ワシは殺されることを覚悟したぐらいだ。なんとなく、分かるんだ。鋭利な刃物を心の内に秘める者が出す、氣というものはな」

ルカはガリアが時折使う、自分自身を苛む言葉を思い出した。

「鉄だから 人形だから？」

「ウム、それもあるだろうな…」

マサムネは、ふかあ…と、煙を緩やかに吐き出すと、今度は一転して鋭い口調で続けた。

「だがガリアが持つ業はそれだけじゃない。奴はそもそも人を殺すための兵器として作られたらしい。だがな、それに拘らず、誰よりも殺される人間の気持ちを知つて生まれてしまったのがヤツ。ガリアなんだよ」

マサムネの口元に漂っていた煙が、ため息と共に乱れる。

「お父さんの…魂…」

微かな声で、ルカはつぶやいた。

「そしてその痛みを知りながら、いや、知つてているからこそ、父親であるゾッドを殺そうとしている。全く…因果なことだ」

一人は長い時間、ただ黙っていた。マサムネはいつしか消えてしまつたパイプの火を再びマッチで灯し、大きく一息つく。

「ワシと暮らしていた頃のガリアは、本当に毎日が辛そうだった。心を開くことも稀だつたしな。恐らくはゾッドを殺す決心を固めるために悩みぬいた日々。それがワシとの数年間だつたのだろう。それから一人で生き抜いた半年間は、どんな日々を過ごしてきたのかそして本当に偶然に、ルカ。お前さんと出会つた」

「マサムネはジッヒ、うつむくる力を見つめた。

「話は聞いたよ。まあ、因縁というヤツだ。今夜は色々なことが頭をよぎつてなあ。まったく。鉄を打つ者として失格かも知れん」

マサムネは笑った。

ルカは尚もずっとうつむいていた。

その時、外の扉が開く音がした。部屋に風が流れ込む。

「ルカ、起きてて大丈夫なのか？」

ガリアだ。

ルカは顔を一瞬だけ背けて、瞳から溢れ出す涙を拭き取り、笑顔を彼に向かた。

「あ、ガリアお帰りなさい。お騒がせしました。もうだいぶいいです。でもどこに行つてたの、こんな時間　って、今、何時なのかなしら…」

ルカはキヨロキヨロと辺りを見回した。

「じき夜明けだ。それより…」

ガリアはツカツカと歩み寄り、毛布に包まりながら椅子に座つていたルカの、目の前まできて手袋を外した。

ガリアは、そのむき出しの手をルカの額に当てる。今はなぜか、手に包帯はしていない。

「わー、冷たくて気持ちいい」

が、その手はすぐに外された。

「ホラ見る。それはまだ熱がある証拠だ。来いよ
「わっ！」

ガリアはルカの体を毛布」と抱き抱えて、ベッドのある部屋へと入つていった。

マサムネはそれを微笑ましそうに、まるで孫を見るような瞳でウンウンとうなずくのだった。

「どうだ？」

ベッドに横になつたルカに向かつて、ガリアが聞いた。

「うん、まだ少し熱、あるみたい。あ、ねえガリア…」

ガリアは黙つて見ていた。

「買つてもらつたワンピース。あれさ、あたし…汗かいちゃつたの？」

干してあるワンピースに一瞬だけ顔を向け、ガリアは答えた。

「ああ。すごい汗かいてて、じいさんが着替えさせてやれつていうから俺が…覚えてないのか？時折目は開けてたみたいだつたけどな「うん、全然。そつか、ガリアがやつてくれたんだ…」

ルカは毛布を両手でつかんで、少しだけ上に引き上げた。ガリア

も今回は察知した。

「あ、悪かった。 気にしたか?」

「うん、ちょっと…。 でも平気。 ありがとうね
「ああ…」

お互いが黙つて、部屋は静まった。

夜明け前、鳥が起きだす前の静寂。 声を出せば、それは隣の部屋にまで響きわたるほどの中止の静けさ。 それが言葉を出すことをためらわせた。

ガリアが立ち上がり部屋を出ていったとしたその時、ルカの手が、ガリアの上着を引っ張った。

「うん?」

ガリアが振り返る。

「ねえ、さつきの…やつてくれる?..」

「さつきの?」

「うん。 おでこに手を当てるヤツ」

「ああ、あれか」

ガリアは再び手袋を外し、ルカの前髪をかき上げてから額に手を乗せた。

「冷たくて気持ちいい
「鉄だからな」

ガリアは言った。自分を苛む言葉 しかし、今はその中に刃は感じられない。ガリアは変わりつつあるのだ。

「あ、でも…」

「どうした?」

ルカは少し言ひ、「ううん、それでも、素直に言った。

「すぐ温かくなっちゃうね」

「…鉄だからな」

一瞬見つめ合った後、一人は笑った。

人の痛み

久しぶりの晴れ間。ガリアとルカの一人は、反射炉を見下ろす崖の上、そこに朽ちていた大きな空船の甲板の上に向かい合い、のんびりと午後のひと時を過ごしていた。

何しろこの一週間の間に天候は崩れ、しまいには一帯を嵐が襲い、ジッとしているのが嫌いなはずのガリアでさえ、小屋から出ることはなかつた。部屋数が少ないこともあって、マサムネに半ば強制的にルカと同室にさせられ、当然、ルカの色々な好奇心から逃れ続けることもできず、二人はよく話をした。ただそれでもゾッドやエンドリのことに関するでは、まるでそれが禁句であるかのじとく口を閉ざしていた。ガリアだけではなく、ルカもだ。

しかしほかの色々なこと、そう。例えば、ガリアの体はただの鉄ではなく、今はない過去の技術で作られた錆びにくい合金であるとか、それでもやつぱり雨の日は嫌いなのだと、おおよそ少し前の彼からは想像もつかないような、本音がポロボロと出てくるのだ。そんな時は決まって夜。雨や風の音が家の外でうなりを上げ、室内はランプの橙色の灯り、それにキーン、キーン、という鉄を打つ単調な音が響く時間帯。不思議とそれら全てが自分たちを守ってくれると感じられ、ガリアでさえ心躍る子供のような感覚を味わつた。

そしてようやくにして空は快晴となり、二人は久しぶりの日差しを楽しんでいたのだった。だが正直に言えば、ルカはこの晴れ間を待つてはいなかつた。それは、今まで触れずにいた禁を解かねばならない時だったから…

とはいえ今はまだ、この久しぶりの青空を楽しむだけの余裕はあつた。或いは、ガリアがそれを演出したのかも知れない。

「ルカ、また投げてくれ」

ガリアに言われるよりも素早く、ルカは手に持っていた青いオークの実を、体を反転させてあらぬ方向へ思いつきり遠くへ投げた。悪巧みの顔。ガリアは不意をつかれたもののすかさず反応し、自分の脇に浮かせていたチャクラムを飛ばす。

「わっ！」

それはルカの頭の上を風圧と共にすり抜け、オークの実が地面に落下するよりも早く追いつき、上空に弾き飛ばした。更にチャ克拉ムは急反転し、ホーミング弾のように弾き飛ばされた実を追い、再び弾く。それが何度も何度も繰り返され、オークの実は重力の意に従つことも許されずに、どんどん上空へ舞つていった。

「残念だつたな」

ガリアは笑つた。

「怖いなー。ギリギリじゃん。もし当たつたらどうするのよー。」

ルカは手で頭を覆い、首をすくめている。

「それでもなかつたぜ。それにわざと変な場所に投げたルカも悪い」

もつともだ。ガリアはまだチャ克拉ムでオークの実をもてあそんでいる。

「面白かつたけどな」

ガリアが一言付け加えて、笑った。

ルカはポリポリと頬を搔く。しかし長い袖口がそれを邪魔した。彼女が今着ているのはガリアのダブダブのシャツと、裾を何重にも折り返したズボンだつた。何しろ外出着の余分がないのだから仕方ない。いや、あるにはあつたが、せっかく買ってくれたワンピースが雨上がりの泥で汚れてしまうのが嫌だつた。そのわがままの戦利品が、今着ている服というわけだ。もちろん、せっかくのデートなのだから（と、ルカは思つてゐる）女の子らしい格好を　　というのはあつたが、しかし、ガリアの服の大きさを実感するのはやはり嬉しい。

「でも上達したね。さつきまではヘッタクソだつたのにね」

本当は言つほど下手ではなかつたのだが、ルカは嫌味を込めてクスクスと笑つた。

ガリアは最後に実を大きく崖の向こうに弾き飛ばし、右手を天空に上げて、戻ってきたチャクラムをガツシリと掴んだ。さすがに以前のように、指先でクルクルと受け止めるることはできなくなつたようだ。何しろこの新しいチャクラムはズッシリと重い。

「あれは新しいチャクラムに慣れてなかつただけさ。昔からこれ位はできたんだぜ」

少し意地を張るように言つガリアの姿が、ルカには何か愛しかつた。

「ン？」

ガリアが何かに気がついた。

「どうしたの？」

「じいさんが戻ってきたみたいだ。行ってみよっぜ」

今日は珍しく袖なしの黒いシャツ一枚のガリア。ふだんは見せることのない一の腕も、質感はともかく形だけ見れば人間の腕とそう変わらない。決して太くはないが、間違いようのない男の腕だった。但しパートのつなぎ目と、少しだけ見える間接部分の球体を除けばだが……

その腕がルカを苦もなく抱え上げると、ガリアはそのまま崖から飛び降り、30メートルほどを落下してフワリと着地した。と同時にルカは飛び出して、マサムネの元へ駆け寄る。慣れたものだ。

「マサムネ、お帰りなさい。早かつたね。町はビックリだつた？」

マサムネの表情は曇っていた。だが不思議なことに、出でてくる言葉は全くうらはらなのだ。

「ルカが彫ってくれた飾りが効いたらしい。あつという間に売り切れたよ。ナイフや剃刀だけじゃなく、長剣まで売れたんだからな」「少しば役に立てたかしら……」

空氣を感じて、ルカの語感は自然と控えめになる。

「少しビックリじゃないさ。まあ、長剣に関しては別の理由もあるんだが……」

言葉を濁した。その時になつてようやく、マサムネの口調と表情が一致した。何かあつたことは間違いない。

「？」

「まあ、まあ、立ち話もなんだ。家に入ろう。そつそつ、土産も買つてきたよ」

マサムネは、背中のリュック鞄をポンポンと手で叩き、フフッといはり控えめに笑つた。

「ヒンドラが宣戦布告ー。」

そのガリアの声は、隣の部屋で着替えていたルカにも聞こえてきた。マサムネが町で買つてきてくれた服だ。

「ああ、なんでも旧教皇領は即日降伏したらしい。ふもとは今それで大騒ぎさ。次は自分たちの国じゃないかつてな」

「旧教皇領には幾つもの都市国家があつたはずだ。どの国だ？」

「全部さ。標的にされたのは一国だがな。それがどこかは聞いてないが、曇天と共に数十もの空船が飛来し、爆弾の雨を降らせたそうだ。ビラと共に」

「ビラ？」

「ああ、これだ」

マサムネは、薄汚れた紙ビラをガリアに渡した。ルカもシャツを首に通しただけで、肌着が見えるのも気にせずに勢い良く部屋を飛び出してきた。裾を素早く降ろしながらビラを覗き込む。

ビラにはこう書かれていた。

『都市ヒンドラはこれまでより帝都となり、その都より我は、全世界に對して宣戦を布告する者である。まずは旧教皇領に散在する統率なき國々よ。我らの力を知るがいい。そして直ちに従属せよ。白旗を

以て意思を示せ。だが嘆くことはない。これは我が理想と掲げる、

世界帝国建立のための第一歩なのだ。

偉大なる発明家にして世界を統べる善導者 ゾッド・シャゾット』

「ずいぶん長い肩書きね…」

「強い自己顯示欲が見て取れるだろ？…ゾッドって奴の特性なのだ

ろうな」

二人に続いて、ガリアが吐き捨てるように言った。

「ゾッドの考えそなことだ。あいつは世界を自分の所有物にした
いらしい。いや、巨大な実験場か」

「実験場？」

ルカが訊ねる。

「ああ。自分の発明のためにな。そして究極的には自分の思つまま
の世界を作りたい。元のゾッドはそういう男だつた」

「でもいくら何でも、世界を個人の物になんができるわけ…」

「いや」

ルカの言葉に、マサムネとガリアの二人が同時に反応して、首を
横に振った。ガリアが続ける。

「トウワンボの力に対抗できるものなんて、この世界にはないんだ。
それにゾッドは歴史上、最もトウワンボを使いこなせる人間である
ことは間違いない。俺やアレシアがいい見本だ」

「それにな…」

ガリアの言葉を受けて、神妙な面持ちのマサムネが続けた。

「…ワシは今日、見てきた。ふもとの人間たちの姿をな。皆、噂を聞いただけで恐れおののき、戦うことなど微塵も考えていない。したことといえば、白旗を天に向かい振るのみだ」

「え！？ つて、町の人はもう降参しちゃったの？」

「ああそんなようなもんだ。まだ敵が来もしないのにな。長い平和ボケが仇になつたんだろう。ワシはそれを見て、ゾッドが抱く野望にことさら現実味を感じてしまったよ。いつもは売れることがない長剣が卖れたのだから、少なくとも戦う覚悟のある者も少しさあるのだろうが…」

「でも…どうしてだるりん、みんなおかしいよ。だつて現にたくさんの人人が理由もなく殺されたんでしょう？なぜみんな怒らないの？戦わないの？」

ルカはいきり立つ。マサムネもうなずいて同意したが、こうも言った。

「確かに皆おかしいな。ワシもそう思つ。だがな、ルカ。ゾッドもそう思つたかも知れんぞ」「ゾッドも？」

ルカは困惑した。

「そう。奴がビラに書いた肩書きを見れば、おのずとそれが伺える

ルカはもう一度ビラを確認しながら首をひねつた。

「どうこいつとかしら？」

「ウム。発明家というヤツはな、未来の姿を夢見るもんだ。だが今この世界はむしろ退行しどる。発明家にとっちゃあツライよな。

それがこの善導者といふ言葉に出てゐるんだよ。世界を良い方向へ導きたいといふ言葉。その思いはたぶん本当なのだろう。だがゾッドの場合、導くべき場所に問題が つん? どうした?」

ルカが神妙な顔をしている。

「…なんかね。あたしも夢、見てるからさ。一緒になって。あたしが見てる未来は間違つてないのかなって…」

その言葉を汲み取つたマサムネは小さく笑い、ルカの肩をポンポンと叩いた。

「なるほどな。お前は確かにゾッドと共通する部分があるかも知れん。発明家だしな。蒸気洗濯機だつて? ワシも見てみたかったわい」「あ、それは…」

マサムネは笑い、ルカはガリアを恨めしそうにジーッと睨む。

「ま、ま。それはともかくな、お前とゾッドにはな、決定的に違うことがあるぞ」「決定的に違うこと?」

「そう」「それは何だ?」

壁に背を預けながら、黙つて一人の会話を見守つていたガリアが割つて入つた。

「気になるか?」

ガリアは一瞬だけ、ルカの方を見る。

「まあ、そりゃ 気になるさ。敵のことだからな」「なるほどな…まあいい。つまりな…」

ルカは「ク「クといづなずく。

「…ゾッドは人間を知らないんだ」「人間を知らない？」

ルカとガリアの二人は、キヨトンとした顔でお互いを見合った。そして再びマサムネを見る。

「もつと分かるように説明してくれ」「そうだな。例えばルカ。お前は、自分のこと以上に想つことがで
きる他人を知つているな」「え、えつと…」

一瞬、浮かんだ相手はいる。しかしルカは口元をついた。

「ウーム…では大切な友達があるだろ？」「マサムネとガリア」

即座に答える。

「いや、この際ワシはどうでもいいのだが…」「だつてマサムネ言つたじやない。新しい友達に出会えそうだつて。もうあれから一週間も経つたもの。友達だよね？」「ハハ…そうだな。そう言つてもらえて嬉しいよ。とまあ、少なくともルカはそれに答えることができる。だがゾッドは答えられんだけうな。つまりゾッドは人の痛みを知らない。ルカは知つている。

それが何よりも大きくな、しかし決定的な違いだ」

「人の痛み……」

ルカはつぶやく。

「そう。痛みを知らない人間が力を握ってはいけないんだ。それを止めるのは痛みを知る人間。だが弱い人間ではダメだ。戦うだけの気概のない人間はすぐに白旗を振るのがオチだからな。ワシが見てきたふもとの人間たちがいい見本だ」

マサムネはガリアの方を一瞬だけ見た後、ルカに対して優しく、父親のような口調で言つのだ。

「ガリアの心の痛みを知つて、お前は泣いていたな。だが本人の前では懸命に笑顔を作つた。あれがそうだよ。他人を想う気持ちだ。そして強い心だ。あれを知つていれば大丈夫。ルカは自分が描く未来に自信を持つていい」

ルカの頬を、職人の硬い掌が触れる。その感触を求めてルカはジツと目を閉じた。そしてまつたく自然に、この一週間秘め続けていた心の内が、言葉となつて出た。

「もしも目の前で、お父さんの体が引き裂かれたら　きっとあたしは傷つくと思う。でも同時にガリアも傷つくことを、あたしは知つていて。それはもう、どうしても避けられないこと。あたしはガリアを癒してあげたい。そうすることであたしも癒される　そう思うの。あの時泣いたことも、それをガリアに見せたくなかつたことも、それと同じ。ガリアの痛みは、あたしの痛みでもあるつて気づいたから……」

ルカはガリアの方にぐるりと向き直り、この一週間の禁を解いた。

「ねえ、いいかなあ？あたしもエンドラに付いていつて」

ガリアは不意をつかれて一瞬躊躇したものの、冷酷に拒絕した。

「ダメだ」

「うん、そう言うと思った。マサムネから聞いたの。ここに来た本当の目的。マサムネにあたしを預けるつもりだつたんでしょ？あたしを危険な目に合わせたくないって。ありがとう。嬉しい。でもいかないとダメなの。あたし」

マサムネの魔力が効いたのか、ルカはあくまで淡々と話を進める。

「もう決めたことだ。俺は一人でエンドラへ行き、ゾッドを殺す」「前にあたしのこと捨てないって言ったよ？」
「捨てるわけじゃない。また戻ってくる」「なぜ付いていたらダメなの？」
「決まってる。危険だからだ。それにジャマだ」「大丈夫よ。だつてあたし、ガリアのこと守りたいもの」「ルカが俺を守れるわけないだろ！気持ちだけでどうにかなる相手じゃないんだ！」

先に言葉を乱したのはガリアの方だった。なぜならこの一週間、彼も心の葛藤と戦っていた。ルカのためを思い、圧し殺してきた感情つまり、ルカと行動を供にしたいという本音が今にも吹き出しそうになり、心の安定を困難にしたのだ。

その時だった。

マサムネは一人の間にいきなり手を突き出し、緊迫しかけた部屋の空気を一気に沈めた。棒のような物を握っている。するとその手

をそのままルカの元に運ぶ。握られていたのは、木製の鞘に収められた短剣だった。

「これ……？」

ルカが聞いた。

「身代わりだ。持つていってくれ。東洋の技術で鍛えた、ワシの渾身の作品だ。護身のお守りぐらいにはなるじゃろう？」

「ありがとう」

ルカは強くうなづく。

「おい、じいさん。勝手に決めるな。そんな剣が爆弾や銃に効くか！ルカは生身なんだ。俺とは違う」

「フンッ！お前とて爆弾の直撃には耐えられるんだろう？要は程度の問題だ。お前がちょっとばかしルカより硬いからといって、死ぬ時は死ぬってことだ。それにここにルカを預けられたところで、ワシは彼女の自由を束縛することまではできん。危険も顧みず勝手にエンドラへ向かうに違いないわい」

ルカはマサムネの脇で、ウンウンと何度もうなづいている。

「お前なあ！」

ガリアの憤慨に、ルカはマサムネの後ろに素早く隠れる。

「それにこの間お前はワシにこう言つたな。人間になりたい……と」「じいさん！」

怒鳴るガリアを全く気にすることなく、マサムネは続ける。

「以前、共に暮らしていた時には想像もつかん言葉だった。だがこの一週間で分かつたよ。お前の心はもう人間になつていてるとな。いや、ルカという存在が、お前を人間にしているんだ。だから連れて行かなくてはいかん。そして守つてやれ。それが人間というものだ。ルカもな、ガリアを守つてやるんだぞ」

「もちろん！」

ルカは当然、という顔でニッコリ。

しばらくの沈黙。そして一人が見守る中、ガリアは渋々とうなずいた。

「分かつたよ…」

翌日、藍色の空が茜に染まる頃、二人は出発した。その空を見てガリアはふと、昔のことと思い出していった。

「そういえば前はな…」

「ん？」

ルカは首を傾げてガリアを見る。彼女には分かつていた。感傷を呼び覚ます景色や音に出会った時、ガリアはよく本音を漏らすということを。

「…人間の世界がどうなろうと、別にどうでもいいと思つたことがあつた。俺は人間じゃないからな」

ルカは優しく笑いかける。

「でも今は違うよね。あたしにとつてはやっぱりガリアは人間だし、男の人だし。それに　あたしのこと、守ってくれるんでしょう？」

ガリアはうなずいた。しかしなぜか今、ガリアは自分が守られているような、そんな安心感があった。それを与えているもの。それは…

「なあに？顔に何か付いてる？」

ルカはやはり、笑う。

「いや…なんでもない…」

「へンなの！」

朝一番の陽光が、斜面を降りる一人を照らし、ガリアとルカを光の中に導く。しかし二人の向かう先　ふもとの町並みは山に囲まれてまだ暗く、モヤが吹き溜まり、朝日の到来を今か今かと待つのだつた。

トウワン王国の商業的中心地　すなわち世界の中心だったエンドラは、王国の衰退期を経て、やがてその地が他の国の領地となつても尚、役割は変わらなかつた。それは巨大な貿易資本を持つ大企業がエンドラに乱立し、その競争原理が、東洋や新大陸などをつなぐ空船ネットワークを完成させたことに起因する。一度完成したネットワークは簡単に崩れることはなく、「エンドラを征する国に世界はひれ伏す」とまで言われたほどだ。

そんな群雄割拠な時代。トウワン人の血を引く者たちが再び勢力を盛り返し、神聖トウワン王国がエンドラを征して首都と定めてからは安定期に入り、商業的なネットワークはますます強化された。そして時代は大繁栄時代へと突入したのだ。

そのままに磐石の時に『失われた時代』がやって来た。幾人もの強者たちがエンドラを征し、また破れ去つても消えることなく次の新しい主人を待ち続けた空船ネットワークが、いともあつさりと消えた時代。世界中で退行が始まつたその日から、エンドラは急激にその規模を縮小していく。だがそれでも尚、世界中の都市が消える中でエンドラは唯一都市と呼べたし、かつて世界中にあつた大企業が消える中、エンドラだけは、それなりの規模を誇る会社が未だに存在していた。

パンターニ自動機械会社は、縮小したエンドラの中にあつてもただの小さな会社の一つでしかなかつた。しかし、ゾッドが事始めに利用するだけの十分な施設はあつたし、何よりも彼にはトウワンボがあつた。

世界が衰退した最も大きな理由は流通の崩壊だつた。空船が失われ、皆が再び海面を進まざるを得なくなつた時、海洋船舶技術は既

に過去の時代の中に埋没しており、かといって、新たに技術開発に取り組むだけの気概もなかつた。

最初、それに目をつけたゾッドは空船を量産し、貿易会社に売るのではなく、リースすることによって莫大な利益を上げることに成功した。更にそのツテで新大陸などから格安に、巨大で良質な水晶石を大量に手に入れたのだ。水晶石からは様々なトウワンボ機関がゾッドによつて生み出され、それがまた利潤を呼ぶ。そうして得た圧倒的な資金力をバックに、あらゆる企業を吸収合併し、いつしかパンターニ自動機械会社はエンドラそのものとなつたのだった。

ゾッドが復活を遂げてから、エンドラが城塞都市と呼ばれるようになるまでにわずか四年。その偉業を成し得たのは、トウワンボの力はもちろん、何よりもゾッドが、水晶のプログラムを別の幾つもの水晶石へ一括でコピーできることを知つていたからだ。大量のトウワンボ機関はそつやつて生まれた。

ゾッドはようやく足場を固め、第一のステップへ進もうとしていた。

目指すものは理想郷だ。

しかしそれはあくまで、ゾッドにとつての理想郷にしか過ぎないのだが……

「パンターニ様」

ゾッドは部屋に入つてきた衛兵の言葉を完璧に無視して、作業台に置かれた機械を熱心に見入つている。

「パンターニ様」

再び衛兵は言った。するとゾッドは一瞬だけ衛兵を見て、用件を早く言えと言わんばかりに、面倒臭そうに顎で合図をした。何か不

機嫌そつだ。

「は、はい。將軍からことづてを預かりましたので、お伝えします。警告を発した近隣諸国はいずれも白旗を掲げており、作戦の効果は絶大ありました。いつでも制圧は可能ですが、いかが致しますか？」

衛兵の軍隊式の口調は別にゾッソードが要求したわけではないし、正直好きではなかったのだが、文句を言つほどのことでもなかつた。しかしそれ以前に、この衛兵は一つのミスを犯していた。

「ところで君。私はパンターーーとこの名前は捨てたのだが、知らなかつたわけではないよね？」

衛兵は慌てた。

「ハツ！申し訳ありませんでした。シャゾット様。以後気を付けさせて頂きます！」

ゾッソードは顔をしかめた。張り上げた声が耳障りだったのだ。

「うぬせこな全ぐ。まあ、コトによつちや許さんでもないが……」

ブツブツと文句をたれるゾッソード。

「やつだ、君ー私の実験に付き合つてもりえんかね？いや、もちろん君のミスを上官に告げて、軍隊式の罰を『える』こともできるのだが、私には何の得にもならんのでね」

「は、はい。喜んでお付か合つさせて頂きます」

衛兵は内心ホッとした。全く知識のない人間を実験に突き合わせるのだから、簡単な、それこそ作業的なことだと思ったのだ。

「これを見たまえ。何だと思うね？」

ゾッドは作業台の上に置かれている、幾つかの細い金属のパーツを指し示す。それは人型に置かれていたので、衛兵にもおよその見当はついた。

「はあ……アレシア様がお付けになる、鎧か何かでしょうか」

ゾッドは自分と同様、アレシアにも様付けで呼ぶように指示していた。彼にとつては優秀な息子も同じだったからだ。しかもガリア以上に。

「なるほどな。確かに人体に装着するという意味においては正しい。が、アレシアに鎧はいらんよ。なにしろチタニウム合金なのだからな」

酔い痴れるように笑うゾッド。衛兵にチタニウムの意味は分からなかつたが、取りあえずうなづいた。

「ハイ。一体何なのでありますか？」

「ハハ……まあ、そんなにかしこまらないでくれ。よく考えれば分かるはずだが　まあいい。これは人間に着けるものだ」「やはり鎧でありますか？」

しかしそれは実際、どう見ても鎧としてはガードする面積が少ない。しかも一番重要なはずの、胸を守る部分がないのだ。そんなものは鎧ではない。

「いや、これは鎧の下。つまり服の上に直接装着してだな 着け
てあげよ!」

ゾックは自分よりも背の低い、それでも並みの大きさの衛兵に対
して、パーツを一つ一つ、装着していった。

「ずいぶん軽いですね。これなら楽に動き回れそうです

衛兵は高く膝を上げてその場で足踏みをして見せた。徐々に緊張
が取れてきたようだ。

「ああ、それはアルミニウム合金を使っているからね。まあ、強度
は弱いのだが、鎧の下に着けるものだから」と。これでよし
「それにしても、この肩あてだけはまた…ずいぶんと大きいですが
…」

衛兵の両脇に大きく張り出した肩あては、肩幅から更に30セン
チほど派手に飛び出している。

「ウーム、確かに君が気にするのも分かる。身を守るどころか、敵
の剣を呼び込んでしまうからな。だがバランス制御のために仕方な
くてね。では上のホールへ行こう。付いてきたまえ」

ゾックの研究所は最近、旧パンター二自動機械会社の工場から、
エンドラ最高層を誇る空船離発着塔の地下に移動した。そこから階
段を上り一階に行くと、塔の中央ホールに出る。床面積はそれほど
広くはないが、屋上にまで続く百メートル近い吹き抜けになつてい
て、整然と並ぶ電灯が屋上までの壁を照らしていた。壁はかなり凹
凸があるが、下から見上げてもそれが何なのかは分からぬ。

「では実験開始と行こう。もし成功したら、そのプロトタイプは君にあげよう。いや戦争となつた時に、空船に変わらせる力となつてくれるはずだ」

「えー？あ、はいっー！」光栄であります！」

衛兵は息を飲み、それを声と共に一気に吐き出した。空船は今のことこの親衛隊クラスにしか使用を許されていない。それに変わるものを見えるなど　興奮するのも無理はないだろ？

「だからひつむさいな。まあいい。行くよ
「はい、いつでもOKであります」

衛兵は声を押さえながら、それでも興奮は押さえ切れずにしてしまった。ゾッソはニシコリ笑つて、一度三度、衛兵に向かってうなずいて見せた。

「そのパートはだね、人間が自分の筋肉に対しても発する、ある特定の命令に対してのみ反応して、その力を高めさせてくれるものなんだ。小さなトウワン水晶を使っているから空船のように飛び続けることはできるが、一気に力を解放することで瞬間に強い力を得る。今の所できるのは高くジャンプすることと、着地することだけだが、将来的には走るスピードを十倍以上に早めたり、制御方法さえつかめれば、動きに関する全ての反射速度を早めることだつて可能なはずだ」

いわばパワード・スーツと言つたところだらうか？衛兵は黙つて、何度も何度もうなずいている。

「ではね。思いつきりジャンプしてみてくれ。君の思念に反応して、

脚部パートが作動するはずだ。ここなら天井にぶつかる心配もないからな。それから着地動作も忘れずに まあ、言われんでもするだろうが

「はい、では行きます」

衛兵は言うと、次の瞬間、ジャンプの予備動作と共に脚部パートが人間の動きに準じて稼働し、足は強靭なバネとなつて、凄まじいスピードで一気に飛び立つた。衛兵の姿が見る見るうちに小さくなる。

「おー、これはスゴイ。成功だ！」

ゾッドは小躍りし、わけの分からぬ舞を踊つた。

一方衛兵は、スピード感と高さから来る若干の恐怖と興奮にうち震えた。上を見上げると吹き抜けの出口がみるみる迫り、塔を飛び出してしまったのではないかとさえ危惧した。だがそこまでは至らず、一瞬の無重量感が衛兵の体内をも包む。そして次は重力加速度に従つて落下を始めた。加速と共に見る見る地面が近づいて、衛兵はゴクリと唾を飲み込む。

「そこだ！ 着地しろ！」

ゾッドが叫ぶ。もちろん彼に言われるまでもなく、衛兵は着地動作に入った。肩あてのバランス制御が働いて態勢は終始安定し、後は本能にさえ任せていれば難しいことではなかつた。そして、確かに恐怖から緊張してはいたが、タイミングは完璧だつた。脚部パートも衝撃吸収のための動作に入る。

衛兵は着地した。

「なるほどな……」

ゾッドはその動きをしっかりと見届けると、しばらぐの間思考に埋没し、手を顎に当てた。

「おい、衛兵！」

ゾッドは衛兵を呼んだ。

「はい、お呼びですか？シャゾット様」

ホールの外から衛兵が入ってきて言った。

「スマンが、これを片付けておいてくれ
「うつ！」

入ってきた衛兵がそれを見るなり、思わず手で口を押さえた。一瞬の吐き気。なぜならそこには、あらぬ方向に足と体を折り曲げた、もう一人の衛兵の姿だった。肉体は床に強烈に叩きつけられて、今も体内の血がドクドクと流れだし、その面積をゆっくりと広げている。

「サ、サミール！」

衛兵は叫び、その屍にすがり寄った。

「なんだ、お前の知り合いか？すまない」とした。実験に失敗してしまつてな。だが問題解決の糸口は見つけられそうだ。丁重に葬つてやりなさい」

ゾッドは事もなげに続ける。

「おお、それからな、將軍に伝えてくれ。夜明けと共に制圧に向かうよしこと。それから以前危惧したガリアの件だが、無視して構わん。再びエンドラへ侵入するよしこ、愚かなマネはしないだらうとも伝えてくれ。何しろ私にはアレシアがいる」

そう言つと、ゾッドはブツブツと独り言をつぶやきながら、後の一切の雑音をかき消し、地下の研究室へと降りていった。

「少し飛びすぎたか。それに、やはり足だけは補助するだけではダメだ。全体を覆う…そう！ ブーツのようなパーツにせねばいかんな。となるとアルミでは。それにクッシュョン制御も…」

もちろんゾッドには、背後に聞こえる衛兵の、嗚咽を洩らす音など聞こえない。聞こえたとしても僅かな心の揺れさえもなかつただろい。

衛兵はかすれるような声で、屍の名を叫ぶ。そしてその叫びと同時に、それは起こつた。

地面を搖るがす激しい爆音。塔にて、研究室に衝撃が走つた。

「な、何事だ！」

さすがのゾッドも、現實に引き戻された。そしてそれが、外からの攻撃であることも知れた。更に言えば、近隣諸国で　いや、世界中のどんな国にも、エンドラに攻撃仕掛けるよしこはないといふことも…

「クソッ、まさかガリアの奴か！？」

ゾッドが歯ぎしりと共に唸るが、その声はすぐ上のホールに落下

する、コンクリート片の破碎音によってかき消された。

ゾッドの言葉を借りるなら、ガリアは愚かなマネをしたことになる。しかし、それは予想以上に派手な攻撃だった。

その日エンドラは、久しぶりにやってきた強者の来訪に揺れるのだ。

月のない夜だった。

「ねえ、ガリア。殺したの？」

ガリアの後ろから、手を取つて話しかけるルカ。ガリアの足元には一人の衛兵が横たわっていた。

「気を失つてるだけだ。ちょっと待つてる。外に置いてくる」

ガリアは衛兵を、いつもルカにするように抱きかかえ、城壁の外側を一気に50メートルほど飛び降りた。その待遇の良さにルカは指をくわえて、自分だけじゃないのね と言わんばかりに見下ろす。

二度目のエンドラの夜。城壁の内側は、相変わらず電灯できらびやかに照らしだされ、自然とは違う独特の美しさがあつた。突然、強い風が吹き上げ、ルカの髪をなびかせたが、それを女性らしい仕草で押さえつける。風は、夏の太陽に熱せられた海や大地の余熱を未だに残し、どこか生暖かい。やがて風が止みガリアが戻ってきて、ルカはその夜景をしばらくの間、ジッと見入つていた。

夜の潜入ということもあり、ルカは黒い袖なしのシャツを、紺の半ズボンの上に出している。ビーズの首飾りは目立つからと、ガリアがやめるように言つたが、意地でしてきた。ピッタリとしているので、少なくとも音を立てることはないはずだ。そして左の二の腕には黒いバンダナ。昔からのクセで、そこに何かあると落ち着く。

ガリアもコートは避け、深緑色の七分袖シャツと長ズボン。腕や

指に巻く布も白ではなく、黒いものを使つてゐる。

「見ろよルカ。面白そなものがいるぜ」

ガリアはその黒い指で、チョイチヨイヒルカに指し示した。言わ
れるままに見るが、都市の明かりに馴れた瞳には、ただの暗闇にし
か映らない。だがやがて、闇の中からエンドラの光を受けて橙色に、
ボーッとそれは現れた。

「うわあ！大砲ね。大きいなあ…」

ぐるりとエンドラを取り囲む城壁の上には、天蓋のついた計四基
の旋回式大砲と、おそらくこれから設置するためのものなのだろう。
幾つもの台座がある。前回ルカは、あつという間に城壁を越えてき
たので、その存在には気づかなかつたのだ。

「でも誰もいない…」

「さつき俺が倒したヤツがここを見張りだつたんだろう。あと近く
には 向こうの砲塔の辺りにも一人いる。手薄だな。俺たちが来
ることなんて考えてもないみたいだ」

ルカの目には人どころか、砲塔すら見えない。

「よく見えるね。あたしには全然…」

「かなり遠いからな。ルカには見えない」

「ふーん…と、ルカ。その口振りからすると、ガリアは光だけを頼
りに物を見ているわけではないようだ。

「ところでね、ガリア。さつきの面白そなつて言ったのには、深

「いい!!、あるの?」

それを聞いたガリアは意味深に笑った。

「ルカ次第だ。俺は機械は分からぬから」

「でもいいの? 潜入するのに大砲はマズくない?」

「もちろん撃つたらダメだぞ。ただ扱えるようなら、後で役に立つかも知れないと思つただけだ」

「そういうことならまかせて! 大砲ならジャンク屋で買ったものを何度も分解してるの。こんな大きいのは初めて見るけど…」

ルカは、二の腕に巻いてあつたバンダナを額に巻いて気合いを入れ、1メートル程ある台座の上までハシゴで昇る。ガリアは後からジャンプして続いた。

「ふーん。これで旋回するのか…」

ルカは衛兵が持っていたランタンの灯りを頼りに、大砲を支えている鉄の回転レールを丁寧に検分する。更にハシゴを登り、天蓋のハッチを開いて砲塔内部を照らした。コラコラと揺れる灯りの中に、むき出しの大砲が浮かび上がった。ルカは砲塔内へと飛び降り、ガリアも後に続いてハッチを閉める。

「後装式か。このハンドルを回すと…ン? あ、動いてる、動いてる! 遅いけど」

思わず笑みをもらす。それは砲塔旋回用の手動ハンドルだった。そのまま上には仰角調整用の少し小振りのハンドルもある。ルカはそれらのパーツを一つ一つ検分しながら、その構造を把握していく。理解力、仕事共に早い。

「うーん…と、このレバーが引き金なんだろ? けど、この尾栓部分の機構がよく…」

「分からぬのか?」

「うん。装弾の仕方がね」

「装弾?」「

「うん、弾を砲身に込めるやり方がね。今ままだと引き金引いても砲身カラだから撃てないのよ。でもどつかで…あ! そうだ。昔ジヤンク屋で見たリボルバー式の銃に似てるんだ。サイズがケタ違うだけ…。だとしたら回転するはずよね」

ルカは、その円筒状の鉄の塊を両手で抱えて力を込める。大砲の尾栓付近にあるそれは、巨大なシリンドラー弾倉で、その中に口径が20センチ近くもある長形の砲弾が込められているのが見えた。しかしいくら力を入れても微動だにしないし、動力源も見当たらない。

「ちょっと見せてみる」

ガリアが何かを思い立つてルカの前に割って入り、しばらくの間、瞑想するように黙った。

「どうしたの?」「

「やつぱり。中に水晶がある。動力源はトウワソボ機関だ。動かせるかどうかやってみる」

ガリアは更に瞑想する。ルカはそれをしばらくの間見守るが、何の変化も起こらなかつた。

「やっぱ…ダメ?」

ルカがささやくように言った。

「ああ。起動させるために必要な何かが足りない。キーになる言葉でもあるのかな？」

「そつかあ…でもまあ、ゾッド一人を倒すだけなら使わないしね」

ルカはため息をつきながら砲座席に座った。何げに旋回用のハンドルを回してもあそぶ。旋回音は意外に静かで、会話を邪魔するようなことは全くなかった。

「あたしねえ…」

「ん？」

ルカは相変わらずハンドルを回しながら言った。レールの上を動く感覚が面白いのだろう。ガリアも止めなかつた。

「…ガリアと会つまで、親しい友達つていなかつたの。とにかく物を作るのが好きで、子供のくせにジャンク屋のオジサンとことかに出入りしてね。もちろんこんなことはお母さんには話せなくて娘がジャンク屋から鉄の部品を仕入れてるなんて…ねえ。でも正規のルートから買つたんじゃなくて、商売にならないのよ。あたしすぐ趣味に走つて、売れもしない変なモノ作るしね」

ガリアは黙つて聞き、心中では大きくうなづいていた。

「相談できたのはお父さんぐらい。ジャンク屋のオジサンとは仲良くなつたけど、友達つていうのとはなんか違つて、友達が欲しいなあつて、何度も手紙に書いたわ」

ルカは照準窓から橙色の光が入つてきたのを感じて、何げにハン

ドルを止めた。

「でね、思ったことがあるの。ガリアを引き合わせてくれたのは、お父さんなんじやないかな…って。だって初めてガリアのこと見た瞬間、ああ、この人とは仲良くなれるって、そう確信したの。不思議と。ガリアの中のお父さんが、あたしに訴えかけたんだよ、きっと」

「俺は…何も感じなかつたな。ただ、変な女だと思つただけで」

「へ、ヘンな女あ？ ヒドイなあ…。でもしそうがないか、お父さん、必死だつたのかも。あたしに訴えるのでや」

ルカは子供のごっこ遊びのように、発射レバーを握つて構える。照準窓の向こうには塔が見えた。

「さあ、そろそろ行くぞ。ルカ」

「うん、分かつた」

ルカは照準窓から顔を離し、立ち上がるうとした。でもその時突然、本当に言うべき言葉が彼女の中に舞い降りてきて、彼女は砲座に座つたまま言つた。

「ねえガリア、聞いて。今のお父さんの中にはね、絶対にゾッジしないよ。だってお父さんの魂はガリアの中にあるんだもん。だからあたしは大丈夫。最後まで見せてね！ ガリア」

名前を呼ぶと同時に、ルカは戯れに発射レバーを引いた。力んだせいもあるが、危険はないと知つてのことだ。

もちろん砲身はカラだった。空砲が鳴る危険すらなかつたはずなのだ。しかしがリアの言つた、起動させるために必要な何かそれを与えてしまった。

突然、大砲の尾栓がスライドして開いた。更にそのすぐ後ろのシリンドラーが僅かに回転した後止まり、中の弾が押し出されて、尾栓部から砲身に込められる。

「え、何、何？」

ルカは動搖した。機械が勝手に動く様はどこか怪奇じみていたし、自動装填式の大砲自体、見るのは初めてだつたのだ。しかもリボルバー式など…

一般的には、トウワンボが機械文明の発展を妨げてきたことは確かだ。しかしゾッドにとってのトウワンボは違う。一見不可能なアイデアを実現してくれる魔法の石だつた。實際、トウワンボの存在がこの城塞砲の、少々無茶な設計を可能にしている。

「そうか！発射レバーを引いたルカの思考を水晶が感じたんだ。それがこの大砲の仕掛けだ！」

「えーっ！？ ど、どうしよう…」

しかしもう止まらない。最後に大砲の尾栓がスライドして密閉し、装弾を完了した。と同時に着火装置も起動し、金属的な起動音がジヤキン、ジヤキン、と軽快に鳴る。ガリアは言つた。

「もうハヂに行くしかない！」

その直後、エンドラに最初の爆音が響いた。

「クソッ、ガリアの奴め！城塞砲を奪いおつたな」

ゾッドはたつた今降りてきたばかりの階段を、落ちてくる埃や破片などはおかまいなしに、再び戻って駆け上がる。一刻も早く外の状況が見たかった。しかし、それを羽交い締めにする者がいた。

「ガ、ガリアか！」

ゾッドは振り返る。そこにいたのはアレシアだった。

「なんだ、お前か。は、離さんか、『ラ…』」

しかし全く離す様子はなく、そのままフワリと宙に浮くと、階段を下へ下へと降りていった。

「そ、うか、上は今危険だと、いつのだな？ 分かつた。降ろしてくれアレシア。別の城塞砲にいる衛兵と連絡を取る。まさか全部乗っ取られたわけではあるまい。確かにこの近くに電話が…」

アレシアの様子は変わらない。

「…分かつたから降ろさんか！ 私は電話をかけたいんだ！」

アレシアの最重要プログラムは、ゾッドを守ることだ。今も地上から激しい轟音が響く中、もちろん降ろすようなことはしなかった。アレシアは今現在、最も安全と判断した塔の最下層を目的地に定めた。

「クソッ！ せつかく建てた塔をこのままみすみすガリアなどにアレシア！ 降ろせ、降ろさんか！」

地下に潜るほどに小さくなるゾッドの叫び声…
さすがの彼も、携帯電話は発明していなかった。

「な、なんかスゴイことになつちやつて…」

ルカは自分のしたことに興奮していた。声と、体が震えている。
凄惨な建物の破壊シーンを見て初めて、戦うことに現実感が
伴つたのだろう。

「確かにすごいな。狙つたつてああはいかないんじやないか?」

砲弾は、屋上の離発着場を支える根元部分に見事命中した。今、
その杯状のテーブルはゆっくりと傾き、上に整然と並んでいた空船
を次々に落としていく。やがて離発着場そのものもバランスを保つ
ための限界を越え、激しい音と共に根元から折れ、崩れ落ちる。

「少なくともエンドラの空船はほとんど失われたはずだ。当然ゾッ
ドにも気づかれただろうけどな。さあ、出るぞ。いつまでも同じ場
所にいるのは危険だ。 ルカ?」

ルカは動こうとしない。未だに大砲の波動が彼女の胸の中に響いていて、共鳴した心臓の鼓動が治まらないのだ。

その時ガリアは、遠くに聞き覚えのある音を感じた。すぐに記憶と重ね合わせる。それは、ルカがハンドルを回してもあそんでいた時と同じ、城塞砲の旋回音だった。

「ルカ、急げーーーを狙つてるヤツがいるぞーーー」

たかが見張り。おそらくは下級の兵士だろう。が、上官からの命

令を待つことなく、自らの判断で自陣の砲に狙いを定めるリスクを辞さない人間が確かにいる。時に優秀な人材は、思わぬ所にいるものだ。

「ルカ！」

ガリアが叫ぶ。

「う、うん。でも手が…離れなくって…」

ルカは恐怖に硬直している。そして焦れば焦るほど、手の震えも止まらない。ガリアは彼女の固まつた掌を、なんとか発射レバーから引き剥がそうとした。しかし遅い。

凄まじい音と共に、敵弾が防御用の装甲天蓋に直撃した。ガンッ！という鉄と鉄がぶつかる重い音は、砲撃時の衝撃を遙かに上回った。砲塔内にいたルカの鼓膜を完璧にマヒさせるほどの衝撃。ガリアでさえ、ボディの中にある水晶が音の波動によって揺れ、嫌悪感を感じたほどだ。がしかし、それでも天蓋の分厚い鉄板と、ドーム型の形状が跳弾を呼び、弾の貫通は免れた。

ルカは背中を丸めて顔を伏せたまま声も出ない。いや、かすれるような声でつぶやいていた。

「 ガ、ガリア…あたし…死ぬの…？」

あまりの恐怖にパニックを起こしかけている。当たり前だ。密閉した空間で的になる恐怖など、彼女は経験したことがないのだから。ガリアは硬直したルカの掌に、自分の手を当てる。そしてゆっくりとした口調で言うのだ。

「 その時は俺も一緒に死んでやる。でもそれは今じゃない。手を離

残念ながら、ルカにその言葉は届いていなかつた。未だに鼓膜がマヒしていたためだ。しかし深層意識には語りかけていたのかも知れない。いずれにしろルカの手はレバーから離れ、体ごとガリアの胸に飛び込んだ。ガリアはそれを受けとめると、ハッチを開いて外に飛び出し、そのまま上昇した。

再びシコツという音。そして一発目の弾丸が、今度は城塞砲のすぐ下の城壁に当たつた。外れたのではない。それは砲撃手の狙い通り、今度は弾の種類を変えて、砲塔の台座を崩しにかかつたのだ。装甲を貫通させるための鉄甲弾とは違い、今度は激しく爆発した。衝撃波と爆風。小さな破片がガリアの背にも当たつて、カン、カン、と金属的な音を立てる。

安全な高度まできて振り返ると、ルカが初めて実戦を経験することになつた城塞砲は、地盤を失い、今にも崩れ去ろうとしている。が、三発目の弾丸は城壁を越え、ガリアの遙か後方の海に着水して水柱を上げた。外れだ。続いて四発目…

間断なく響く凄まじい、大気の割れるような音。それは紛れもなく戦争の音だ。

ルカはガリアに抱えられながら、両手でギュッとき、ガリアの服をつかんでいる。そうするだけで、体の震えが見る見る治まっていくのだ。

都市はオレンジ色に輝く。それは電気の明かりであり、火花や炎の搖らぎでもあつた。

ガリアの胸に顔を埋めたまま、ルカがよつやく言った。

「ごめん。あたし、怖くなっちゃつて…」「まだ怖いか?」

迷つたが、素直に答える。

「ン…ちょっと…」

「じゃあしづらくなつてしま。その間にひつしてやる」

しかしルカは顔を上げ、瞳をまつすぐガリアに向けると、強く首を振った。

「もう大丈夫。潜入するんでしょ？ 行こうよ」

これ以上は甘えたくなる。ルカは奥歯をギュッと噛んで耐えた。それを見たガリアは黙つてうなずき、大量の空船とその離発着場を失つた塔を、共にジツと見つめた。

「よし、行くぞ」

ルカの射撃によって機能を失つた離発着塔。だが、それが決して空船のためだけの塔ではないことを、彼らはやがて知るのだ。

今もまだ煙にくすぶつて切り石やコンクリートを下に見ながら、ガリアとルカの二人は、上空から塔の破断面に近づいていった。塔は表面こそコンクリートに塗り固められてはいたが、破壊された箇所を見れば城壁と同じく、パズルピースのような切り石を積んで作られていたことが知れる。鉄筋ではない。ちなみに更に下地上はエンドラの兵士でごった返していて、喧騒に包まれていた。

ルカは不思議な光景を見た。

破断面の淵に、今にも落ちそうな一つの巨大な石があつた。実際、それは間もなくバランスを失い、重力に従つて落ちた。いや、落ちるはずだつたし、確かに落ちた。しかし、その落下速度が異様に遅いのだ。

「中に水晶が入ってるな」

ガリアが言った。

「あの石に？」

「ああ。あの石も含めて、この塔に使われている石の一部か、或いは全部。たぶん塔を安定させるためだろう」

「ふーん。でも何のためにこんな高い塔を作ったのかしら。見た感じ人が住んでるようにも見えないし、空船の発着場なんて地上でも良さそうなもんなのに…」

「シンボルじゃないのか？単に高いだけで力の象徴になるし、そこから空船が次々に飛び立つんだからな」

「そうか…。そうよね」

そうは言つたものの、ルカには今ひとつ納得できないことがあつた。本当にそれだけだらうか？ゾッドは確かに自己顯示欲が強い。しかし彼が持つもう一つの、彼女自身とも共通する特性が気になつた。それは実用性を考慮するということ。ルカの場合、往々にして失敗するが：

屋上は空船離発着場として作られた。それは確かだらう。では塔の中味は？

ガリアは暗くてほとんど見えない屋上を、苦もなく地面スレスレで飛ぶ。まるで迷路のようになつた大小様々な石の断片を、次々に避けるガリア。そして中央まで進むと、そこには大きな四角い縦穴があり、近づくと中から橙色の灯りがボーッと、辺りの瓦礫を照らしていた。

「これは？」

ルカはガリアの顔と縦穴を交互に見る。抱きかかえられたままなのでよく見えないが、穴はかなり深そうだ。ガリアはうなずく。

「うん。塞がれてなくてよかつた。この塔は中空になつてるんだ。前に来たとき気づかなかつたか？」

ルカは首をひねつた。彼女には整然と並んだ空船の印象しかない。或いはその影に隠れていたのかも知れない。

ガリアはようやく着地するとルカを下ろし、吹き抜けのすぐ脇に音を立てずにしゃがんで、しばらくの間瞳を伏せた。

「よし。人の気配はない。ここから侵入しよう。それからルカ

「なに？」

「ここからは俺にとつても未知の場所だ。覚悟決めとけよ」

それはもちろん、ルカにも分かつていた。

ガリアは再びルカを抱きかかえ、吹き抜けの中へゆっくりと降下を始めた。ルカは少しだけ、飛べないことを 何もできない自分を、もどかしく思つのだつた。

「…ウム、ウム、そうか。しかしそれで奴がやられるはずがない。警戒は怠るな。見つけしだい報告しろ。あン？他国への制圧？空船がなくてどうやってやるんだ。この馬鹿が！そんなものは後回しにしろ。ウム、そうだ。ここにはアレシアがいる。いらぬ心配だ。ウム。そのようにな。ああ、それから城塞砲を破壊したという兵士だがな。銃殺刑に処せ！私の作ったものを壊した罪だ。そうだ。分かつとるな！」

ガチャン！と、電話の受信機を叩きつけるゾッド。

「クソッ！ガリアの奴め。おかげで計画が全てパーだ！」

苦虫を噛み潰すよ^ヒうこ、そしてその歯の隙間からフーッ、フーッ、と激しく息を洩らすゾッド。よほど悔しいのだろう。

「おお、そうだ！私が表に出て困になれば後はアレシアが…。いや、待て待て。そんな賭けはできん。またいつ動かなくなるか分からんのだ。或いは奴の狙いはあくまで空船で、もつエンドラにはいないといつとも…」

ゾッドは顎に手を当て、最下層にある自分の部屋の中を、落ち着きなくうろついている。そこは個人の部屋とはいえかなり広く、住まいらしい雑多さは室内の一角に集中していた。アレシアは扉のす

ぐ脇に立ち、右へ左へ行き交うゾッドの姿を見るともなく見て……いや、正しくは記録して、マネキンのような無表情さでジッと次の指示を待っていた。

「そうだ、アレがあつたぞ……」

ゾッドは突如、叫ぶ。

「全く私としたことが……」このところ、兵士用のジャンプ・パーツにかかりつきりだつたからな。危うく忘れるところだつた

ゾッドは部屋の隅に行き、床から突き出したパネルに埋め込まれた水晶に、掌を当てて念じる。すると壁一面がゆっくりとスライドして、その後ろに整然と並んだ、幾つもの鉄の隠し扉が現れた。鉄の扉には一つ一つ整理用の名札が掛けられていて、その中には『空船』とか、『シリンドー装填機』などといった名前が書かれてあつた。

ゾッドはその扉の内の一つ、やはり埋め込まれている水晶に掌を当て、今度は少しだけ長い時間、念を込めた。その時間は複雑なプロセクトが掛かっていることの証明でもあり、扉の奥にしまわれた物の重要性がうかがい知れる。

名札にはこう書かれていた。

『量産タイプA』

金庫のような厚い鉄の扉が開くと、中にあつた50センチ角ほどのアルミの箱が空間を移動し、やがて地面にゆっくりと降りて、最後に箱の蓋が音もなく開いた。

「フフ、これだこれだ。こいつを起動させれば、破壊された空船を

遙かに上回る力を得る。私は運がいい。塔そのものが破壊されいたらこれも使えなくなる所だった……」

一瞬首をひねるゾッド。

「待てよ…といつことは城塞砲を破壊した兵士の手柄といふとか？つい興奮して死刑などと言つてしまつたが…」

ホウホウと何度もうなづくゾッド。そして…

「ま、いいか。電話をかけなおすのも面倒だしな」

部屋の中にある電話機を一瞬だけ見るが、あつといつ間に心は箱の中に向けられ、そのことは忘れた。中に入っているのは、厳重に布に包まれた30センチほどのトウワニン水晶だった。

「タイプAか…。所詮これなども一括で「コピー」できるレベルのプログラムでしかない。単体の「コピー」すら時間を要するアレシアとは比べるべくもないがしかし、数は質をも凌駕する。ハードも既に完成しているしな。楽しみだ。ガリアなど「ミ」にすぎん。その先にあるのは全世界だ。そして更に、私のもう一つの研究が完成した暁には、世界中の人は人形の如く、私の命令に従い動き出す。人間の力を高めるパーソ。そして同時に、私の意に従うパーソ…」

ゾッドは不敵に笑つた。

「早くやりたい！研究がしたい！もつともつと、色々な物を作りたい！だが邪魔はイカン！許しがたい行為だ。ウム、よし！アレシア。お前の弟たち　　量産型トウワニンボ・ドールを起動させてやる。行くぞ！」

ゾッドとアレシアの二人は、再びホールへと向かった。

「ねえ、ガリア、これ…なに？」

ルカは上下左右に忙しく首を動かしている。

「俺も中に入るのは初めてだからな 分からない」

ガリアは瞳だけを左右に動かし、それでも意識は全方位に飛ばしている。

「動く様子はないけど… 大丈夫かしら？ それになんか、アレシアに似てる…」

吹き抜けの壁には上から下までびっしりと、数十体、もしくはそれ以上の鉄人形が、彫刻の如く貼り付いている。

鋭く無表情な目元、高い鼻、薄く横に広い唇。顔は確かにアレシアに似ているもののシャープさがなく、鑄型に流し込んだだけの安っぽい顔だった。彼独特の、波打つ黒い長髪もない。禿げ頭だ。しかし何よりの特徴は、腰から下のパー^ツが存在していないこと。胴体までで体が終わっているのだ。握られた拳もただのひと固まりのパー^ツでしかなく、指はとても開きそうにない。作りの悪さを言えばキリがないが、結果としてアレシアやガリアとは違い、人間らしく見せるための手間などは、一切排除されているのだつた。

「大丈夫だ。コイツらの水晶には、まだプログラムが入っていない。カラだ」

しばらく鉄人形の前で瞑想していたガリアが言つた。ルカは、フウ…と、大きくため息をつく。

「でもこれで分かつた。ここは、このアレシアもビキの格納庫つてわけね。狭いスペースでも大量に置けるように塔の内壁に貼り付けて…つてことかしら」

「何より隠しておく」と、こぞといつ時の切り札にするつもりだつたのかも知れないな」

「でもこのモドキ。作りは粗そつだけど、確かにこの数は…」

「ああ、十分脅威になる…」

吹き抜けを下へ下へと降下しながら、改めて二人はその数に閉口した。そしてモドキを見て思い出したこと。聞きたかったこと。ルカはそれを聞いた。

「ねえガリア」

ガリアは黙つてルカを見る。

「アレシアと戦つて、勝てるの?」

ルカにはそれが不安でたまらない。ゾッドの言葉が今でも消えないのだ。それは「アレシアはお前よりも早い」という言葉。それに「チタン」という金属。

ルカは知らなかつたが、マサムネはチタンの存在を、二酸化チタンという名前として知つていた。それはトウワン文明の最盛期でさえ、酸化、抽出することのできなかつた金属物質なのだといつ。あるいはそれ以前つまりゾッドの生きた時代にはあつたのかも知れない。しかしながらともガリアはチタンではない。合金とはいえ鉄だ。

ガリアの力を信じてはいる。しかしルカには、どうしてもガリアが勝つ要素を見いだせない。

「当然そのつもりだ。 不安か？」

「そりゃあーそうよ…決まつてんじゃん」

ルカは目を逸らしながら、ふてくされるようにそう言った。

ようやくホールの最下層まで降りてくると、ガリアは大きな石のすぐ脇にルカを座らせた。ちなみにここもルカの誤射による影響を受け、大小様々な石の破片で元の床が見えないほどだ。上から落ちてきたのだろう。

「ルカは俺がチャクラムで木の実を弾くの、見たはずだよな。どう思つた？」

「え、まあ、うまいなあって」

「最初から?」

ルカは首を振る。

「だろ。不規則に動く標的に正確に当てるのは俺だって難しい。人間と同じように訓練が必要なんだ。でもゾシドはそんなこと思いもしないだろうな」

「でも前に戦った時は…」

ルカはガリアが鉄球を受けた時のことを思い出した。

「あの時の俺の動きは直線的だった。アレシアにしてみれば予測しやすい動きだったんだ。まあ見てるよ。俺はアレシアとは違う。戦いの中に想像力を込めることができる。要は基本性能だけじゃないってことだ。俺は鉄だけど人形じゃない。鉄人間…かな?」

いつになく饒舌なガリアに、ルカは笑みを見せた。気持ちが伝わってきたのだ。思いやるという気持ちが…

「少しば不安取れたか？」

ガリアの言葉にコクリと一回、ルカはうなずいた。そして言葉をかけようと息を吸い込んだ時。

（喋るな！）

ガリアは突然、ルカだけにしか聞こえない小さな念を送った。

（誰かホールに入ってきた、そこを動くな。そこなら見られない）

ルカの体が固まる。溜めた息はゆっくりと、静かに吐き出した。ホールに入ってきたのはゾッド。それにアレシアだつた。大げさな身振りと、辺りを気にしない大きな声がホール内に反響した。ちようどガリアたちとは反対側の隅にいる。

「おお、見ろアレシア！何度見ても壯觀じゃないか。空船に代わる…いや、人の手に頼る必要すらない兵器。『タイプA』だ。ちょうど百体いる。これに適當なプロパガンダを加えてやれば、そう。神の使い、化身、或いはトウワン人の名を語るのもいいだろう。どんな国だって服従するさ。ハッハ！だがまずはガリアだ。奴を見つけ、破壊するために働いてもらつ。見てろよ…」

ルカは思わず口を開き、それでも喋ることができないので、そのままパクパクとさせた。ガリアが代わりに念で伝える。

(ヤツはあのモデキを起動させるつもりらしい。いや、タイプAとか言つたな。トウワソボと、タイプAのプログラムの入ったトウワソ水晶が一つあれば、この塔にある全てのタイプA内部の水晶にプログラムを複写できるはずだ。ヤバイな……)

ガリアはしばらく顎に手をあて、伏し目がちに考える。

(それから厄介なことがもう一つ。アレシアは既に俺たちの存在に気づいている)

ルカは思わず口を押される。

(いや、お前のせいじゃない。俺だつてヤツらの存在に気づいた。俺たちはそういう風に作られてるんだ。でも心配ない。アレシアはゾッドに命令されるか、ゾッドの命を狙わない限り、攻撃はしかけないはずだ。ルカはここでゾッドに見つからないようにジッとしてろ。俺はゾッドに攻撃を仕掛けてみるが、おそらくアレシアに妨害されるだろう。そうなればアレシアと戦うことになる。いいな!どんなに俺が危なくなつても、それ以上のことがあつても、絶対声をあげるな。その時はルカだけでも逃げる。約束だ)

そう一方的に言つと、ガリアは背を向け、もはやルカを見ることはなかつた。声を出したくても、服を引っ張って止めたくても、できない。できうる限りの精一杯の抵抗で、首を小さく、何度も何度も振つた。

ガリアにもしものことがあつても、絶対、逃げるなんて嫌だ!そう思つた。

ガリアは腰のチャクラムに手をやると、今までルカが見たこともないようなスピードで飛び出し、超低空で飛ぶ。更にその勢いに乗せ、チャクラムをゾッドの額に向けて投げつけた。

「ゾーツド！」

ガリアが叫んだ。

ゾッドは完璧に虚をつかれた。

ガリアが叫ぶ。人間は呼び掛けられると一瞬、動きが止まるものだ。その額に向かつて一直線にチャクラムを飛ばした。ガリアも地面スレスレを凄まじいスピードで、這うように飛ぶ。そしてチャクラムがゾッドの額を砕き割るほんのわずか手前。

ガキンッ！

金属音がホールに響く。額を捉えんとしていたチャクラムは、アレシアの鉄球に弾かれるときわざかに軌道を変え、ゾッドのすぐ脇をかすめるように通過していった。だが今度は一方的ではない。鉄球も弾け飛んだ。新しいチャクラムは重い。そしてその弾け飛んだ二つの金属の間に飛び込んで来る者 ガリア。

「つおつ！？」

眼前に迫るガリアを見て、ゾッドが叫ぶ。

がしかし、ゾッドとガリアとの間に割つて入る者がいた。もちろんアレシアだ。

ゾッドの額に向けられたガリアの拳は、アレシアの掌が押された。すかさず左の拳をアレシア越しのゾッドに向けて振り抜く。が、それも押さえられた。ガリアは両の手をガツチリと上から固定される。アレシアの波打つ長髪が一筋、顔の前に垂れた。瞳は何も語っていない。ただ、最重要プログラムに従つて動ぐのみ。

「クツ！」

アレシアは上から押さえ付けるように、握った手を離さない。体勢的に背の低いガリアには不利だ。それでも何とかその手を振りほどこうと躍起になつていると、突然、フツ…と、ガリアの左右に何かの気配がした。いつの間に移動したのか、今やガリアの顔の両脇には一個の鉄球が浮かんでいる。狙いは頭だ。アレシアは余裕を見せる感情すらなく、躊躇せずに念を込めた。

「クソツ！」

ガリアは両足で床を踏み切り、アレシアの胴体に思いつきり蹴りを入れる。その衝撃に思わず、アレシアも握っていた手を離した。弾けるようにガリアは後方に飛ぶ。そして間一髪、ガリアの目前で二つの鉄球が、ガキンッ！と、凶悪な音を立てた。

ガリアは空中で後方一回転。高さを若干見誤つたものの、かろうじて四つんばいで着地した。同時に、空中で念じていたのだろう。地面に落ちていたチャクラムを呼び戻し、右手でつかむ。しかもすかさず、それをサイドから腕をしならせて投げる。狙いは足。アレシアの持つ鉄球は三個共、未だ地面に転がっている。チャンスだと判断した。

直線的なスピードはともかく、瞬間的な判断はガリアが遙かに勝つていた。応用力の違いだ。チャクラムはアレシアのむき出しになつた左大腿部に見事命中し、その破壊力にバランスを失つて倒れる。以前聞いたゾッドの言葉を信じるなら、これでやがてアレシアの左足の制御が失われるはずだ。

「馬鹿な！」

ゾッドが叫ぶ。

尚もガリアは、その隙を逃さずに追い打ちをかけた。命中した後、弾かれて制御を失っているチャクラムを地面ギリギリでキャッチすると、倒れ込みながらもフリスビーのように投げる。狙いはゾッドかアレシアか一瞬の迷い。ガリアは、アレシアの頭部に向かつて投げた。ゾッドを殺すことへの一瞬の躊躇。しかしあレシアさえ動けなくしてしまえばせめてゆっくり、ゾッドに最期の時を与えてやることができる。そう思ったのだ。だが、それがいけなかつた。

ガキンッ！

狙い通り、チャ克拉ムはアレシアの頭 中央の眉間に命中した。しかし同時に、ガリアも鉄球を右脇腹に受けていた。いや、正しくはかすめた。アレシアは倒れながらも、鉄球を操っていたのだつた。しぶとい。

「クソツ！」

ガリアは叫ぶ。とはいゝ、もう勝負は見えたはずだ。頭の制御を失えば鉄球も操れなくなる。それにそろそろ、右足に当たったチャクラムが効いて、アレシアは立てなくなるはずだつた。ガリアは攻撃をいつたん止め、それを待つた。

しかしアレシアはゆっくりと、何の問題もなく立ち上がつた。分散していた三個の鉄球も戻り、彼の背後で正確な正三角形を描く。おかしい ガリアは思う。まるで制御を失う様子はない。そしてそのわずかな間が、形勢を逆転する理由の全てとなつた。アレシアはその隙を逃さずに念を込めると、ガリアに向かつて鉄球をそれぞれバラバラに飛ばしたのだ。

「しまつた！」

ガリアは上空へ逃げる。しかし鉄球は執拗にガリアを追い、あらゆる方角から分散して狙つてくる。更にアレシアも地上を離れて攻撃に加わり、ガリアの避けるコースを限定した。攻撃に転ずる余裕など与えてくれない。避けることで精一杯だ。

ルカは両手で口を押さえながら、なんとか叫ぶのを押しとどめ、ガリアの危機を見つめる。それ以外に何ができるだろう？

「ハッハーッ！チャクラムの重量を重くしたのか。考えたなガリア！」

ゾックは笑いながら、上空のガリアにもハッキリと聞こえる声で叫んだ。

「だが無駄だあ！単に当てるだけでは駄目なんだよ。中の水晶のなあ、ちょうど重心に対しても垂直に力が加わらない限り、制御不能にするような振動は起こらないんだ！人間で言えばツボだよツボ！」

「クッ！」

ガリアはどうしてもチャクラムを飛ばすきっかけがつかめない。だいたい、どこを狙えばいいのか？今もやつとの思いで、鉄球を避け続けるガリア。いや、時折かすめる事さえある。塔の外に退路を求めるとしても、それを絶妙なタイミングでアレシアが邪魔をするのだ。

「アレシアにはお前のツボが分かる。つまりどこにどう当てれば機能を奪えるかが分かる。なにしろお前を作ったのは私だからなあ！しかしあ前に分かるか？アレシアのツボが？ハッハーッ！」

ルカは葛藤していた。飛び出したくても飛び出せない自分が情けなかった。別に怖いわけではない。でも今感情的に飛び出して、何

かしらガリアの助けになるとは到底思えないのだ。

(何をすればいい? 何を…?)

ルカはただひたすら、そのことだけを頭の中で繰り返した。

「フン。避けるのはうまいじゃないか。さっきのこともあるからなあ。私は奥へ引っ込んでいとしよう。ま、いつまでもそうやって逃げているがいい。だがいつまで持つのかなあ? お前に人間の思考が宿っているというのなら尚更だ。もしかしたらお前は疲れというものを見ついているのではないか? 残念だがアレシアに疲れはない。単なるプログラムだからな。アレシア! ガリアを私の元へ近づけさせるんじゃないぞ。さっさと片付けて戻って来い! そうそう、頭を取つてくることを忘れるなよな!」

ゾッドは、アレシアがなかなかガリアのツボに、鉄球を打ち込めないことに若干のイラ立ちを覚えながらも、ホールの外へと出ていった。

(今だ!)

心の中の疑問に対し、ようやく光が生まれた。ルカは迷わずゾッドを追う。一瞬、アレシアの方を見るが、こちらに来る様子はない。思った通りだ。アレシアも性能限界の攻撃を、ガリアに対して仕掛けているに違いない。余裕がないのだ。ルカはそれを確信して走る。

(あたしが…あたしがゾッドを殺せば、きっとアレシアは止まる。
あたしが…)

ルカは腰に下げた短剣 マサムネに託された魂の存在を、左手で確認した。

ホールを出ると通路は左右に分かれていて、右はかなり先まで見通せる直線。もう一方はすぐに左に折れていた。ルカは迷わず左へ向かい、角を折れる。折れた先は長い直線の廊下で、ゾッドは少し行つた所を歩いていた。ルカは短剣を鞘から抜いて右手で構え、足音を押し殺して距離を詰めると、後は一気に走り、その距離を縮める。

「ん？」

ゾッドがようやく気がついて振り返った。

迷うことなく剣を突き立てていれば、それでコトは終わっていたろう。しかし振り返つたゾッドの顔 父親の顔を見た途端、ルカはそれ以上動くことができなくなってしまった。

「お、お前は！？ そう。ルカだ！ お前も侵入していたのか…」

そしてルカの右手に手を止める。

「な、なんだお前。私を刺そりとでも言つのか。父親であるこの私を！」

ルカはただジッと、ゾッドのことを睨む。剣を持つ右手がブルブルと震えた。

「ほう… その指輪。知つているぞ。それは昔、私がリリタにあげたものだ」

ルカの胸元から飛び出した指輪のペンダントを、ゾッドが手ざさと

く見つけた。走っている内に服の中から出ていたのだ。ルカはハツとして、自分の胸元を見る。

「そうだ。私の中にはお前の父親の記憶が残っているんだよ。一緒に遊んでやったことや、お前が書いた手紙の内容だつて知つとる。友達が欲しいと書いてきたこともあつたなあ……」

ゾッドはルカの動揺を見て取り、尚も続ける。

「そろそろーこんな」ともあつた。夜、お前は夢で見た幽霊を怖がつて私の元へ来たな。ハハッ、私のベッドにだ！いい子だった。腕枕をしてあげたことは忘れたのかな？あの時のお前は父親に刃物を向けるような子ではなかつたぞ。可愛い子だった。おお、それにこんなことも……」

「やめるー！」

ルカがたまらず叫んだ。そしてつぶやくように呟つ。

「 その声で喋るな」

「 なんだと？」

「 その声は……お父さんなのだ。お前のものじゃない」

ルカは込み上げる怒りを必死で押さえていた。

「ハンツ！何を馬鹿な。今は私の体なんだよーこの声も、記憶だつて私のものだ。しかし、この肉体はお前にとつて父親である」とことわりはない。どうするよ？私を殺すか？その剣で！

「くつー！」

ルカは短剣を持つ手をふるふると下ろし、沈痛な面持ちでうつむ

いた。

「そうだ。それでいい。なんなら私の ゾッド・シャゾットの娘になるかね？お前には才能がありそうだ。何しこの肉体の血を引いているのだからなあ。これはいい肉体だ。オリジナルのゾッド・シャゾットにも引けを取らない脳の持ち主だよ。私は本当に運がいい」

決して打ちひしがれたのではない。ルカは自分の中の葛藤と戦っていた。そして怒りが最高潮に達するまで、そのエネルギーを溜めていたのだった。

「だがしかし

「

ゾッドは下唇をゆっくりと舐める。

「 ここまで娘として見られるかは…分からんがなあ

ゾッドは舐め回すよつこ、ルカの肉体を薄ら笑いと共に品定めした。

「なかなか将来性のありそうな、いい体だ…」

「 …お前は…父親じゃ…な…」

それは微かな…押し殺すような声だった。怒りを溜める、最後の我慢。

ルカはマサムネの魂の存在を確かめるよつこ、右手の力を一度緩め、もう一度強く握る。そして…

「わあああああああ…！」

絶叫。そして強靭な足腰が一気に間合いを詰めると剣を振り上げ、心臓へ向かつて振り下ろした。

左胸に衝撃が走る。

ガキンッ！というまともな金属音。精神的な疲れは確実に、ガリアの集中力を二ブらせていた。ガリアは鉄球の直撃を受けてバランスを大きく崩す。

「クッ！」

マヒを誘発するような打撃ではないが、一瞬の行動を奪うには十分だった。そしてその一瞬は、アレシアとの戦いにおいては致命的な時間なのだ。

とどめの鉄球がガリアの頭に狙いを定めていた。ガリアは、それを正面に見据えていながらも反応する余裕がない。ただ映像を入口モーションで見るよう、直撃の時を観念して待つた。

しかし、その時はいつまで待つてもやつて来なかつた。

そして時を違わず、どこからか人の叫び声がするのをガリアは聞いた。

（なんだ？）

しかしアレシアは声だけではなく、更に別なものを捉えていた。主人ゾッドに対する強烈な殺氣。それも、最重要プログラムが発動するに十分の…

とどめを刺すべくせつかくの好機をアレシアは完璧に無視し、ガリアに対して無防備に背中を向ける。

不意に訪れた勝機。

(今だ!)

ようやくにして、ガリアはチャクラムを構える。そしてその時、見つけたのだった。おそらくは、ガリアと全く変わらない位置に水晶があるだろうと思えるパートが　背中を向けたことによつて、彼の目に飛び込んで来たのだ。

迷うことなく、ガリアはその場所へチャクラムを投げつける。直後に、ガキンッ！という激しい金属音。それは寸分の狂いもなく命中した。膝の裏に露出した、間接部分の金属球に…

「どうだ！」

アレシアはそれでも、もはや全く他のことに気を取られることなく、最重要プログラムに従つて一直線に、ホールの出口へ猛進する。そして出口へ差し掛かった時、アレシアに変化が起こつた。

一直線に飛んでいた彼の軌道が、右方向へと弧を描き始めた。それは進むに従つてますますズレが大きくなり、出口をくぐり抜けることなく、すぐその脇の壁に頭から激突した。遅れて二つの激突音。間接の金属球の機能を奪つたことは、思わぬ効果を生んだ。全てのパートが物理的にはつながつていないガリアやアレシアだが、間接の役割は人間と同様に、その前後のパートの制御だつた。今、それが奪われたことによつて、アレシアの右膝から下は、壊れたマネキン人形のように取れた。片足になつたことで、推進力のバランスが崩れたのだつた。

しかしそれでもアレシアは飛ぶ。もはや完璧にバランスを失い、まっすぐ飛ぶことができないというのに…

アレシアはホールの壁に幾度となく激突し、その度に体が、人間ではあり得ない方向へ曲がる。それでも最重要プログラムの拘束は解かれることはなく、目的地へ向かつて飛び続ける。しかし、永遠

に着くことはないのだ。アレシアは所詮は鉄人形。修正が効かない。自ら学習する心を持たない。

何度も何度もアレシアは、彼が持つ自慢の最高速度で壁に激突し続け、やがて不意に動かなくなつた。壊れたのか、一時的な機能マヒなのか　いずれにしろ、もはやとともに動くことはない。

ガリアはゆるゆると床へ着地する。そして一瞬瞳を伏せ、人間で例えるならため息をついた後、よつやく叫んだ。

「ルカ！」

返事がない。辺りを見回す。そしてもう一度。

「ルカ？」

ガリアはようやく、その場にルカがいないことを知つた。

「馬鹿が！私に従えば殺さずに済んだものをよ」

ゾッドは吐き捨てるように言った。

「トウワンボを持つ私に、そんなただの剣が役に立つか」

ゾッドはトウワンボを両の掌に挟み込み、合掌している。

「どうするかなあ。今すぐその喉元を掻き切つてやろうつか？刃向かつた罪は重いぞお」

ルカは壁に背をピッタリとつけて、顔をそむけながらも瞳は気丈にゾッドを睨みつけていた。ゾッドに対して振りかざしたはずの短

剣は空中に浮いて、その切つ先は逆にルカの喉元に突き付けられている。わずかに体を動かしただけでも、チクリ…と、刃先が皮膚を刺す。

「フフフフ…まあ、そこで見ているがいい。タイプA起動の瞬間をな。言つておくが少しでも動こうものなら、すぐにでも気道を切り裂くぞ。声も上げられずに死ぬことになる」

ゾッズは嬉しそうに、トウワンボと共に手もみをする。そして、床に置いてあつたアルミニの箱を念によつて開くと、中から平たい円柱形をしたトウワン水晶が出てきた。水晶の上面には丸い窪みがある。

「このトウワンボところのは不思議な石でなあ…」

ぬかりなくル力を見ながらゾッズは言つた。短剣は相変わらず、彼女の喉にピッタリと静止している。

「…念じることによつてできることは限られているのだが、水晶といつ記録媒体を使うことで、かなり色々なことができるようになる。その最高傑作がトウワンボ・ドール。つまりガリアであり、アレシアだ。そして水晶によつて記録されたプログラムは、トウワンボが持つ思念伝達能力の応用によつて、他の水晶にコピーすることができるわけだが…まあ、それも私が考えたプログラムでな。これら の基本プログラムは全て私が生み出したトウワン水晶の中に組み込まれている。だからこのよつて、したいことを念じてやれば…」

ゾッズはトウワンボを、トウワン水晶の丸い窪みの上に置いた。

「…後はこいつしてトウワンボを置いておくだけでいい。勝手にやつ

てくれる。何しろ百体分の「コピー」だからな。少々時間がかかる。だがなに。お前の喉を切り裂く頃には終わってるがね」

ゾッドは再びルカに顔を寄せる。宙に浮いていた短剣を握り、トウワンボの束縛から解放した。そして彼女の髪を鷲づかみにして、短剣を喉元に突き付ける。

「おい、動くなよ！ ちょっとでも動けば今すぐこでも突き刺してしまいからな。フハハハツ！」

「ンクツ…」つ…

ゾッドの手が力んで、ルカの喉元を微かに切った。ゾッドの顔が更に近づく。そしてその傷口に再び切つ先が触れ、血が一筋、ツーつと流れた。ゾッドは興奮している。自分の手元の動きにはまるで無頓着だ。

ルカは耐えられずに瞳をそむけ、かすれるような声で言つた。

「…ガ…リア…『…めん…』

ゾッドは満足気に微笑む。

「本音を言つとなあ、お前は万が一の人質に使えると思つてたんだ。奴は侮れんからな。だがもう役目は終わり。「コピー」は無事完了したようだ。後は私が命令を与えてやればいい。タイプAが田覓めればガリアの脅威など全くないからなあ。今すぐこの剣で楽に…」

そうしてふと、手に持つた短剣を二ンマコと横田で見た途端、なぜかゾッドの言葉が止まつた。

「？」

様子がおかしい。

ルカはそむけていた顔を、恐る恐るゾッドに向ける。

「……この斑紋は な、なんと美しいのだ…」

ゾッドは短剣の刃の部分に魅入っていた。それはマサムネの渾身の作品。鉄をよく知るゾッドは、その仕事の質の高さを瞬時に見抜き、合金ではあり得ない、鍛鉄が生み出す最高の作品に酔い痴れた。それはもう、ルカの存在すら忘れるほどに…

「これは素晴らしいよ。最高の鉄の芸術だ！」

ルカはそのわずかな隙を逃さず、一気に駆け出す。

「ン？ うおっ！ ？ し、しまった！」

我に返ったゾッドがすかさず短剣を横一文字に振り抜く。それは走りだしたルカの左腕を見事な切れ味で切り裂いた。がしかし、腕に巻いたバンダナが邪魔をし、皮膚を数センチ切るにとどまった。

その去りぎわ、ルカはバネを利かせて態勢を低くし、その細い腕を目一杯伸ばすと、水晶の窪みからすくい上げるようにしてトウワントボをつかんだ。その俊敏な身のこなし。美しい動作。が、残念ながらつかみ切れずに前方に弾くと、トウワントボはそのまま、よく磨かれた石の床を滑つていった。

「ら、乱暴な！ 割れたらどうすんだよ…」

ルカはそれを更に追い、転ぶように前のめりになりながらも今度はなんとか手の中に收め、少し不恰好に、だがすぐに態勢を整えて、

持ち前のスピードで走り去つて行つた。

「馬鹿者。か、返さんか！」

トゥワンボは彼の命。生きていることの証明。ゾッドは手に持っていた短剣の美しさや、タイプAの存在さえ忘れて、ルカの後を追いかけた。

廊下に投げ出されたマサムネの魂は、見事大役をこなし、よく滑る床の上を跨りしげにクルクルと回るのだった。

ガリアがそこへ駆け付けた時、廊下にはアルミニの箱と水晶。それに短剣が残されていた。人の気配はない。ガリアは床に落ちていた短剣の刃の部分を指先でつかむと、空中でクルッと半回転させて、柄を握り直した。手首を軽くひねり、キラリッ、と、刃に映る光の反射角を変えてみる。すると斑紋に暈りが生じた。それは切っ先から微かに流れた血の痕。

「ルカ！」

ガリアは即座に駆け出した。

ルカはとにかく走った。ゾッドへの恐怖。いやそれ以上に、死を覚悟してしまった自分自身から逃れるためにも走った。そして考える。

（逃げてたらダメだ。ゾッドを殺さないと。武器はないけど…このトウワーンボで何かできれば…）

彼女は走りながら、ゾッドがしたようにトウワーンボを掌に挟み、念じてみる。試しに自分の体を浮かそうとしてみた。でもダメだ。体が軽くなるようなこともない。

（ああ、分かんない！念じ方が足りないのかも知れない…）

尚もルカは走りながら、目を閉じて真剣に念じてみる。ほんの数秒。

「うわっ！」

気配を感じた彼女の目の前に曲がり角が迫る。ルカは肩を壁にぶつけながらも何とか角を曲がり、更に走った。

（どこか…隠れられる場所…）

やみくもに走っていると、目の前に一際大きな扉が見えてきた。扉は開いていて、中は暗く、広そうだ。ルカは迷うことなく入つていった。

「暑い！」

思わずルカは声を出して言つた。しかし何より、暗くて何も見えない。最初は手探りで　しかし進むに従つて瞳も馴れ、微かにはあつたが、赤い光で照らされた室内の景色が、徐々に浮かび上がつていった。どうやら5メートルほど先で部屋は右に折れていて、赤い光はその方角から差しているようだつた。ルカの右手には何かの巨大な機械があり、それが光を遮つているのだろう。床は異様に散らかつていて、ルカは慎重に、でもできるだけ早く抜き足で進み、角を曲がつた。そしてようやく、この部屋がなんの部屋なのかを、そして暑いわけを知つた。

「溶鉱炉だ。…ずいぶん広い」

まるでそこは工場の中を思わせた。そしてちょうどその中央付近に大きな縦穴がある。ルカの目線からは見えなかつたが、奥底では

溶解した金属が山吹色に光り、室内全体を赤く照らし出していた。本来ならすぐに辺りを見回し、部屋の構造を把握すべきだった。しかしルカはついそれを怠り、身を隠す場所などない中央の縦穴へと、近づいていった。

ガタガタガターン！

突然、ルカの後ろから激しい音が響いた。

「クソツ…暗くて何も見えん」

ゾッドの声だ。ルカは反射的に向き直る。そして隠れる場所を探して左右を見回す。

「ん！？ フフ…見つけたぞ…」

最初は声だけが、そして暗闇から、光に照らされた真っ赤な顔が浮かび上がる。不敵な笑みを見せるゾッド。

「さあ、おとなしく…そのトウワソボを渡しなさい。いい子だから。なんなら…お前を生涯の娘にしてやっても…いいぐらいだ。一生可愛がつてやる。性の処理になど…使わんから。さあ…」

ゾッドは片手を差し出しながら、まだ治まらない呼吸の合間に唾を飲み込み、ゆっくりと近づく。ルカは目線を逸らさずこ、やはりゆっくりと後ろへ下がる。右手のトウワソボを確かめるように強く握った。

「イタツ…」

「ゴンッ！と、ルカの右肘が何かにぶつかった。後ろを見るとそこには鉄柵があり、もうそれ以上は下がりようがない。その向こう側は深い縦穴　溶鉱炉があつた。

「あつ、危ないじゃないか！もしトウワンボを炉に落としでもしたら　怖い怖いいー。そんなことじゃ私の娘になど、なれないよ。さあ、トウワンボを…こっちへ…」

ゾッドが距離を詰める。ルカは瞳だけ動かして、左右を探り見る。左側はすぐに壁。右側は　10メートルほど行った所で、鉄柵がそのまま直角に曲がり、溶鉱炉の方へと伸びている。どうやら炉を横断する橋になつてているようだ。ルカは迷わず駆け出した。

「いのっ、ビニー！」

ゾッドが叫ぶ。ルカは右へ折れて橋へ。

「どこへ行こうと言うんだ。え？」

だがしかし、ゾッドは慌てずに言つのだ。

カンカンカンと小気味いいルカの足音は、不意に止まつた。なぜならそこは橋ではなかつたから。ただ縦穴の中途まで突き出しているだけの、炉内観測用デッキ。

慌ててルカは踵を返し、戻ろうとした。だがもはやその出口にはゾッドがいて、両の手で左右の柵をつかんで、嬉しそうに体をユラユラと揺らしている。

「馬鹿だなあ。もう少し周りを見ないとね。炉の向こう側に行きたければ、入口のすぐ脇のハシゴを登つてねえ。ホラ、あの上の方の橋を渡るんだ。ハハッ！ハハッ！」

奇妙な笑い。そして続ける。

「そこは長時間いるにはツライだわ!へ、あ、早くそのトウワンボを返しなさい。いい子だから」

デッキの先端はかなり暑く、熱気がルカの顔を襲った。いつまで耐えられるか　でも、我慢できないほどではない。顔をしかめながらも、ルカは何をするべきか必死で考えていた。

「なんだお前はあ。いい加減にしないと、セレから突き落とすぞ。おい！」

ゾッドから不意に笑みが消えた。観察デッキを踏みしめる、カツン、カツン、という金属的な足音を響かせて、ゆっくりとルカへ近寄るゾッド。

「そ、それ以上近づかないで！」

トウワンボを持った右腕を、ルカは鉄柵の外に投げ出した。だが、ゾッドは止まることがなく、ニヤニヤと笑う。

「なんだ？トウワンボを投げるつもりかよ」

「そうよ！それ以上近づくと炉の中に投げ捨てるからね！」

しかしゾッドは動じない。

「面白い、やつてみる」

「え？」

「言っておくが困るのは私だけじゃないぞ。まさか『失われた時代』

を知らんわけじゃあるまい？それがなくなれば、そのトウワンボによって生み出された、全ての水晶の力が失われるんだ。もちろんガリアもだよ。ただのバラバラのパーティになる。ハハツ！できるのか？お前に。ハハツ！ハハアツ！

「クツ！」

脅しは効かない。それなら…

ルカはトウワンボを両手に挟んで合掌する。一瞬、ゾックドがひるんだ。

さつきはダメだった。でももしも他人に対してなら…

（飛べ、飛べ、飛べ、飛べ！）

ゾックドを弾き飛ばすイメージ。それに空船を自分で飛ばした時のこと。集中…

「 飛べ、飛べ、飛べ、飛んでけえつ！」

強い願いが思わず声となつて出る。それは十分に物を吹き飛ばすほど、強烈な念だつた。だがまるで何事もない。ゾックドは再びルカに迫る。

「ふははははつーと、飛んだけ！だと？まさか私に対してもうじていの？馬鹿が。ははつートウワンボはなあ、結晶構造の物質にしか作用しないんだよ！金属とか、石とかな。それつ！」

ゾックドは一気に距離を詰めると、トウワンボを強引に奪いにかかつた。ルカはそれを嫌つて抵抗する。一人はそのまましばらくもみ合つた。

「「」「」のー わつわとそれを…渡せつー」

ついにルカは右腕を取られ、ゾッドは両手でトゥワンボを引き剥がそうとした。精一杯の握力でそれを拒絶し、ルカはもう、とにかくやみくもに残った左腕で殴り付ける。

「「」「」のー わつわとー」

が、ゾッドは全く動じない。自分の非力さにハラが立つ。ハラが立つて、ついにキレた。彼女が今持ちうる、接近戦最大の武器を使つたのだ。

「あーつー？ あたたたたたたつー！」

ルカは半袖シャツから伸びた右のーの腕を思いつくりそ肉を引きちぎらんばかりに噛み付いた。

「いてーなあつー！」

あまりの痛みに耐えかね、ゾッドは思いつきルカを突き飛ばした。背後の鉄柵に勢いよく背中をぶつけるルカ。

ガシャーン！

「ルカあつー！」

同時に、ガリアの声が背後から響く。背中の痛みをも忘れて、ルカは振り返った。

「ガリアー！」

その声の先にガリアはいた。彼女からは、溶鉱炉ごとに10メートルほど離れて、分厚い窓ガラスの向こう側にその姿はあった。この部屋全体を管理する制御室だ。

「待つてろ、今行く！」

すぐに溶鉱炉へと出る扉を見つけたガリアだが、鍵がかかっていて開かない。窓も鉄格子がはまっているので、叩き割ったところで無駄だ。戸惑うガリア。

ルカは観察デッキの先端、その鉄柵から上半身を大きく投げ出すよびにして、とにかく叫んだ。

「ガリア！ ガリア！」

助けが来たという思い。それもある。しかし彼女にとつては、ガリアがアレシアを倒したこと。いや、少なくとも彼が無事なことが嬉しかつたのだ。

「危ないルカッ、後ろだ！」

ゾッドの接近を見てガリアが叫ぶ。

「よくも噛み付きやがって。このバカ女があつ！」

ゾッドは怒りにまかせて、ちょうど振り返ったルカの顔にまともに殴り付けた。彼女がトゥワンボを持っていることすら忘れて…

「し、しまつたあつ！」

直後にゾッドが叫ぶ。トウワンボがルカの右手から離れ、溶鉱炉の方へ飛んだのだ。

「ルカあつ！」

ガリアも叫ぶ。ルカはガリアを思う余り、上半身を柵から大きく投げ出していた。それがいけなかつた。そこへ手加減なしのビンタを喰らい、ルカはそのまま溶鉱炉へ向かつて落ちていく。ガリアは、窓ガラスの向こう側で無慈悲に展開されている映像を、ただ見ていることしかできなかつた。

「トウ、トウワンボが！」

ゾッドも、溶鉱炉に落ちていくトウワンボを、やはりただ見ているしかない。

しかし、トウワンボには奇跡が起こつた。

観察デッキのすぐ下には、縦穴を渡るようにして四角い鉄骨が一本。更に中央でそれと交差する鉄骨が一本。計二本の鉄骨が十字に交差していた。トウワンボはそこへ落ち、カン！と、音を立てた。続いてカン！カン！と、音は続く。鉄骨の上を跳ねる度にわずかにコースを変えながらも、トウワンボは炉内に落ちることなく転々と転がる。鉄骨の幅は50センチもないというのに。

ゾッドはそれを見ながら、「ハウツー！ハウツー！」と息を荒げた。そしてちょうど鉄骨が交差している中央の、わずかに広くなつた本当にギリギリの端で、トウワンボはようやく止まつた。

運と言つしがないが、それはやはり奇跡だった。

残念ながら、ルカに奇跡は起きなかつた。ただ一つ、彼女にあつたもの。それは天性の反射神経

ルカはトウワンボが転がつたのと同じ鉄骨を、左手一本で辛うじてぶら下つていた。

ル力の右の一の腕には、さっきまではなかつたはずのアザ。更に腕はすり切れ、指の皮もズルむけ、爪も割っていた。転落を防ぐために、瞬時にならゆる努力をしたことが知れる。だが今、彼女を支えているものは、左腕一本でしかない。

「アウツ！くつ…うう…」

あまりの痛みに右腕が上がらない。いつぶつけたのかも覚えていない。それでもなんとか気力を振り絞り、右手で鉄骨をつかもうとする。しかしつかみかけたところで無情にも指が弾かれた。ブラブラと体が揺れる。その揺れに耐えかね、ズルリ！と、左手の指ひとつ間接分、体が落ちた。鉄骨の淵は握りやすくはなつていたが、火事場のクソ力にも限界がある。

一瞬、下を見るルカ。山吹色の熱の圧力が彼女を襲う。上昇する気流も、彼女の助けにはなつてくれない。それでもなんとか氣を入れ直すことはできた。

「し、死ぬもんか！」

恐怖を上回る生への執着。それが彼女にはあつた。いや、一度生きることをあきらめた自分の弱さを知ったからこそ、より強くなれたのだ。

ルカはもう一度右腕を上げ、なんとか鉄骨の角に指をかけると、懸垂するようにして体を上げた。二の腕の筋肉がブルブルと震える。鉄骨の上面が視界に入った。そして一気に、鉄骨の奥の角に左手を伸ばしてつかまる。

「も…もう少し…」

だがそこへ、ゾッドが降りてきた。

「わ、私のトウ…トウワンボ…トウワンボが…うわっー…とつとつと…」

観察デッキから鉄骨へ飛び降りた途端、バランスを崩したゾッドは、それでもなんとか四つんばいになつて溶鉱炉への落下を免れた。そして中央のトウワンボへ向かい、そのままの姿勢で進む。ルカやガリアなど眼中にない。

「アチツ、アチツ、トウ、トウワンボ、トウワンボ…」

息を吐き出すたびに言葉を連呼するゾッド。そして田の前では、ルカがようやく鉄骨に足をかけ、這い上がるうとしているところだつた。

「なんだお前はあー邪魔だ。ジャマあー」

両の手でドンツーと、容赦なくルカを突き落とす。鉄骨にかけた足は無情にも滑り落ち、左手も離れる。最後の右手が全体重を支え、一瞬だけ体は「ムのよにビーンと突つ張つた。今まで耐えに耐えてきた筋肉も、そこがもう限界だった。

「さやああああああー…」

溶鉱炉に絶叫が響く。もはやつかまるべき場所もない。反射神経も意味を為さない。そして不意に、絶叫は止んだ。

ルカの絶叫を止めたものは、山吹色の炎ではない。扉を破壊し、飛んできたガリアだつた。背後からガツチリとルカを抱きかかえると直後、抗えぬ重力に数メートル沈んだものの、なんとか持ちこたえて再び上昇を始めた。

「おい！生きてるか？」

「あ…」

ルカは呆然として、意識が飛んでいる。ただ瞳だけがゆっくりと、左右に動く。無意識ながらも身体は状況を把握しようとしている。

「ルカ。お前　こんなに…」

間近で見ると、彼女の身体は打ち身やスリ傷でボロボロだ。爪の間から血がにじみ、左腕や首からは血の流れた跡もある。

「　ガリア！」

唐突にルカは正氣に戻る。そして気がついた。

「あたし、トウワンボ持つてない！」
「まかせろ」

ガリアはうなずくと、ルカを抱きかかえたままクロスする鉄骨の中央まで飛ぶ。

一方、ゾッドは

「ハア…ハア…よ、良かった。私のトウワンボが、ぶ、無事だ」

ゾッドはトウワンボを前にして、更に息を荒げていた。それでも鉄骨の端、ギリギリ数センチで止まっているトウワンボを落とさぬよう、慎重に手を伸ばす。万が一落とせば、彼の野望の全てがそこで終わってしまうのだ。神経質にもなる。だがその寸前、ガリアが慎重さのカケラもないスピードで飛んできて、トウワンボを奪い取つ

た。

「！」、このっ！わ、私のだぞ。うわっ！ガリアか！？」

今さらにして彼の存在に気づき、驚愕するゾッド。それを尻目にガリアは安全な場所にルカを運ぶと、片膝をついてソッと、優しく床に降ろした。が、跳ね返るよつに戻つて抱きつくる力。

「ガ、ガリアあ…」

よほど辛かつたのだろう。ルカは珍しくガリアの前で涙を見せた。それは嬉し涙もある。しかし、ガリアは二、三回髪を撫でただけでルカを引き離した。そして彼女の手を取る。

「このトウワーンボはルカが持つてゐ。それからこれ

ガリアは、腰のベルトに差しておいたむき出しの短剣を抜くと、それをルカに見せた。

「血がついてた。ルカの血か？」

彼女は一瞬、自分の左腕の傷口を見て、うなずいた。バンダナは一部スッパリと切れ、ほどけかかっている。

「でも大丈夫。ゼンゼン大した傷じやないから。血もほとんど止まつてるし」

心配させまいと、ルカは平静を装つた。

「そうみたいだな」

「え？ あ、うん。平氣、平氣」

拍子抜けした。もつと氣にしてくれると思ったのだ。

ガリアは、短剣を手の上で回して刃先をつかみ、柄をルカの方に向ける。

「これは鞘に収めておけ」

「うん…」

少し寂しげな気持ちで短剣を鞘にしまつていると、ガリアはそつとルカの腕を取る。傷口にバンダナをあてがつて結び直しながら、言った。

「この傷は残らないから安心しろ。もう少し深かつたら、一生じいさんにウソをつき続ける所だつたぜ。じいさんのじゃなく、ゾッドの剣にやられた傷だとでもな」

「あ！」

短剣はマサムネがくれたお守りでもある。そのお守りにやられたなど、確かに言えない。ましてや残るような傷だつたりしたら、マサムネは落ち込むだろう。

気がつくとガリアは手を止めて、ジッとルカを見つめていた。

「でもよくがんばった。ルカが言つたことは本当だつたんだな

「え？」

ガリアには分かっていた。ルカが命懸けで自分を守りつとしたことを。

「ここからは俺が守つてやる」

最後に手際よくキュッとバンダナを結ぶ。それは決心の証でもあった。迷いのない動作でガリアは立ち上がり、背を向けた。

「あ、ガリア！」

思わず呼びかける。

「見ていたければここから見てる。これで終わりにする」

ルカは黙つてうなずく。もう分かり過ぎるほど分かっていた。もう父親はいないということを…

溶鉱炉に目を向けると、ゾッドは未だ鉄骨からテッキへ上がれな
いでいた。

「クツ、クソツ！あ、上がれん」

ゾッドは鉄骨から恐々と立ち上がり、控えめなジャンプを繰り返す。それはそうだ。万が一にでもバランスを崩して落下すれば、いかにゾッドとて死ぬしかない。思い切つてジャンプすれば背の高い彼のこと、観察デッキの鉄柵までは届かない距離ではなかつた。しかし、それができない。恐怖にすくんでいるのだ。

「クソツ。だ、誰か！」

その時、背後でカツン、といつ音。それに声。

「俺でいいか？」

ゾッドは振り返る。そこにいたのは、何のバランスの乱れもなく、

鉄骨を歩み寄るガリアだつた。炉内の上昇氣流が赤い髪を揺りす。

「ハツ、はああ！」

ゾッドの顔が脅威に歪んだ。

「大した溶鉱炉だな。お前の棺桶には立派すぎるぐらいいだ
「く、くそお！くそお！どうやつてアレシアをー…？」

中央まで歩み、ガリアは足を止めた。

「お前に言われた通りにな ツボを刺激してやつた」
「ま、まさか、そんな… 馬鹿な。そ、そつだータ、タイプAに、め、
命令を…」

「タイプA？トウワソボ無しでこの場所から命令を送るのはムリだ
ろ？」「

「グッ！」

ゾッドはブルブルブルブル、体が小刻みに震えだした。怯えてい
るわけではない。それは思い通りにならないことへのいきどおりだ
った。彼は現実を味わぬまま、育ちすぎた。

「 選べ」

ガリアは言った。

「 なんだと？」

「自分から溶鉱炉に落ちるか、俺のチャクラムで死ぬか

「 選べよ」

無造作に、いつも通りチャクラムを腰から外すガリア。

「なつ！？」

ゾッドの顔が見る見る怒りの表情へと変わつていった。咆哮のよ
うな叫び声を上げ、首を大きく左右に振る。すると今度は懇願する
ように言った。

「い、いや、待て待て！私は素晴らしい発明をしたんだ。こんな鉄
の炉などメジやないぞ。アレシアを見ただろう？チタニウムという
素材。あれはトゥワーンボ技術の応用によつて、抽出した素材なのだ。
大発見だぞ。トゥワーンボを使えばまだまだ、無数の素材を作り出す
ことも夢じやない。物質の合成、分離！夢の新素材だ。その技術は
私しか知らん！その私を殺すのかよ！えつ？これから世界は変わる
んだぞ。私によつて。より便利に！より高度に！」

ガリアはゆつくつと首を振る。

「得体の知れない　いつまた消えるとも知れない力か…。それは
お前の力じやない。トゥワーンボの力だ」

「だ、だが私はお前の父親だぞ。お前を作つたのは私なんだ。その
顔！瞳！瞼！身体！爪先から指先に至るまで！私が加工し、仕上げ
た。その私を、お、お前は殺すのかつ！」

一瞬、ガリアの瞳が遠くを見た。それはこの時代に生まれて、生
きてきた数年間。そして百五十年前、記憶ではなく記録であつた頃
の数か月…

「本心からお前を父と思ったことはない。それでも傷は負つた。い
や、これからも負つていく。安心しろ。俺だけはお前を悼んでやる。
俺の中の魂は　それにルカも、お前を絶対に許さないだろうから

…

そして最後に言つた。

「俺の遠い記憶、いや、記録の中で、ゾッド・シャゾットという人間が語つたことがある。夢はスチーム・ドールを歩ませることだつた…と。できるなら俺は、そっち側の夢の産物でありたかった。こんな 得体の知れないものではなく。それならば俺は、お前を父と呼べたかも知れない」

ガリアは自分の胸を押さえて、うつむいた。それは心の痛み。

現在まで解明されているトウワンボの正体。それは天然原石ではあり得ないということ。ただそれだけだ。トウワン人たちの伝承の中でも、トウワンボはある場所でまとめて発見されたという。ただ、今となつてはそこがどこなのかも分からぬ。結局、全てが謎なのだ。

「つおおおおおつーし、死ねえええつ！」

鉄骨上を突進し、恐怖をも忘れてゾッドは走る。未だうつむいたままでいるガリアの隙を逃さず、思いつきり突き飛ばしにきた。しかし：

ゾッドはガリアが飛べることすら忘れていたのか？

だがいざれにしろ、ガリアはその能力に頼ることもなく反射的にかわし、チャクラムで背後からゾッドを殴つた。しかし実際にはその必要すらなかつたのかも知れない。もう、彼の足元に鉄骨はない。あとは重力に従い、落ちるのみだつたから…

もちろん、ゾッドにルカのような反射神経もない。奇跡も使い果たした。

「うあああああつーし、死にたくないーつ！死んでたまるかつ！死んでーつ……」

そして唐突に絶叫は消えた。消したのは山吹色の炎。

ルカは鉄柵から身を乗り出し、ガリアはその場に立ち尽くした。液化した鉄が放つ光に一人は照らされる。ゾッドの肉体のほとんどは蒸発して大気に溶け、残りは溶解する鉄の不純物となつた。

やがてガリアは宙を飛ぶと、ルカの元へ舞い降りる。彼女は既に炉に背を向けていて、鉄柵に体を預けていた。物憂げに床を見つめている。

「ガリア… ありがとう。お父さんの仇、討つてくれて 感謝して る」

顔を上げずにルカは言った。

「つらいか？」

素直につなずく。

「うん…。でもあたしはお父さんの心が好きだったの。心は もうずっと昔に死んでたから。だから平気」

微かなため息。その正面に立つガリア。

その時、突然ガリアの顔がルカに近づいてきた。鉄柵に寄り掛かつていたルカは下がることもできず、彼女はただただ動搖した。

「ちょ、ちょっと… ガ、ガリア？」

両肩に手を乗せ、顔を、体を、ルカに寄せるのだ。胸の鼓動が高

鳴る。

「お、重いよ、ガリア……」

様子がおかしい。ルカにのしかかるように体を預けたガリアは、そのままズルズルと落ちていき、片膝をついた。

「だ、大丈夫！？」

「あ……悪かった。少し……腕と足が痛んで……」

「アレシアにやられたの？」

ルカも屈んで、右腕を押さええるガリアの手に触れた。

「そうじゃなくて……いや、そうだけビ。最初にエンドラでヤシと戦つた時の。まあ、古傷がな」

ルカは思い出した。確かにあの時もガリアは同じように倒れた。

「あ、でもなんで今頃？」

「最初に気づいたのはもつと前 ルカが熱でふせつてる時に、じいさんの鍛冶場で。鉄の熱膨張が中の水晶を圧迫するんじゃないかなって。ここも暑いからな。でも大丈夫だ。冷やせば治る」

「そういえばガリア、さつき痛いって……。痛み感じるの？」

「不思議だろ。鉄なのに」

「あ、別にそういうイミジや……」

「いや、不思議なんだ。痛みなんて前は感じなかつた。俺の中にはルカの父親の魂がいるから、その魂が知つてる痛みの感覚を、水晶の圧迫感とつなげてるんじゃないかなって。そう考えただけど……」

「違うよ」

キッパリとルカは言った。

「違う？」

「うん、違う。それはね、ガリアが人間になつたつてことだと思つ
な、あたし」

「そう…なのかな？」

「そう！だつてその方がいいでしょ？」

ルカはニッコリ笑う。『人間になつた』それはマサムネにも言わ
れた言葉。でもそれ以上に、ルカから言われることが嬉しかった。

「科学の子が聞いて呆れるぜ。でも いいな。それ」

ガリアは笑つた。

「そうだ！ねえ、ガリア。お礼は何がいいかな？仇討ちの」「
お礼つて 別に俺はルカのためにやつたつてわけじゃ…」「
ううん、それでもいいの。… そうね」「なんだよ？」
「キスしてあげようか？」

一瞬の間。凍り付くガリア。

「あ、ホラ、痛みを感じた記念つてこともあるしね」

ルカは少し照れるように笑つた。

「俺の顔は鉄だぞ」

「うん。でもあたし、鉄好きよ。知つてるでしょ？」

「そうだつたな…」

何がそつなのか？それでもガリアはなんとなく納得した。

「分かつた…」

「じゃあ、行くよ」

ルカは膝をついて、片膝を立てたままのガリアの横顔を見る。やがて吐息を感じるほどの距離感で不思議と、ガリアから体の痛みが消えた。

やるべきもの

横に寝転がるそれは、最初、腕は肘の間接から左右とも逆側に曲がり、首も不自然なほどに折れていた。その生命感のない骨格のまま、それは手をついて立ち上がろうとする。しかしバランスを崩して無様に倒れた。だがそれでも床を這いずり回りながら、徐々に間接の位置を調整していくと、ようやく立ち上がり、体を宙に浮かせた。が、思わしくない。バランスが悪い。ふと、足を一本失つていることに気づく。膝から下がないのだ。

それは未だ静止することのない、アレシアの姿だった。

ホールの一角に膝から下のパーツと、さらに間接の鉄球を見つけたアレシアは、弧を描くようにして這い、なんとかそこまで辿り着こうとする。這つてさえ、真っすぐ進めないので。それでもなんとか辿り着くと、パーツの一つ一つを所定の位置に当てはじめていく。異常はない。パーツは吸い付くようにアレシアの体にはまつた。

今度は全く違和感なく立ち上がり、ホールを見上げる。もはやそこに、さつきまでの無様なアレシアの姿はない。

チタン製の瞼をいつたん伏せた後、アレシアは地面からゆっくりと離れていった。そしてその上昇に呼応するように、ホール内壁をレリーフのように飾る『タイプA』たちが動き出す。

百体にも及ぶ彼らは、手を、肩を、その他全てのパーツを一つ一つ確認するように動かしている。動作チェックだ。アレシアが塔の屋上付近に辿り着き、全てのタイプAの動作チェックが終わるまでには、かなり長い時間を要した。

やがて百体分の起動作業は完了する。

「まだ 終わらない…」

その、執念に取りつかれたような声。それは、意志のないはずのアレシアが、初めて発した念だった。

「そういうば痛かったんだよね。ゴメン。あたしヘンなこと言い出しちゃって」

ガリアとルカの二人はまだ、溶鉱炉のある部屋にいた。右腕を押さえていたガリアが、軽く首を振る。

「気にするな。それより上方に窓があるな。あそこから直接外に出られそうだ」

ガリアは、部屋の天井付近にある窓を指差して言った。かなり高い位置だが、空を飛べる彼には関係ない。

「エンドラは、このまま？」

「ああ。別に俺たちはエンドラを破壊しに来たわけじゃない」

「タイプAとかは？ 確かプログラムが入ったままなんじゃ？」

「タイプAはゾッドの思念しか受け入れないようにプログラムされていた。放つて置いて問題ないだろう。そう」

ガリアがふと思い立った。

「それとアレシアも」

「え！？ アレシア、倒したんじゃないの？」

「動けないようにはした。ただ、壊れたかどうかまでは確かめるヒマがなかつたんだ。もっともヤツもゾッドの命令がなければ動けないのは一緒だからな。問題ないさ」

「でも……」

ルカは不安そうに続ける。

「例えばさ、自分の主人が死んで怒つたりとか　ないかな？」

ガリアは首を横に振る。

「アレシアに感情はない。少なくともまだなかつた。俺が言うんだから説得力あるだろ？」

するとようやく、ルカは笑つた。

「良かつた。これ以上戦つて壊れるのはね。見たくないんだ。この都市のどこかにお父さんが作った会社もあるんだろうし……」

「そうだな。俺も早くルカが物を作るのが見たい」

すると、ルカは目の色を変えて大声で迫る。

「ホント！？ホントにそう思う？」

「あ……ああ。ルカの作るものは好きだ」

その一言はルカを歓喜させた。生み出したものが他人に認められた時の喜び。ましてガリアに讃められるなど、考へてもいなかつたのだ。ルカは押さえようにもじぶれるような笑顔で笑う。

「何いつまで笑つてんだよ。さつさとマサムネのところに帰　えつ

？」
「え、なーに？」

つい笑顔で聞き返すルカだったが、すぐにガリアの様子がおかしいことに気づいた。

ガリアはつぶやくよつと語りつ。

「声が…」

「声？」

意味が分からぬ。しかしガリアは真剣だった。

「誰が…呼び掛けてる？」

「呼び掛けてるって　あ、あれ？」

異変はガリアだけでは済まなかつた。

「なんだろう？　へンだ…あたしも…」

それはまるでラジオのチューニングを合わせるかのよう。何者の声が最初は遠く、時に近く、そして突然クリアになつた。いや、それは声じやない。正しくは思念。瞬時に誰のもののか分かる思念。それが呼び掛ける。でも一人には信じられない。というより有り得ない！死んだはずだ。

（ガーリアあ。聞こえるだらう？私だあ）

二人は同時にお互の顔を見た。そしてこの異変が、自分だけに起つた幻聴などではないことを確信する。

「きさま、ゾッドか！？」

「な、なんで…？」

（ハハハハッ！私は本当に運がいい。何しろこうして入れる肉体が、まだ残っていたのだからな。いやいや、私自身が持つ気力にも畏敬の念を感じてもらいたいもんだがなあ。今私はアレシアの中にいる。そうだ、ガリア。アレシアにとどめを刺さなかつたお前のミスだよ。フハハッ！）

ガリアは拳を握り締める。

それは執着だ。ゾッドの生に対する並々ならぬ執着。それ以外に理屈などない。だがただ一つ、アレシアの中に心の仕組みが出来上がっていたことは、ゾッドにとって幸運だった。魂が入ることを可能にした。

（さあて早速本題だが、私の要求は分かるな？もちろんトウワンボだ。私はホールにいる。すぐに持つてこい。そうすればお前たち二人、逃がしてやつてもいい。抵抗は無駄だぞ。タイプAの起動は既に完了している。ハハッ！勝てまい？逃げられまい？タイプA百体とアレシアの力を持つたゾッド・シャゾット様だからなあ！ハッハツハーダッ！たあーのしいーなあー。生きるつてのはさあつ！）

そして不意に、ゾッドの念が消えた。

「あ……」

「ガウガウ」と鉄の煮えたぎる溶鉱炉の音が、突然の静けさを演出する。

正直、二人にはショックだった。特に思念の影響をよりまともに受けたガリアは、ゾッドを殺すことなど不可能にさえ思えた。それは強靭な生命力に対する、純粹な恐怖。

「ルカ、トウワソボを貸せ」

右手を差し出すガリア。ルカは真剣な、探るような瞳でじしまくへりくの間、ガリアを見つめる。そして言った。

「いやよ

その声はきつぱりと、しかし冷静だった。

「なぜだ？」

「じゃあガリア、答えて。このトウワーンボをどうするつもり?」

「溶鉱炉に投げるだけだ」

その言葉は予測していた。なぜなら瞳が語っていたから。ルカは奥歯を噛み締め、両手にトウワーンボを握り、ガリアから背けるようにして立つ。

「ぜつたに渡さない！そんなことしたらガリアだつて死んじゅうでも他に方法はない。ゾッドは俺たちを生かすつもりなんて、さらさらないぞ」

「だからってそんな方法 ねえーこのトウワーンボで何とかできな

いの？」

「ゾッドならタイプAのデータを消去することもできるだろ？が…

俺にはムリだ。プロテクトがかかってる」

「戦つたらやつぱり…？」

「勝てない。数が多くすぎる」

わづぱまと答える。

「じゃあ逃げれば！」

「思念が入ってきたのは、俺たちの動きがマークされてる証拠だ。

外すには距離を取るしかないが、俺のスピードじゃダメだ。だから

そのトウワンドボを貸せ

「いやつ！」

首を振り、ルカは大声で拒絕した。

「いいから貸せ！それで全て終わる」

「なんでそんな簡単に言うの！ガリアだつて死んじやうのに　なんでそんな簡単に言えるのよ！－」

「ルカが生き残るにはそれしかないんだ！－せつせと貸せよ－」

ガリアはルカの腕を強引に取った。それを嫌って、床につづくまるルカ。

「いやだ。生きなくていい！ガリアの身代わりでなんて生きなくていい。生きたくない！」

そして顔だけをガリアに向けて、叫ぶ。

「生きるもんかっ！」

「馬鹿なこと言うな！」

ガンツー！と、押さえきれなくなつた興奮を、ガリアは拳で床にぶつけた。それでもルカは負けない。

「馬鹿なことじやないつ！あたしはガリアと一緒に生きたいんだよ。それが大事なの。ねえ、生きよう！死のうとするガリアなんて見たくない。だったら先にあたしを殺してよつ！一瞬の痛みで済む。あたしのためにガリアが死んだら一生痛い。そんなのヤダッ！」

床にはポタポタポタポタ…涙が落ちる。そして堪えきれなくなつたのだろう。ルカは、わんわんと泣いた。だがそれでも、トウワンボを絶対に渡さないという意志は固く、拒絶する姿勢を全く崩さない。

ガリアはしばらくの間、それを見ていた。そして思う。この少女と接している時、自分はどんどん人間になつていく。と。もちろんそれはいつも思つていたことだ。でも今この時ほど、強く思つたこともなかつた。

他人を ルカを守るといふことがどういふことなのか?ずっとと考えてきた。単に命を守ればいいと思っていた。でも違う。少なくとも彼女に見せる最期の姿は、トウワンボを壊して、バラバラになつて死ぬことではない。その時のルカの痛みを考えた時。それを自分で置き換えた時。そんな選択は生まれない。生まれるはずがない。

『ガリアの痛みは、あたしの痛みでもあるつて、分かつたから…』

以前ルカが言つた言葉を、ガリアは思い出していた。

「そういうことか…」

戦うこと。やるだけやること。それで結局同じ結末が待つていたとしても、残すものは違つ。少なくとも、死ぬ間際に見る夢は違つはずだ。それが守るといふこと。

「悪かった…」

ガリアは立ち上がる。そして、うずくまつたままのルカの頭にそつと手を置いた。顔を上げるルカ。そしてその手を彼女の前に差し出す。一瞬警戒されるが、ガリアは笑つて答えた。

「違う、違う。トウワンボじゃなく…手。出せよ、ホラ」

ガリアは、ルカの差し出す手をしっかりと握ると、グイッと引っ張つて立ち上がらせた。彼女はまだスン、スン、と、時折鼻をすすぐ、瞳からは涙がこぼれ落ちていく。ぬぐおうとするルカの手を追い越して、ガリアの指先がこぼれる涙をすぐった。

「それ以上サビても知らないから…」

憎まれ口にも、ガリアは笑って答える。

「俺の手は合金だぜ。そつ簡単に錆びるかよ」

ルカはガリアの胸にコシンと額を置いて、残りの涙を彼の衣服で拭き取る。そしてそのままの態勢で言った。

「どうするつもりなの？」

「まあ…戦つてみるぞ」

ガリアは気楽に答える。

「あたしも 戦いたい。ガリアのこと、守りたいもの…」

ガリアは黙つてうなずいた。どうせ止めても無駄なことは分かっている。それはお互いが胸の内に秘めた、ある種の決心。とその時、ガリアがある音に気づいた。

「なんだ！？」

それはルカにも聞こえた。

予期せぬこと 恐らく誰一人、予期していなかつたに違ひない。

ズズーン、という遠くから響く音。それがきつかけだった。

「うわっ！」
「キャアッ！」

תְּתִבְנֵה תְּתִבְנֵה

それは音と言うよりも衝撃。二人を叫ばせたものは、爆発音の後に続く地響きだった。そして爆音は尚も続く。地響きは、更に大きくなつていいくのだ。

「な、な、何事だあ！？」

ゾッドが叫ぶ。その衝撃はホールにも直接的に響いてきた。

「じ…城塞砲か！ガ、ガリアのはずがない。では一体誰が！？」

「ドーンー、ドーンー」と、弾は断続的に何発も何発も塔に命中し、その度に壁面がえぐられ、破碎される。

ホールの中は尚謹まじかつた。塔を形成する切り石やその破片が次々と崩れ落ちていく。一部のトウワン水晶入りの切り石も、そのほとんどが衝撃によつて破壊され、塔の安定を更に奪う。今や破片は内に外に雨の如く落下し、地響きを轟かせていた。影響は塔だけではない。ようやく起動を完了したタイプAにも当然及んだ。落下する柱の直撃で破壊、又は叩き落とされ、次々に埋もれていく。最後まで外の目に触れることなく、まして神の威儀など残すこともない。

く、百体ものタイプA全てが、潰えようとしている。

「うわあああああああああ！」

そしてその中でアレシアの　いや、ゾッドの叫びはあつといつ間にかき消されたのだった。

それはもう塔とは呼べない。瓦礫の山だ。しかし砲撃は尚も続く。今や破壊された塔に変わって、残りふたつあるエンドラの他の城塞砲がターゲットとなつた。狙いはほぼピンポイント。ようやく東の空から昇り始めた猫の爪のような月も、射撃手に微力ながら手を貸す。だがそれ以上に、ガリアをも恐怖させた射撃のカンの良さが、それを成し得ているのだ。砲撃は的確に塔を破壊していく

そう。それはゾッドに死刑を言い渡された衛兵の仕業だった。これは彼が起こした自国に対する反乱なのだ。生きるための炎を消そうとした者に対しての、言わば復讐。それは、彼が守っている誰かのためであつたかも知れないし、守るべき何かへの執着であつたかも知れない。どうにせよ根に秘めたものは変わらない。

活気のないこの世界においても、異端者は確實に生まれている。やがて彼らが異端者ではなくなるような時代。おそらくは比較的近い未来に、世界は再び動き出すだろう。トウワン人に蹂躪される前の先進国がそうであつたように。またそれに代わり、新しく生まれた初期トウワン王朝がそつだつたように。

それが文明の流れであり、波もある。底の時代に生きる人間たちに未来を感じることができなくとも、未来は必ずやって来る。世界を変える力、技術、魔法、何でもいい。それは必ず現れる。そして再び、新しい活気が生まれるのだ。ただ、それがどういう文明なのかは分からない。ならば生きるしかない。それが駄目なら、子孫に委ねるしかない。

いずれにしろ、世界はそう簡単には終わらないのだ。

死ぬ間際に見る夢

エンドラの都市を照らす明かりが突如消えた。今そこに陰影を落としているのは微かな月明かりだけで、通りゆく薄い雲が時折、その光をも奪う。さっきまでの砲煙が上空に上がり、雲となつたのだ。今や新たに生まれる砲煙はない。静かなものだ。もちろん、エンドラ中がパニックであることは変わらない。しかしこの一帯、塔の周辺だけは、そういう喧騒を起こす人間の姿はなかつた。ガリアとルカの二人を除いては……

二人は溶鉱炉から脱出した後、しばらくの間空中でその凄惨な、塔が崩壊していく様を見ていた。ゾッドが中から出てくる危険はあつたが、それでも逃げようとは思わなかつた。逆に見とれていたのかも知れない。時に破壊は、人の目を捉えて離さないものだ。

ようやく砲撃が止んだ時、城塞砲から逃げ出していく一人の男。彼は一体誰だったのだろう？ それになぜこんなことをしたのか？ ガリアたちには知る由もなかつたが、思わず彼の無事を祈らずにはいられなかつた。

もう砲撃がないことを知つた二人は、恐らく死んだであろうゾッドや、破壊されたタイプAの存在を確認するために、地上へと降りていく。

「ここで待つてろ。塔を調べてくる」

塔　というより瓦礫から少し離れた場所にルカを残し、ガリア

はゆっくりとそこへ近付いて行つた。正に巨大な山となつた瓦礫を前にしてガリアは立ち止まる。そして、生きているトゥワン水晶の存在がないか、瞑想しようとした。

瓦礫の隙間。暗闇から風が　ガリアの脇をすり抜けた。

「キャアアア！」

背後でルカの声。

「しまつた！」

瞬時に振り返つたガリアが見た先。そこにはアレシアが　いや、ゾッドがルカを片手で羽交い締めにしている。

「お…お前が二、憎い。なぜうまくイカンのか？全テうまくいッてタ。私にハ運が…いや…チ、違う。お、俺ノ力…ダ。なのに…ガ…お、才前が全てつ…クツ！クソツ…お前がニ…憎イ。お前をこの手デ…コ、殺しタイ。殺したいコおオオ！」

ゾッドの憎しみはそのまま、ルカを締め付ける力となつた。そのきやしゃな骨が、ガリアにもはつきりと聞こえる、バキン…という音を立てる。

「あつひ…ひあつ…」

ルカは、痛みから逃れるために体を伏せようとする。が、ゾッドの力がそれを許さない。ムリヤリ態勢を起こされて背は逆海老反りになり、体は浮きかけ、肩の間接は外れかかっていた。それでもガリアは構わず、歩み寄つていく。そうすることでしか彼女を救えないと　そうガリアは判断したのだ。

「そんな荷物を抱えて俺を殺せるのか？鉄球はどうした？」

ガリアはチャクラムをホルダーから外す。

「て、て、テ、鉄球？そんナモん…アルかよバーク。この女は盾だア。そのチャクラムを飛ばスが最期。死ヌぞ。」…こノ女。死ヌ…よ。ツ、次の瞬間才…お前も死ぬヨ。俺はお前…ヨリ早い」

「ルカ、動くなよな」

痛みにルカは答えられない。

「バカがあ！盾ハ俺がうゴ…動かスン…だよ。し…死ねよ才おオオつ！」

ゾッドはルカを盾にして、一気に距離を詰める。そのダッシュ力はまさにアレシアのものだ。

ガリアは、腰の辺りに下げ持っていたチャクラムを軽く放り投げ、

後は念によつて一気に飛ばし、加速させた。

「行けええええっ！」

ガリアの叫び。

ゾッドはガリアがチャ克拉ムを放つた瞬間、その軌道を解析し、ルカの体をその線上に持つていこうとした。

しかし、ゾッドの心はまだ人間だった。人間の速度で物を捉え、人間の速度で思考していた。それは単に慣れの問題。いつかは使いこなすだろう。が、少なくとも今はまだ、アレシア本来の能力には遠く及ばなかつた。ガリアは、ゾッドの言葉の不自然さから、そのシンク口の悪さを見抜いていたのだ。

ガキンッ！

チャクラムはル力を締め付けているゾッドの右腕に、見事命中した。彼には何も見えなかつただろう。ガリアのチャクラムは人間の目には速すぎる。

ゾッドの右腕が後方へ弾かれた。その瞬間、ル力の体は放り出され、すかさずガリアが受け止める。しかし、その上からそのまま覆いかぶさろうとするゾッド。せめて、ガリアを捕まえて、力任せの接近戦に持ち込もうというのか？

「！」のヤロウツ！

ガリアはそのまま仰向けに倒れ込み、下から強烈な蹴りを、ゾッドの腹部に当てた。柔道の巴投げのような形となつて、ゾッドはガリアの後方へ飛んでいく。完璧なタイミングだつた。

「おアあアアつ！」

ガシャーン！

ゾッドは再び塔の瓦礫の中へと突つ込み、その上を更に、大小様々な破片がガラガラと崩れ落ちる。ガリアは仰向けのままそれを確認すると、すぐに両腕に抱いているル力を見た。

「ル力！大丈夫か？」

一瞬の間。

「い、イタタタタ……だ、大丈夫」

両肩を押されて痛がるが、大丈夫そうだ。少なくとも命に別状はない。

今はそれ以上ルカを気遣つてる暇はない。ガリアは彼女を抱いたまま、浮かぶように立ち上がりつて、瓦礫に向けて瞑想する。さつきの一撃はツボに当たわけではない。すぐにまた、襲つて来るはずだから…

「……」

しばらくの間、ガリアは黙つたまま何も言わなかつた。

「どうしたの？ゾッドは？」

ガリアはどこかうわの空で、ルカに顔を向けた。虚無感と言つか、つこせつせまでとはまるで、こじみ出る空氣が違うのだ。

「ねえガリアー・どうしたのよつー…？」

「ン…」

そしてようやく、言つた。

「…ルカにも聞かせてやる。ゾッドの声…」「え？」

それはゾッドの個人的な思念だつた。本来なら聞こえないものだが、プロジェクトする余裕もないのだろうか？ガリアには聞くことができた。彼はそれを、自らのトゥワーン水晶を介してルカにも送つてやつた。

（…たまるかッ！死んデ…お、オ前…ダ、誰だよおオ…なンで、なん
で俺ヲ…食べるンだよ。死んでたまる力…死んデ、二タくなイ…
死にたクないヨお…。食べるナよ。俺ガ…なクナる。なンで、ナン
で…ズつと好きダつたノに。な…デ僕を…捨テ…の…オ母…
さン。いキた…なイ。ダつて…つまら…ナい。みんな…ボク…
バカに…先生モ…みんナ…お母サ…ん…母…さ…
好キ…なの…な…ん…で…スキ…）

やがて思念は聞こえなくなつた。

「い、今のは…何？」

ルカはガリアを見る。彼は正面を見据えたまま、答えた。

「ゾッドの心が食われたんだ」

ルカの顔が一瞬引きつつて、逆に笑顔のようになってしまった。

「食べられたつて…誰に？」

「アレシアだ。ヤツの中には心が…感情が芽生え始めてる。きつ
かけはゾッドの魂だつたのかも知れない。でもその成長にゾッドの
心がジャマになつたんだろう」

「そんなことが…」

「ゾッドもずいぶん抵抗していた。持ち前の執着でな。でも戦う相
手が分からなくて困惑しているようだつた。ゾッドは意外なモロさ
を見せた。見えない敵に対する弱さ…。ヤツが恐怖を感じた時、一
気に均衡が崩れるのが俺にも分かつた。もし相手がアレシアの中に
生まれた心だと知つていたら、勝敗も違つたかも知れない」

「お父さんと…同じに…」

小さな声で、ルカが言った。

「ああ。結局ゾッドはルカの父親にしたこと、アレシアにされたわけだ できすぎだな」

ガリアは、地面に落ちていたチャクラムを念で呼び戻すと、右手でキヤツチしてホルダーにしまった。

「さあ！今度こそ帰るつぜ。ルカ」

ガリアは努めて明るい声で話しかける。それは、思考で埋没しそうになっていたルカを、救う言葉ともなった。

「え？ あ、うん…。あ、でもアレシアは？ いいの？ ほつといてさ。だつて例えば」

ガリアは、ルカが喋っているのも構わずに抱き上げた。それはごく自然に ルカも言葉を止めることなくガリアのするに任せている。

「 例えばトウワソボを狙つて、またガリアの命を狙いに来るとか。もしかしたらゾッドの影響を受け継ぐ可能性だつてあるわけでしょう？ 心、食べちゃつたしわ。だつたら！」

倒すなら今！ そんな思いでルカは力説する。

「俺に生まれる前の子供を殺せつてのか？」

ガリアは笑いながら、できないよとばかりに首を振つた。ルカもあつさり笑う。

「そうね」

そして地面を離れ、二人は城壁を越えた。
いつしか東の空に浮かぶ雲はその腹に暁の光を受け、日の出が近いことを告げている。

一人がかつて体験したことのない、最も長い夜は、ようやく終焉を迎えるようとしていた。

だがまだだ。まだ終わらない。もう一つ、最後にすべきことがある。長い夜 それはマサムネにとつても同じことなのだ。彼は今もたぶん二人のことを想い、鉄を打ち続いているだろうから…

一人は夜が明けたことを告げに、マサムネの元へと向かうのだった。

「突然思い出しちゃった。帰ってきた時のマサムネ。意外に冷静だと思つてたらヤ、握手をギュッて。ううん、そんなもんじやないな。ボキッ！とか鳴つたもん。骨折れたかと思つたよ。でもまあ、嬉しいんだろうなあつて思つた。あたしもさ。帰ってきて良かつたつて…」

夕刻。黄昏色の海岸を、ガリアとルカの二人は並んで歩いていた。時に打ち寄せる波と戯れるルカ。もちろんガリアは一緒になつて海水に浸かるようなことはなく、ただ黙つてそれを見ていた。

「一度酒を飲ませてみるといい。どれだけ嬉しかったか分かるぜ」「え、ホント？ ヘー意外」

悪戯な笑みを浮かべるルカ。
そしてとりとめのない会話。

一晩中寝ずに待つっていたマサムネのことも、ルカも泥のように眠つたこと。ガリアはいつも倍は寝たし、起き抜けに見る夕日をルカが朝日だと勘違いしたこと。今夜は眠れるのだろうか？ などなど それはようやく戦いが終わつたことを、それが夢ではないことを、確認する作業でもあつたかも知れない。

「それで何、用事つて？ こんな遠くまで連れてきて。嬉しいけどさ。海 初めて会つた日以来だね」

ルカは思い出して、クスッと笑つた。ガリアがすぐ無口で、――

人膝を抱えて海を見ながら、一緒に来たことを少し後悔し始めた時のこと。

「海が一番いいだろ？と思つたんだ。ルカも見ておく権利あるしな？」

ガリアはふとじりからトウワンボを取り出し、ルカに渡した。

「これがどうかしたの？」

ルカはトウワンボをマジマジと見た後、首をひねりながらガリアに返した。

「もういいな……」

そう言つと、ガリアはおもむろにトウワンボを海へ向かつて投げた。

「ああっ！？」

思わずルカは叫ぶ。

トウワンボは夕日の光を受けて一瞬、輝いたようにも見えた。があつという間に東の薄暗い空の中へ消え、おそれくは着水、海底へと沈んだ。

ルカはガリアを見る。言葉が出なかつた。ただ口をパクパクとさせる。

「ルカが起きてくる前、じいさんと話しあつたんだ。じりじょいつてな。じいさんは納得してくれた」

「で、でも…。もしも壊れたらどーするの…」

納得できずに、ルカは詰め寄る。

「そう簡単には割れないだろ。百五十年の風雪にも傷一つなく耐えたんだ。トウワンボはただの石じゃない」

「かも知れないと、でもどんなに硬くたって必ず浸食する。波に揉まれたらいつかは砂になっちゃうよ。あたし、今から泳いで取りに行つてくる。マサムネに複合特性の鉄の箱でも作つてもらつて、ヒマラヤの秘境かどこかに埋めよう! それだったら絶対安心だし、ガリアも死はない」

慌てて駆け出そうとするルカの肩を、ガリアは落ち着いた様子でつかんだ。

「いいんだこれで」「でも!」

ガリアはそれでも首を振る。

「ルカだつていつか死ぬだろ? 同じことや。トウワンボがいつか自然に帰る時まで、俺は生きるんだ。そういうのがいい」

事もなげに言つ。

ルカは反論できなかつた。しかしそれでも不満そうにしているルカの頭を、ガリアはクシャクシャツ、と撫でた。

「それに、こうしておけば不意に最期の時が来ても自然に帰るんだつて、そう思うことができる。例え『失われた時代』と同じ理由で死ぬにしてもな。得体の知れない理由で死ぬなんて、思いたくないだろ?」

もはやル力は何も言えない。たぶん同じ立場だつたら自分もそうしていただろう そう思えたからだ。ハッキリと口にはしなかつたが、少なくとも彼女の表情から不満顔は消えた。そしてポツリと言つ。

「…トウワンボって、なんだつたのかな？」

ガリアは記憶以前、それが記録であつた頃の出来事を思い出した。

「オリジナルのゾッドは昔、こんなことを言つたことがある。トウワンボは魔法。科学では太刀打ちできない… ってな」

「魔法…か。そうね。かなわないもん。あたしの作るものじや…」

軽いため息混じりのル力の言葉に、ガリアは黙つて首を振る。

「俺にはル力の作るものだつて魔法だけだ
「え？で、でも そんなスゴイ物、まだ作つてないけど…」

照れ臭そうに、ル力は髪をガシャガシャと搔いた。

「そんなことないさ。送風扇から熱風が出たり、洗濯の水が沸騰したり、それから撃つなつて言つてるのに城塞砲ぶっぱなしたりな。もしかしたらル力そのものに魔法かかつてんのかな？」

人差し指をクルクル回しながら、ガリアは笑う。

「ひつどい！ちょっと期待しちゃつたじゃない。なんか誉めてくれんのかなあつて」

ルカはガリアの背にのしかかるようにして責め立てた。というより、じゃれ合つた。海岸に落とす長い影がひとつになる。

「讃めたんだぜ。ゾッドは予測したものしか作れない。でもルカは予測できないものを作る。ルカならトウワンボだつていつか作れる」と俺は思つけどな」

ガリアはルカの顔の間近で、そう言つた。

やがて…

夜の闇がゆづくりと、一人を包んでいくのだ。

ふと、マサムネは窓の外がすっかり暗くなつてゐることに気づいた。そして満足そうに「一二一」と笑うと、夕食の準備をしながら期待して待つのだった。

二人の言い訳を…

おわり

作者の克太タッシミです。

「ガリア」を最後まで『』愛読頂き、ありがとうございました。

この作品を執筆・完成させたのは1998年のことだ、もう10年
も前の作品となってしまいました。

時間が経つたものであると共に、こういった、ややライト向けを意識した初めての作品ということもあり、ぎこちない部分も有ったとは思いますが、如何だったでしょうか。
よろしければ感想などお聞かせ頂ければ幸いです。

またこれからも、新たな作品を投稿していく予定ですので、応援よ
ろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7577e/>

ガリア

2010年10月8日11時22分発行